ことはなかつたの？

クリステ　（にがにがしく）そんな覺えはない。わしが育つたあの貧乏な村ぢやみんな恐しい嘘つきばつかしだつた。

ペギイン　それにしてもさ、お前此頃になつてから聞かされたらう、世間を歩きながら自分の身の上話を婆さまや娘さんたちに聞かせて來たんだらうから。

クリステ　ペギイン・マイク、わしや今夜まで自分の身の上を何處でも話したことはない。此處でこんなにあけすけに話しちやつたのは、ちつと馬鹿正直だつたかも知れないが、わしの見たとこぢや、お前たちはみんないい人達で、それにお前は親切さうな女だから、ちつとも怖いと思はなかつた。

ペギイン　（袋へ麥藁をつめながら）それはお前、みちみち若い娘さんに會ふたんびに何處の小屋でも百姓屋でも、おんなじことをいつたんだらう？

クリステ　（彼女の側に行き、次第に聲を高くして）わしや全く今夜まで何處でもこんなことをいつたことはない。十一日のあひだ世間を歩いて、まだお前のやうな女を見たことはない。低い土手や高い土手を越して、北を見ても南を見ても、あつちこつちの石だらけの畑にも泥炭池のへりにも、男とふざけてるしやなしやなの若い娘つ子や、しやれた歩きつぶりの女たちはゐたが。

ペギイン　もしお前がくたびれ切つてゐなければ、きつとお前はオーエン・ロウ・オサリワンやデイングル、ベイの詩人たちのやうにいろんな談話や無駄話をするんだろ。あたしが始終聞いてるには、詩人てものはお前みたいなんだつてね——氣が立つとカツとして暴れまはる威勢のいい人たちだつてね。

クリステ　（前よりも少し近く彼女に寄る）お前は澤山指環をはめてるね、こんなことを聞いちや惡いかも知れないが、まだ獨身かい？

ペギイン　こんなに若くつから亭主を持つてどうしよう？

クリステ　（安心して）ぢやあ、わしとお前とは似てゐるねえ。

ペギイン　（長椅子の上に、袋を置いて、叩く）あたしはまだお父さんを殺したことはないわ。そんなことをするのは怖いもの、ただ腹ん中がむしやくしやして眼がくらむやうに腹が立つて來るのは、お前と似てゐるね、おしまひの時には大變な騒ぎをやつたんだらうね？

クリステ　（生れて始めて女と打解けばなしをする嬉しさに大滿足で）そんなことはなかつた。

意地のわるい女が山を越えてやつて來たんだ。おやぢは常からむづかしやだつたが、それがその意地わる女にけしかけられたと來ちや、惡魔が自分でやつて來ようが、惡魔の先祖が四人がかりで來ようが、とてもおやぢには敵はなかつた。

ペギイン　（不思議さうに）だけれども、お前を誰も怖がるものがなかつたのは不思議ぢやないか？

クリステ　（すつかり打明けた風で）わしがおやぢを殺したその日まで、アイルランドの國中にわしがどういふ人間か、だあれも知つてる人はなかつたんだ。わしも酒を飲んだり目をさましたり、食つたり寢たり、おとなしい、あたりまへのけちな野郎と思はれて、誰もわしのことなんぞ構つちやくれなかつたんさ。

ペギイン　（戸棚から蒲團を出して袋の上に重ねる）でも、若い女たちは捨てちや置かなかつたろ、さういふ連中とふざける時、お前どんなに氣取つたらう。

クリステ　（首を振つて無邪氣に）娘たちだつて、そんなことはなかつた。嘘ぢやない。村ぢやだあれもわしのことなんぞ構はなかつたのさ。唯、口のきけない野良の畜生だけが、わしの云ふ事を聞いてくれた。

（火の側に腰かける）

ペギイン　（失望して）あたしはお前がノルウエーの王様か東の世界の王様のやうな生活をしてゐたのかと思つたんだよ。

（テイブルの上にパンと牛乳の入れ物を置いてそれから男の側に來て腰かける）

クリステ　（氣の毒さうに笑ふ）王様のやうだと？　わしや夜あけから日のくれまで働いて、泥だらけになつて、掘つたり、動きまはつたりして、樂しみといつたら、眞つ暗な晩に一人で山に行つて兎泥棒することだけだつた、わしや密獵は上手だつた。神さまに濟まない話だがね、（頗る眞面目に）それで一度なんざ、肥料の鑶耙を持つてつて魚を突つ刺して、もうちつとで六箇月の禁錮をくふとこだつた。

ペギイン　ぢやあお前たつた一人で暗やみに外へ出るのを樂みにしてゐたの？

クリステ　さうさ、かはいさうに。まるでわしや聖マアチン樣の祭の日の日光のやうに嬉しかつた。北光が北の方や霧のうすいところに動いたりするのを眺めてゐると、兎がキイキイいつて鳴き出す、わしやファーズの中を追つかけるんだ。それから遊びたいだけ遊ぶと山から下りて來る、さうすると鴨や鷺鳥が往來ばたにのび〳〵と寢てゐやがる、肥料溜

んとこまで來るともうおやぢのいびきが聞えるんだ——大きな氣味のわりい鼾を掻てゐる時にはしよつちうやつてゐた。起きてる時にはしよつちう怒鳴つてる人だつた。まるで惡たいついたり怒鳴つたり呪つたりする金びかの軍人みたやうだつた。

ペギイン　まあ、ほんとに、くはばら、くはばら。

クリステ　まつたくさ、おやぢが幾日も幾日も飲み續けてゐて、眞赤な明け方か、そいでなきや、夜中に起き出して、五月時分のとねりこの樹のやうに素裸になつて庭に出て、星の面へ土塊を投げつけて見たり、仔豚だつて牝豚だつておびえ死んぢまひさうな眞似をやらかすとこを見ちや、お前だつてさういはずにやゐられまい。

ペギイン　あたしだつて屹度その人が怖くなるわ。それでお前とお父さんとたつた二人切りだつたの？

クリステ　さうよ、ほかにだあれもゐやしねえ。よしんば、うんとたくさん息子や娘がゐて廣い世間を方々押し歩いてゐたところで、一人だつてあのおやぢを死んだあとでも呪はずにやゐられまい。夜中のまつくらがりに目が覺めて、咳をするつたつて、くしやみをするつたつて。

ペギイン　（うなづきながら）ほんとにへんな親子ねえ。あたしはまだ我家のお父さんのことをそんなに呪つたことはないよ。もうあたしも二十歳とちよつとになるけれど。

クリステ　わしのおやぢならお前だつてきつと呪はずにはゐられまい。うちのおやぢが人に迷惑をかけずにゐたなあ、巡査に手向ひしたり人と喧嘩をしたりして二ケ月三ケ月禁錮されるか癲狂院に押込められてゐる間ぐらゐなもんだつた。（沈んだ調子で）おかげで、わしもつらい目を見てくらして來た、火曜日の日にやつつけて頭をぶち割るまでといふもの。

ペギイン　（彼の肩に手を載せて）お前、此處になら落ちついてゐられるだらう、誰もお前をいぢめやしない、お前のやうな立派な若い衆はこれから澤山いい思ひをするが本當よ。

クリステ　さうだとも。わしだつてうんと力があるし勇氣もあるちやんとした男なんだから……

（誰か戸を叩く）

クリステ　（振にかじりついて）ああ大變！　こんな遲くに誰が來たんだ、この頃わしや巡査と幽靈が恐しくつて。（再び叩く音）

ペギイン　だれだい？

聲　（外から）わたしだよ。
ペギイン　わたしつて誰だい？
聲　後家のクインだよ。
ペギイン　（急いで立つてパンと乳を男に與へて）　さあどんどん食べて眠さうに見せかけるんだよ。あの女はお前が話すきだと見たら、夜明けまででもおしやべりを續けるから。
（クリステはパンを手に取り戸に背を向けて恥かしさうに腰掛ける）
ペギイン　（戸をあけて、あらつぼくいふ）どうかしたの？　それとも、こんな遲くに、何がいるんだい？
（後家クイン一歩踏み入つてクリステをのぞき見る）
後家　わたしや此下でショオン・ケオとレイリイ神父さんに會つてね、お前さんとこの珍らしい人の話を聞いたのさ。それで今頃はその人が酔つぱらつて怒鳴つて騒いでお前を困らせてやしないかつて、二人とも心配してゐたよ。
ペギイン　（クリステを指して）怒鳴つてるかどうか見ておくれ。いま、夕飯と乳で眠くなつて寐ようといふところさ。歸つてレイリイ神父さんとショオン・ケオに聞かせておやり。

後家　（進み入つて）わたしやもうあの人たちには會はないよ。實はね、その若い衆を連れてつてわたしんとこへ泊めてくれつて、あの人たちに頼まれたんさ。
ペギイン　（おどろいて）今夜かい？
後家　（側へ來て）今夜さ。神父さんがいひなさるにや、どうもさういふ人間を母のない娘の家に泊らせるのは不都合だとさ。（クリステに向つて）お前さん、こんばんは！
クリステ　（恥かしさうに）へえ、こんばんは！
後家　（面白半分の好奇心で眺める）まあお前さんはにこにこした可愛らしい男ぢやないか？お前さんが腹を立てて人殺しをしたのは、よくよくのひどい目に會つたからだらうね。
クリステ　（不安らしく）まあ、そんなもんでせう。
後家　でせうどころぢやないよ。かうやつてお前さんが乳と菓子を前に置いておとなしく腰掛けてるのを見ると、ほんたうにわたしやかはいさうになるよ。お父さんを殺すよりは教會問題（カテキズム）でもいつてる方がお前には似合ふよ。
ペギイン　（幔場でコップを洗ひながら）此人はね、世間の偉い人とでも立派に並んで行けるんだからね、餘計なお世話だよ。さあお歸り、先週（せん）の火曜日から歩きづめで草臥れ切つて

るんだから、何時までも邪魔をしないでおやり。

後家　（大人しく）御飯が濟んだら、二人で出掛けようよ。若い衆さん、お前とわたしは丁度好い連れだねえ。八月の市でペニイ貰ひの詩人が唄つてるのは、丁度お前とわたしのやうな人たちのことだよ。

クリステ　（無邪氣に）お前さんもお父さんを殺したんかい？

ペギイン　（卑しむ如く）殺すものかい。此人はね、古い鋤でお父さんを打つたんだとさ。それで其さびの毒がお父さんの血を腐らせて、それから弱つて、たうとう死んぢやつたんだよ。そんな卑怯な殺し方をしたのぢや、若い衆たちもほめやしないわ。（クリステの左側に行く）

後家　（機嫌よく）褒められなくつてもね、なにしろ、子供に死なれ亭主をなくした後家の女の方が、お前のやうに路傍で一寸眼づかひされても、直ぐにその男の後を追つかけてくやうな娘つ子よりや、若い男の爲になるお連れだよ。

ペギイン　（ひど〳〵怒り立つて）クインさん、お前にそんなことがいへるかい、この人の顔が見たいばかしに夢中になつて山坂を駈けて來たくせに。

後家　（馬鹿にして笑ひながら）わたしがかい？　まあ何しろレイリイ神父さんがお前さんたちを一つに置くまいといふのは利口だね。（クリステを引つぱつて立たせる）おやぢさんを殺した男は、よつぽど人を迷はせるね。ねえ、若い衆さん出掛けた方がいいよ。さあ立つてわたしと一緒にお出で。

ペギイン　（クリステの腕を抑へて）この人はやらない。此處の小僧になつたんだから、お父さんの留守に外へ出して盗まれたり誘拐されたりは、あたしがさせない。

後家　ひるま働く店に夜まで泊る小僧があるものかね、若い衆さん、わたしと一緒に來るがいいよ。そして、上り坂の端にちよびつと立つてるわたしのちつちやい家を見ておくれ。

ペギイン　クリステ・マホン、朝までお待ち。この人の家といつたら、孔だらけの藁屋根に草がいつぱい生えて、山羊の牧場よりも茂つてるんだよ、そして家を片づける宿なしつ子一人だつてゐやしないのさ。

後家　わたしがちつちやい庭で色々工夫してゐるところを見たらクリステ・マホン、このわたしが獨身でくらすやうに神様がこさへたんだとお前にも分かるわ。屋根を葺くのだつて草を刈るんだつて羊の毛を切るんだつて、わたしほどの上手はメヨに二人とはゐやしない。

ペギイン　（大聲で嘲る）ほんたうにお前さんは工夫するやうに神樣に造られてるんだよ。お前さんが黑い小山羊を自分の乳で育てて、コンノオトの大主敎樣がその山羊をスチウにして食べたら、人間の味がしたといふのは評判な話ぢやないか？　それからお前さんがフランスから來た狡猾な船頭の顏を剝つてやつて、あの山をピョイ〳〵躍ねて歩く山羊の肝臓でもよぢれさうなひどい煙草を一ぷくと三ペニイのお錢を貰つたといふのも評判の話ぢやないか。

後家　（面白さうに）若い衆さん聞いたかい？　一週間もたつとあの調子でお前の惡口もいふんだよ。

ペギイン　（クリステに）そんな人に構はずお置き。いつまでも此處でわたしたちの邪魔をしずと、さつさと自分の豚小屋に歸れといつておやり。

後家　今歸るよ。だが此人はわたしと一緒に行くんだよ。

ペギイン　（クリステを振り動かして）これ、お前は啞かい？

クリステ　（怖々、後家にいふ）ありがたうどさんすが、わしや此處の小僧になつたんだから、此處にゐた方がよどさんす。

ペギイン　（得意げに）そら、聞いたかい？　さつさとお歸り。

後家　（部屋を見まはして）こんな時刻に山を越すのはさびしいわ、もし此人が一緒に來てくれないんなら、わたしや今夜は此處へ一緒に泊めて貰はう。ペギちやん、わたしをその長椅子に寢かしとくれ。あの人は爐の側に寢ればいい。

ペギイン　（言葉短かく烈しく）いやだつてばさ。歸つておくれ。歸らなけりや追ん出すよ。

後家　（自分の肩掛を身に引寄せて）やれやれ、二十も年が上だと、こんなにも嫌はれるんかね、（クリステに）若い衆さんおやすみ。そしてお前も氣をおつけよ、もしあんな者とふざけ合ひでもしたら、とんだ目に會ふよ、あの娘はね、キラキインのショオン・ケオと夫婦になるのに、羊の皮の書付が來るのを待つてるばかしなんだから、これはお前に聞かせろつてわたしがいひつけられて來たんだよ。

クリステ　（ペギインが戸を鎖すと、その側に行つて）あの人がしまひにいつてたのはなんの事だい？

ペギイン　嘘つぱちばかしだよ。氣におしでない。ほんとに、ショオン・ケオは失敬な奴だ、あたしに探偵をつけてさ。待つてろ、今度とつ捉へたら、待つてるがいいや。

クリステ　お前さん夫婦になるんぢやないのか？

ペギイン　主教様がわざわざ歩いて來なすつて、あの人と結婚さしてやらうつたつて、いやなこつた。

クリステ　やれやれ神様ありがたい。

ペギイン　さあお前のベッドが出來てるよ。あたしがこのあひだ自分の手で綿を入れといた蒲團だよ。のんびりしておやすみ。明朝鶏が鳴いたら起すから、それまでゆつくりおやすみ。

クリステ　（ペギインが奥の部屋へ行かうとすると）神様もマリヤ様も聖パトリック様も深切なお前を守つて下さるやうに。（彼女は自分の部屋に入り戸を閉める、クリステゆつくりとベッドに納まりながら、非常な滿足を以て蒲團に觸つて見る）ふん、こりやさつぱりした柔かいベッドだなあ。とんだ運が向いて來て好い知り合ひが出來たもんだ——好い女が二人で俺のやうなものの爲に喧嘩してくれるのか——おら今夜になつて考へる、なぜもつととうのむかしおやぢを殺さなかつたもんだらう。

——幕——

第二幕

舞臺前幕に同じ。まぶしい朝の日光。クリステは愉快らしく嬉しさうな樣子で女の靴をみがいてゐる。

クリステ　（棚の上の德利を數へながら獨り言をいふ）向うに五十ある。彼方に十ある。あの上のが二十ある。德利が八十。茶碗が六つに毀れたのが一つ。皿が二枚。コップが澤山。瓶はあんなに澤山あつちや、學校の先生だつて勘定するのに骨が折れるだろ、あれだけの酒があれば、クレヤの郡中の金持も學者もみんな酔つぱらはせてしまへるだらう。（靴を注意深く下に置き）これであの女の靴も今夜はけるやうに綺麗になつた、ブラッシもすてきに立派だなあ？　（彼はブラッシを下に置いてそろそろと鏡の方に行く）ふん、面白いとこだ、おらがなじみの犬や猫の代りに、賑やかな連中と一生騷いでゐられる。のらついてパイプを吸つたり酒を飲んだり、用といつたら時々お客に瓶の口を拔いてやつたり、コップを拭いてやつたり、水呑みを洗つてやつたりするだけのことだ。（壁から鏡を取り下して椅子の背に

立てかける。それから其前面に腰を下して顔を洗ひ始める）俺は好い男だと始めから知らねえでもなかつたが、我家の鏡と來たら、天女の顔でもひんまげてやぶ睨みに見せさうなやつだつた。おらあ今日からしやれることにする、皮膚もすべすべした綺麗な皮膚になつて年ぢゆう土や肥料をつつ突き返してる無作法な若い奴等と違ふやうにならう。（ピクリとする）あの女がまた來たかな？（外を見る）知らねえ娘たちだ。こいつあ困つた、上着も着ねえで、この長い頸も出しつぱなしだ、何處へ隠れよう？（外を見る）着物を着ちまふまで部屋にはいつてゐよう。

（上着と鏡を取り上げ奥の部屋に駈け込む。入口の戸を押しあけて、スーザン・ブレイディがのぞき込む、それから戸を叩く）

スウザン　誰もゐないよ。（再び叩く）

ネレイ　（スウザンを押し込んで後から續いて入る、オーナア・ブレイクとセイラ・タンセイも入り來る）二人とも山へ出歩くにや少し早過ぎるね。

スウザン　ショオン・ケオがあたしたちを瞞かしたんで、そんな人は始めつからゐないんぢやないかしら。

オーナア　（蕗と蒲團を指して）あれをごらん。昨夜は彼處に寐てゐたんだよ。もう行つてしまつたんぢやつまらないわ、こんなに早く起きて一生懸命に山阪を駈けて來て、お父さんを殺した人を一目も見ないぢや情ないわねえ。

ネレイ　あれがその人の靴ぢやあるまいか？

セイラ　（靴を取り上げる）もしかさうなら、お父さんの血がついてる筈だわ。殺された人つてものは、血が流れ出してぽたぽた落ちるつて、新聞にも書いてあるぢやないか？

スウザン　セイラ・タンセイ、そこについてるのが血ぢやないかい？

セイラ　（臭ひを嗅ぐ）沼の水らしいよ。なにしろこれは其人の靴に違ひない。あたしやこんなに白つぽい泥だの赤つちやけた泥だの芝だの海のこまかい砂だのくつついてる靴を見たことがないわ。ほんたうに、此人は、よつぽど歩いて來たんだねえ。

（右手に行き、男の靴を片つぽはいて見る）

スウザン　（窓際へ行き）マイケル・デエームスの靴をはいてベルムレットの方へ逃げてつたかも知れないわ。セイラ・タンセイ、お前追つかけといでよ。北の海岸で貴婦人の鼻にかみついたつていふ男が見たくつて、驢馬に車をひかせて十哩も出掛けて行つたお前のことだ

もの。（外を見る）

セイラ　（片つぽの靴をはいた儘で窓に駈けて行く）おしやべりはお止め。あたしたちは喘されたんだよ。（もう片つぽの靴もはく）あたしによく合ふ靴だわ。あたしこれを取つといて、神父様のとこへ行く時はかう、冥冬、何時神父様の處へ行つたつて、ろくな懺悔の種がなくつてきまりが悪いやうだもの。

オーナア　（戸口の側で聞き耳を立てて）しつ！　奥に誰かゐるよ。（少し戸をあける）男の人だわ。

（セイラは大急ぎで靴を振り脱いで前に在つた處に置く。一同一列になつて戸の隙からのぞいてゐる）

セイラ　あたしが呼んで見よう。もし！　もし！（男は首を出す）ペギちやんはうちにゐますか？

クリステ　（鼠のやうにおとなしく出て來る、鏡を持つてる手は背中の方に隠してゐる）わしが飲むお茶に山羊の乳を入れてくれるつて、いま、小山の方へ乳の出る山羊を見つけに行きました。

セイラ　あの失禮ですけど、お前さんがお父さんを殺したといふ人ですか？

クリステ　（鏡の掛けてあつた釘の方へ横ずさりに歩きながら）さうです。

セイラ　（持つて來た鷄卵を取り出し）ほんとによくお出でなすつたのね。あたしやお前さんに今日たべて貰はうと思つて家鴨の卵を二つ持つて來たのよ。ペギちやんとこの家鴨は駄目だけれど、これは極く上等の種よ。ちよいと手を出して、あたしのいつてることが嘘かほんとか觸つてごらんなさい。

クリステ　（恥かしさうに進み出て左の手を出す）こりや大きくつて重量がある。

スウザン　あたしはバタを一包持つて來てよ。なんにもつけずに馬鈴薯を食べるんぢやかはいさうですからね、お父さんを殺して遠くから逃げて來なすつたお前さんが。

クリステ　どうもありがたう。

オーナア　あたしはお菓子を少うし切つて來たわ。遠い處から歩いて來たんぢやお腹がすいてゐなさるだらうと思つて。

ネレイ　あたしは卵を生んでた小つちやな牝鷄を持つて來ましたよ——すつかりお料理がしてあるのよ——ゆんべ牧師さんの車にひかれてつぶされた鷄なのよ。この胸の脂肪を觸

つてごらんなさい。

クリステ　ほんとに、はち切れさうだね。（貰った品物を持ってゐる手の甲で觸って見る）

セイラ　つまんでごらんなさいな？　お前さんの右の手は勿體なくつて使へないの？（彼女クリステの背後に廻る）あら、鏡を持つてるわ。まあ、鏡を背中にあててる人つてあたし今日始めて見たわ。お父さんを殺すやうな人はよつぽどおしやれだと見えるわねえ。（娘たちくすくす笑ふ）

クリステ　（無邪氣に笑つて進物を鏡の上に積み重れる）ほんとに皆さん、今日はありがたう。

（後家クイン、戸口から急いで入り來る）

後家　セイラ・タンセイに、スウザン・ブレイデイに、オーナア・ブレイクかい！　まあほんとに、この朝つぱらから何の用でお前たちは此處へ來たの？

娘たち　（くすくす笑ひながら）あれがお父さんを殺した人よ。

後家　（娘たちの方に進み）わたしだつて知つてるとも。實はねえ、下でやる駈けつくらだの跳びつくらだの投げつくらだのの競技の中にこの人を入れようと思つて來たんさ。

セイラ　（威勢よく）クインさん、そりやいいわね。あたし自分のお嫁入の支度料を賭けて

もいいわ、きつと此人は勝つてよ。

後家　そんならお前、御馳走の世話役をするつもりになつて、此人に元氣がつくやうに食べさせて休ませてやらなくつちやいけないよ。（進物を手に取つて）若い衆さん、お前、御飯は濟んだの？　それとも、まだ？

クリステ　まだです。

後家　（大聲で）さあ、お前たちは大勢だから、さつさと働いて此人に朝飯を食べさしておやり。（クリステに）此處へおいで（娘達が茶を入れたり食事の支度をする間に自分の側にクリステを掛けさせる）そして、ペギインが歸つて來るまで、あたしたちに身の上話をしてお聞かせ、五月のお月様のやうにそんなに默つてにやついてゐないでさ。

クリステ　（そろそろ得意になつて）長い話だから、聞き倦きなさるだろ。

後家　お前みたいな立派な元氣な利口な若い衆がはにかむにはあたらないよ。お父さんの頭をぶち割つたのは自分の家でやつたのかい？

クリステ　（恥かしいうちにも調子に乘つて）いいえ。わしらはおやぢの畑の寒い斜面の石つころだらけのけちな畑を掘り返してゐたんです。

後家　それでお前、お金でもせびつたのかい、それともお父さんを追ん出しさうなお嫁を貰はうとでも云つたのかい？

クリステ　なあに、そんなことは云やしない。わしや一生懸命に掘りつ返し掘りつ返ししてゐると、「よそ見ばかりしやがる馬鹿野郎奴」とおやぢがいふんです、「さつさと神父様んとこへ行つて近え内にケイシー後家と夫婦になりますからつていつて來う」といふんです。

後家　その後家さんはどんな人なの？

クリステ　（恐しさうに）山を越えて來やがつたそりやおつかねえ奴なんです。年齢は四十五ぐらゐで、目方は二百五ポンドぐらゐもありさうな、片足びつこで、片目めつかちで、それで若い者でも老人でもなんでも御座れの評判のふしだら女たのさ。

娘たち　（クリステの周圍を取り巻き彼に給仕しながら）まあ大變だわねえ！

後家　それでどうしてお父さんは、お前を無理にその人と夫婦にさせようとしたんだい？

（彼女は鶏肉を少し取つて食べる）

クリステ　（次第に落ちついて食べながら）おやぢは、わしがやうな者はこんなむづかしい世間にうしろ見をやつてくれる人間が入り用だつていふんだ、ほんたうのところは、自分がその女の家に住まつて、その女の金で酒も飲めると、そればつかり考へてゐたんさ。

後家　火の氣のない爐よりも、後家の女よりも、宵のお酒よりも、もつといやなこともあるだらうにね。それでお前、お父さんを打つたのかい？

クリステ　（だんだんに興奮して來て）なあに、さうぢやない。わしやいつてやつた「おらあんな女と夫婦にはなんねえ、俺が生れた時、あの女が六週間も俺に乳を呑ましてくれたことは、世間でみんなが知つてゐる。あの女に惡たいつかれるのが怖くつて、鴉だつて海の鳥だつてあの女の庭には影もささないほどの鬼婆ぢやねえか」とかういつた。

後家　（からかふ調子で）丁度好い女房だわねえ。

セイラ　（熱心に）この人のいふことを氣におしでないよ。それでお前、お父さんを殺したのかい？

クリステ　するとおやぢが、「あの女は手前なんぞには勿體ねえくらゐだ、さつさと行かなきや、大八車にひかれた蟲けらみたいにおつ潰しちまふぞ。」といふんだ。「俺だつてさうはさせねえ」とわしやいつた。「さつさと出かけろ、出かけなけりや、おらあ今夜こそ惡魔に手前の手足を八つ裂きにさせつちまふぞ」「なあに、そんな事はさせねえぞ」とわし

やいつてやつた。

（眞直ぐに起き直つてコップを振り廻す）

セイラ　ほんとにさうだともねえ。

クリステ　（重々しく）その時お日様が雲と山との間から出て新しくわしの顏にあたつた、「神様に後生を賴め」つて、おやぢは大鎌を振り上げた。「お前こそ賴め」つてわしや鋤を振り上げた。

スウザン　勇ましい話だねえ。

オーナア　上手に話すわね。

クリステ　（褒められて自信が出來て、鷄の骨を振り廻しながら）おやぢは鎌で打込んで來た、其處をわしや東の方へ飛びのいた。それから背中を北に向けて、おやぢの脳天へひと打ち食はせた、喉笛まで割れておやぢはぶつ倒れた。

（彼は鷄の骨を自分の喉ぼとけの邊まで上げる）

娘たち　（一緒に）まあ偉いわ！　好い人ねえ！　ほんとにいい若い衆だわねえ！

スウザン　きつと神様が此人をクイン後家さんの二度目の亭主にする氣で此方の方によこ

したんだよ。クインさんも一生懸命に亭主を探してゐるんだけど、この土地の人はみんなおつかながつてゐるからね。ちよいと、セイラ・タンセイ、この人を後家さんの膝に載せておやりよ。

後家　この人にからかふんぢやないよ。

セイラ　（棚と幔場の方へ大急ぎで行つて二つのコップとビイルを持つて來る）ほんとにお前さんたち二人は英雄だわ。水夫の唄にある外國の戀人たちのやうに二人で腕を組合せて一口飲んでおくれ。（兩人の腕を組合せてコップを持たせる）さあ、さあ、此西の國の評判の連中の健康を祝つて一杯のんでおやり、海賊に說敎師に酒醸造者に其日かせぎの競馬騎手に、それから呑み助の巡査さんや、イギリス風の裁判を賣物にしてお腹を肥す陪審官だのの健康を祝つてさ。

（罎を振り廻す）

後家　セイラ・タンセイ、口上が上出來だね。さあクリステ。

（二人は腕を組み合せて男は左の手、女は右の手で持つて飲む。飲んでゐる最中にベギイン・マイクがブリキの乳入れを下げてはいつて來てびつくりする。一同飛び上がつてクリステから離

れる。クリステは左手に行く。後家クインだけは腰掛けたままでゐる）

ペギイン　（あらあらしくセイラに）何が入るんだい？

セイラ　（前掛をよぢりながら）煙草を一斤。

ペギイン　おあしがあるかい？

セイラ　財布を忘れて來たわ。

ペギイン　それぢや取りに行つといで、ここでふざけてゐないでおくれ。（後家に向つてもつと念入りに馬鹿にした調子で）クイン後家さんは何が入るの？

後家　（づうづうしく）糊を二錢おくれ。

ペギイン　（怒鳴り出す）へん、ノアの洪水のむかしからお前さんとこには家内中にシャツ一枚シイツ一枚白い物はないぢやないか。お前さんに糊は賣れないよ。キラマツクの方へさつさとお歸り。

後家　（他の婦等と外へ出ようとしてクリステの方に向つて）ペギちやん、お前けふは大そう御機嫌が惡いね、若い衆さん、忘れちやいけないよ、正午から競技や競馬があるからね。

（一同出て行く）

ペギイン　（命令的に）そんなきたならしい物はうつちやつて、コップを片づけとくれ。

（クリステ大急ぎで片付ける）腰掛を壁にくつつけとくれ。（クリステ其通りにする）その鏡を釘におかけ。どうしてそんな物を持ち出したんだい？

クリステ　（大人しく）わしや身だしなみしようと思つてたところさ。この土地にや綺麗な若い娘が澤山ゐるね。

ペギイン　（鋭く）女の話は止めとくれ。

（右手の幔場へ行く）

クリステ　かういふとこにゐちや、誰だつて身綺麗にしようと……

ペギイン　おだまりといつたら。

クリステ　（怖々彼女の顏を暫時見る。それから最後の試みらしく鋤を取上げて彼女の方に行き、わざと落ちついて）わしがおやぢをやつつけたのはかういふ鋤だつた。

ペギイン　（なほも鋭く）今朝から六遍もその話はしたぢやないか。

クリステ　（不平らしく）お前が聞きたがらないのは不思議だなあ、あの娘達はわしの話を聞かうと思つて四哩も歩いて來たんだに。

ペギイン　（びつくりして振り向く）四哩だつて！

クリステ　（申開きの調子で）お父さんが、此村ぢやみんな四哩歩いて酒をのみに來る bona fide ばかしだつていひなすつたらう？

ペギイン　そりや本道を來れば bona fide だが、あの連中は石を跨いで河を越えて來たのさ。さうして行けば、ほんの二歩か三歩ぐらゐで行けるんだよ。あたしはね、今朝郵便屋の持つてる新聞をのぞきに行つたんだよ。（意味ありさうに、力を入れて）今日は大變な事が出てゐた。（左手の室に行く）

クリステ　（氣がかりな樣子で）わしの人殺し一件かい？

ペギイン　（部屋の中から）人殺しに違ひないよ！

クリステ　（大きい聲で）親殺しかい？

ペギイン　（再び部屋から出て來て右手へ行きながら）さうぢやないよ、絞罪にされた男の話が半ペイヂばかし出てゐたのさ。恐しい死に樣だね、殊に、親を殺した人間ぢゃあね。さういふ奴には誰も同情してくれやしない。死んでしまへば、けちな切れで卷いて狹いお墓に入れて頭から石灰をぶつかけるだろ、ちやうど、女が茶碗からどみでも捨てるやうに。

クリステ　（ひどく情なささうに）ああ困つちやつたなあ！　わしや大丈夫だらうか？　昨夜はお前もわしが此處にお前たちと一緒にゐれば、あぶねえことはないつていつてゐたがなあ。

ペギイン　（きびしい調子で）何處にゐたつて大丈夫な筈はないよ、巡査と歩きまはつて夜あそびをするあんなお轉婆むすめの連中にしやべつて聞かせてゐれば。

クリステ　（恐怖を以て）あの連中がしやべるだらうか？

ペギイン　（同情を裝ふ調子で）どうだかね、あぶないよ。

クリステ　（大きい聲で）わしがやうな人間を絞り殺さして、何が面白いだろ？

ペギイン　あの連中は變つたことを面白がつて、どんな事をするか知れやしない。お前が繩の端でぶらんぶらん動いてるかはいさうな樣子を見たら、苔だらけの石ころでも涙を出すだらうと思ふけれど。お前の頸は立派な太い頸だねえ！　かはいさうに！　その頸では死に切るまでに三十分は苦しむだろ。

クリステ　（長靴を取つてはく）あの女たちがそんな恐しい奴なら、わしやネフィンの山やエリスの原をイソウだのカインだのアベルのやうにまごつき歩いた方がよささうだ。

ペギイン　（からかひ始める）その方がいいだらう。この邊を巡廻する裁判官たちは情知らずだつて噂だから。

クリステ　（口惜しさうに）此邊で情知らずは、裁判官ばかりぢやない。（彼女を見上げる）わしがやうな寂しい獨り者は又とぼとぼと出かけて、地獄に墮ちたみじめな靈魂が神様を見るやうに、女子供を見て歩くんだ。それをかはいさうとは思はないのかなあ？

ペギイン　此頃は氣の毒な娘たちが何百となくメヨを通つて行くから、お前がひとり者で寂しがるわけはないよ。

クリステ　（にがにがしく）さびしいわけがお前にはよく分つてるだらうに。日がくれて、灯が斜に射してる小さい町々を通る時、又知らない土地を歩いて先きの方で犬が吠えたり後の方で犬が吠えたりする時、市に近づいて方々の土手のかげに接吻の音や深い戀の口說を聞きながら、からつぽのすき腹に氣がめいるやうになつて一人で歩いて行く時、どんなに寂しいものかお前には分つてるだらうに。

ペギイン　お前は變人だわ、あたしが今日までに會つた、生きてる人間の中でのいちばんの變人だわ。

クリステ　世の中に一人ぼつちで寂しくくらしてゐて變にならない者があるだらうか？

ペギイン　あたしは變ぢやないわ。今まで一生お父さんとたつた二人でゐたけれど。

クリステ　（無限に感心して）お前のやうな美しい立派な女が寂しいわけがない、男はみんなお前のやさしい聲を聞かうと思つて寄つて來るだらうし、お前が路を歩けば、小さい子供達がぞろぞろ蹤いて來るだらう。

ペギイン　お前のやうなお世辭のうまい人間が寂しいといふのも、あたしには解からないよ。

クリステ　お世辭がうまい！

ペギイン　女と談話をしたことのない者が、けふお前のいつたやうなことがいへるものかえ？　寂しいといふのは見せかけだけで、あたしに取り入らうと思つてゐるんだろ。

クリステ　見せかけなら結構だが、わしや始終寂しいんで、生れつきさうなんだ。あけ方のお月様みたやうに。（入口に行く）

ペギイン　（彼の話が飲み込めぬらしく）まあ何しろあたしには分らないよ、どうしてお前のやうな立派な若い衆で、お父さんを殺すくらゐの元氣のある人が、どうしてほかの人より

不幸なんだかわたしには分らないわ。

クリステ　わしにも自分で分らないが、今日わしの心はひどく苦しい、わしとお前とは地の端と端とに遠く別れて行かなけりやならない、わしとお前とあの世で聖人様たちと一緒に神のおさばきを受ける日までは、これから何年たつても又とひと朝お前の側でわしが目を覺ますことはあるまい、わしや杖を持つてもう出かけよう、絞り殺されるのは情ないことだ。（出掛けようとして）今日はもう此家には置いて貰へないらしい。

ペギイン　（鋭く）クリステ。（クリステ向き直る）此處へおいで。（クリステ彼女の方に行く）そんな棒なんぞ捨てちやつて、火にちいつと泥炭でも入れとくれ。お前は此處の小僧さんだから、此處からうろつき出されちや困るよ。

クリステ　此處にゐれば絞罪になるつていつてゐたぢやないか。

ペギイン　（やつとのことで本當に深切になる）あたしや出かけて行つて此二三週間以來のアイルランドの犯罪のはなしを讀んで見たけど、お前の人殺しのことは一言も出てゐなかつたよ。（立ち上がつて幔場に行く）きつと死骸を見つけ出さないんだらう。あたしたちと一緒にゐれば大丈夫だよ。

クリステ　（驚いて、ゆつくりといふ）わしをかついだんだなあ、（怖々、それでも嬉しさうに彼女の後に從ふ）それぢや、わしや此處にゐてこれからお前の側で働けるんだね、今日からもう寂しいことはない。

ペギイン　あの後家や娘たちにそのかされて自分で出掛けさへしなけりや、お前が此處にゐる邪魔を誰がするものかい？

クリステ　（大悦びで）それぢや今日からわしの耳ん中はお前の聲でいつぱいになり、お前のその眼がわしの二つの眼にぴつたりと合ふんだ。お前が暖かい日のあたるところをぶらつき歩くのを見てゐたり、夜になればお前の足を洗つてやることも出來るんだ。

ペギイン　（優しく、少しきまりの悪い樣子で）お前は手近かに使ふのには頼もしい若い衆だとあたしは思ふよ。先刻は娘たちと仲間になつてあたしの氣持をわるくしたけれど、お前が威勢のいい意氣な若い衆でなければ、あたしだつて構つてやる氣はしないわ。

（ショオン・ケオ背に籠を背負ひ、駆け込んで來る。あとから後家クインも入り來る）

ショオン　（ペギインに）俺が今、下を通つて來るとな、お前んとこの羊がジミイの畑で菜つばを食つてたよ。早く行つて止めなけりや食ひ過ぎてはち切れてしまふぜ。

ペギイン　まあ、しようがない！
（頭へ肩掛を被つて外に駈け出す）
クリステ　（二人を見廻して、なほ元氣よく）わしも行つて手傳つて來よう。仔山羊をいちるのは上手だから。
後家　（戸を閉めて）あの娘にだつてそのくらゐは出來るよ、今ね、ションちやんがお前にながあい話があるんだとさ。
（面白さうに微笑して腰掛ける）
ションオン　（ポケットから何か取り出してクリステに與へる）君、そいつを見てくれ。
クリステ　（見る）西部へ行く歸りの切符か！
ションオン　（大心配でぶるぶるしながら）おらあそれをお前にやる、それからこの新しい帽子もやる、（籃の中から帽子を出す）此二重臀のズボンもやる、（ズボンも引出す）この上着は此三哩四方でいちばん黒い羊の毛で織つた品だ（上着も與へる）こりやみんなお前にやる、わしの祝福も添へてやる。レイリイ神父様の祝福も添へてやるから、どうか此處の土地を立つて、わしらを昨夜の宵のくちまでの無事なむかしに返してくれ。

クリステ　（はじめて横柄な樣子で）何のためにわしを追ひ出さうとするんだ？
ションオン　（助けて貰ひたさうに後家を見て）クリステ・マホン、おらあ嘘の話を拵へることはからつぺただからお前に眞實の事をいふ。俺はあのペギインと夫婦になるんだ、だからお前のやうな利口な大膽な男があの女の家にゐちや俺にや安心が出來ねえんだ。
クリステ　（殆ど喰つてかかるやうに）それで、わしを追ん出すつもりで暴ぐすりをくれようといふんか？
ションオン　（哀願する聲で）な、あにさん、惡くとつてくれちや困る。よその土地の方がお前にはいいんだ。よそへ行きや、金のくさりだの光つた着物だの着られて、立派な奥さんたちと馬に乘り廻すことも出來るだらう。
（ションオンはクイン後家に助けてくれと熱心な合圖をする）
後家　（側に來て）この人のいふことはほんとだよ。お前はよそへ行つてしまつて、あの娘がお前に惚れないやうにする方が好いわ。ションちやんは、とてもあの娘とお前とはつり合はないといふんだよ、世間ぢやみんなあの娘がお前と夫婦になるだらうつていつてゐるけれど。（クリステ大滿足な顏をする）

ショオン　（氣をもみつつ熱心になつて）あの女とお前とは性が合はねえ。あの女は惡魔みてえに强い性だから、二十日とたたない内にきつと二人でつかみ合ひをするやうになつちまふ。（自分の手でつかみ合ひの眞似をする）おれがやうな者があの女には丁度いいんだ。よしんばあの女にひつかかれたつて手も擧げないやうな大人しいおれが丁度いいんだ。

後家　（ショオンの帽子を取りクリステの頭に載せる）何にしてもこの着物を着てごらん、競技に出るにしてもお前に貸してくれるだらうから。（奥の部屋の方にクリステを押しやる）着てごらん。着て見てから返事をしてもいいよ。

クリステ　（着物が嬉しくつて、にこにこして）ぢやあ着て見よう。此着物を着てこの帽子を被つたところをあの人に見せたいな。

（奥の部屋に這入つて戸を閉める）

ショオン　（大心配で）あの女に見せたいといつてる。クインさん、あいつは此處を出て行かない積りなんだねえ。彼奴の身體にや惡魔が大勢ついてるから、きつとペギインと夫婦になるに違えねえ。

後家　（嘲るやうに）ほんたうにねえ、若い女つてものはみんな强い人が好きで、お前みたいなものは嫌はれるよ。

ショオン　（やけになつて室内を歩き廻る）ねえクインさん、おらあどうしよう？　彼奴を訴へてやりたいが、さうするときつと監獄から飛び出して來て俺を打つ殺すにちげえねえ、もしおいらがこんなに信心深え人間でなけりや、おらあそうつと彼奴の後に廻つて行つて横つ腹から刄物を突つ通す氣になるんだが、ああ、ああ、親のない子は不幸だ、始終馴れてるおやぢがあれば他人を殺すより骨が折れなくつて、みんなの前で偉い人間にもなれるんだがなあ。（後家の側に來る）ねえ、クインさん、お前、もし俺が仔山羊を一疋やる約束をしたら、何とかうまい工夫をしてくれるか？

後家　山羊の子ぢやつまらないねえ。だが、もしわたしがあの男と夫婦になつて、お前を助けてやつたら、お前わたしに何をくれる？

ショオン　（びつくりして）お前がか？

後家　ああ。さうしたら、お前わたしにあのお前んとこの赤い牝牛と牡山羊とくれるかい？　それからお前んとこの麥畑の中を通り抜けても好いといふ約束と、それから、ミケル祭の時分に肥料を一荷くれることと、それからお前んとこの西の山で勝手に泥炭掘りを

してもいいといふ約束を、してくれるかい？

ショオン　（希望が出たので大はしやぎで）するともよ。それからおらあお前に結婚の指環もやる、新しい着物も貸してやる、お前も婚禮の日にあの男を小ざつぱりさせたいだらうからな。それからおらあお前の馳走に山羊の子を二疋と濁り酒を一ガロンやる、それからお前の婚禮の祝ひに風笛吹きをクロスモリナかバリナから車で呼んでやる。それから——

後家　もう澤山だよ。默つといで、今あの男がはいつて來るから。

（クリステは新しい着物を着てひどく意氣になつて入り來る、後家は見とれた樣子で彼の方に行く）

後家　お前いま自分で自分の姿が見られたら、ねばつてしまつてわたし達に口もきかなくなるだらう。お前のやうな人をメヨから西の方へたたせてしまふのはほんたうに惜しいもんさ。

クリステ　（孔雀の如く得意になつて）わしや何處へも行きやしない。ここは貧乏くさい土地ぢやあるが、此處で落ついて滿足してゐよう。

（後家はショオンに席をはづせと合圖をする）

ショオン　ぢやあ、おらあ潮が干てゐる内に行つて競走場の尺を計つとかう。お前が今日の競技に勝つやう祈るよ、その着物も置いてくから使つてくんな。左樣なら！　（もぐるやうに出て行く）

後家　（クリステに見とれて）ほんとにお前すてきに好い男になつたよ。ちよいと腰をかけて、落ついて話をおしよ。

クリステ　（威張り返つて）外へ出て山の方へペギインを探しに行かう。

後家　あとでペギインを探す時間はどつさりあるわね。お前、ゆんべわたしとお前とは好いお連れだつてわたしがいつたのを聞いてたねえ？

クリステ　もうこれからは連れなんざあ欲しくない、誰も彼もわしに食ひ物だの着物だの持つて來てくれる。（ベルトを固く締めながら、戸口の方へ威張つて行く）一打ちでおやぢをヅボンの胯まで打ち割つちまつた強い親なしつ兒をみんなが見たがつてゐるんだらう。（戸をあける、後へたぢたぢと戻る）おお！　天のお使たち！

後家　（側へ行つて）どうしたのよ？

クリステ　殺したおやぢの幽靈が來た！

後家　（外を見て）あの宿なし男かい？

クリステ　（夢中になって）あの地獄の幽靈に見えないやうにわしや何處へ隱れよう？

（戸を押しあけて、老マホン入口に現はれる。クリステ戸のうしろに駈け込む）

後家　（大きに面白がって）こんちは。

マホン　（不愛想に）今朝早くか昨夜くれ方、若い男がこいらを通るのを見かけなかつたか？

後家　挨拶もしないで人の家へ這入つて來るお前はをかしな人だね。

マホン　若い男を見たかといつてるだ？

後家　（ツンとして）どんな樣子の人だい？

マホン　みつともねえやくざ野郎だ、でけえ口をして手にちつぽけな棒を持つてゐる。昨夜日ぐれにその男がこつちの方へ來るのを見たといふ宿なしにおらあ遇つたんだ。

後家　此頃ぢやとり入れの男衆が何百人となくスライゴの船に乘るのに此處いらを通るからね。その男に何の用があるんだい？

マホン　おらが頭を鋤の鐵板で打ち割りやがつたから、ぶつ殺してやるべえと思ふんだ。

（大きな帽子を取り繃帶と膏藥でごちやごちやになつた頭を多少自慢らしく見せる）あいつがこんなにしやがつた。おらあこんなに頭を打ち割られてゐて十日もそいつの後を追つかけて來たなあ偉いもんだろ。

後家　（兩手で彼の頭をつかまへて大喜びで眺める）大變な怪我だねえ、だれが打つたんだい？強盜かい？

マホン　おらが生みのせがれが打つたんだ。強盜でも何でもねえ、うすぎたねえ吃りのぐづ野郎なんだ。

後家　（マホンの頭から手を放して前掛けで手を拭く）お前ねえ、此ぎらぎらする天日にその傷をさらけ出して歩いて、世間で腐れ頭とか云ふのにならないやうに用心おしよ。ほんとにひどい傷だねえ、自分のお父さんにこれだけの怪我をさせるといふまでには、お前もよつぽどひどく其子をいぢめたと見えるねえ。

マホン　俺がか？

後家　（一人で面白がって）ああ。老人の頑固ものが若い者をいぢめるのは隨分な恥さらしだわね。

マホン　（憤然として）いちめるつて？　おらあ殺された聖人様のやうに堪忍し抜いて、たうとうおつ死ぬばかりになつただ、この老年になつて手助けする奴もなく、一人でおつぽり出されただ。

後家　（ひどく面白がつて）悪い人に報いが來るのはほんとに不思議なものだねえ。

マホン　俺が悪人だと？　俺をひでえ目に會はしたなあ彼奴だといつてるでねえか、彼奴はなまけ者の嘘つき野郎で、出たらめばかし云ひやがつて、褐色羊齒の中で天日に腹を干して半日でも寐ころんでねようつて奴だ。

後家　ちつとも仕事をしずにかい？

マホン　仕事どころかよ、仕事といへば、蔺の莖のやうに小さい乾草の束をおつ立てたり、たつた一疋殘つてる牝牛を追ひながら牛の脚を臀んとこからぶつくじいたり、そんなことでもやつてたけりや、自分の持つてる小鳥を――鶯だの、ひわだの――いちり廻してゐるか、さもなきや、おらが家の壁にかけてある小つちやな鏡に自分の姿をうつして見ちやいろんな顏をしてゐやがるだ。

後家　（クリステの方を見て）どうしてそんなにおしやれなんだろ？　若い女のあとでも追つかけ廻してゐたの？

マホン　（輕蔑の聲を上げる）追つかけるどころかい？　赤いペチコートの奴が岡の方から尻を振り振りやつて來るのを見つけたら、奴は忽ち柴の中に隱れちまふ、それで細かい枝や葉のすき間から色目をつかつて、罅隙からのぞいてる兎のやうに兩方の耳をおつ立ててさ。女ぢや、大わらひだ！

後家　それぢやお酒でも飲むのかい？

マホン　奴は三合壜の匂ひにも醉つぱらつちまふ意氣地なしさ。妙に腐つた胃袋を持つてやがると見えてな、何時だつたか俺が煙管で三吸ひ吸はしてやつた、するともがいて苦しがるで、たうとう驢馬の車にのつけて看護婦のとこまで送りつけた。

後家　（兩手を握りしめて）まあ、わたしやほんとに、今日が日まで、そんな人の話を聞いたことがないよ。

マホン　さうだらうとも、まつたく聞いたことはあるめえよ。奴と來ちや四つの國境の女といふ女の笑ひ草さ、若い娘たちは彼奴が路をやつて來るのを見ると草刈りの手を止めて聲を揚げて笑ふだ、マホンとこの馬鹿が來たあいつて。

後家　わたしや何をやつてもいいから、さういふ人間を見たいもんだ。どんな樣子の男だつたい？

マホン　ちいつぽけな背いつぴく野郎だ。

後家　色の黑い？

マホン　黑くつてうすぎたねえ。

後家　（考へながら）わたしやその男を見たやうに思ふよ。

マホン　（乘り氣になつて）みつともねえ腹ぐろ野郎だ。

後家　怖い顏つきの恐しい惡者さ、お前にそつくり似てゐたよ。

マホン　どつちへ逃げた？

後家　山を越して北か南へ出る海岸廻りの汽船に乘りに行つたらう。

マホン　今からでも追つつくだらうか？

後家　下のあの潮の干てゐる砂つ原を越して行けば、あの男と一緒ぐらゐに行きつけるだろ、あの男は入江の上手を十哩も廻り路して行くんだから。（戸の方を指す）向うの端から下へと折れて、それから北ひがしへの路をおいで。

（マホンあたふた出てゆく）

後家　（後から大聲に怒鳴る）追ひついたら、うんと讐を取つておやり、だけど、法律の手に捕まらないやうにするんだよ、お前のやうな家の中の荒武者でも、黑い冠を被つた判事に判決文を讀み上げられちやたいへんだからね。（戸をパタンとしめて、恐怖に蹲つてゐるクリステを暫時見る、やがてぷつと吹き出す）ほんたうに、お前はこの西の土地切つてのえらい人氣者だよ、お前がツボンのはらまで眞つ二つに切り割つたといふかはいさうな男はあれなのかい？

クリステ　（外を見る。それから後家にいふ）この話をペギインが聞いたら何といふだらう？俺をどうするだらう？

後家　さうさね、お前の頭をぶんなぐつて、家から追ん出しつちまふだらう。かはいさうに、あの娘はお前を偉いものの積りでゐるのに、お前はお父さんを殺したといふ嘘つばなしを拵へたくだらない嘘つきなんだから。

クリステ　（怒りに殆ど口もきけない樣子で、戸口の方を向き、半分獨り言のやうに）死んだ眞似をしやがつて、又生きつ返つて、古鼬が鼠を追つかけるやうにおらが後を追つかけやがつ

て、此處までやつて來て、アイルランドの美しい女たちと俺との中に邪魔を入れやがる、あんな死骸のやうな奴あ海ん中へうつちやつてもいいんだ……

後家　（前よりもやや眞面目に）それがあの人の一人息子のいふことかい？

クリステ　（怒つて）一人息子だと？　あんな奴はかけ殘りの一本切りの齒が痛むがいい、片目つぶれて、あいてる目で路の曲りつ角に七十七疋の惡魔でも見るがいい、片脚ちんばの古い木の脚でびつこ引いて地獄の火で燒けてる墓の中へでもはいるがいいや。（外を見る）今海岸を越してゐる、天の神樣が高い浪を立ててあいつを此世から洗ひ流して下されば

いに。

後家　（愛想を盡かして）お前、恥かしくはないかい？（彼の肩に片手を載せて自分の方に向ける）どうしたの？　泣き出しさうぢやないか？

クリステ　（やけと嘆きに沈んで）わしやあの女の額から智慧の星のやうに愛の光がさしてゐるのを見た、そして子供の天使たちに話を聞かせてゐなさる聖ブリヂツド樣を思ひ出すやうなあの女の言葉を聞いたのに、もうあの女は俺に背なかを向けて、ひどい言をいふだらう、婆さまが節々の腫れた驢馬を坂でも追ひ上げるやうに。

後家　身體をぼりぼり搔いたりしてゐる娘をつかまへてお前は歌を作つてるんだよ、店で賣つてるどぶろくの腐つた臭氣が浸み込んでるあんな娘を。

クリステ　（苛立たしく）あの娘は天國で商賣をしてもいいぐらゐの人だ、わしやこれからどうしたらいいだらう、偉いものにされてたのを、たつた一日で天道樣にふられちやつた。

（娘たちの聲遠くに騷がしく聞える。後家は窓から外を見てゐたが、急いでクリステの側に來る）

後家　うちの人をなくしてから、わたしがやつて來たやうな眞似をお前もやつてればいいよ、わたしは岡の上で長いことくらしてゐるが、上機嫌な時は日なたぼつこしながら、靴足袋をつくろつたり、肌衣を縫つたりしてゐるし、また窓から帆前船や釣魚船やトロール船が海を渡つて行くのを眺めて、水の上に浮いてゐる勇ましい毛もくじやらの人たちの事を考へて見たり、また長い年月たつた一人でくらしてゐる自分のことを考へたりしてゐるのさ。

クリステ　（興味を引かれて）ちやあ、お前さんはわしと似てゐるね。

後家　似てゐるとも、それだからわたしはお前が氣に入つたのさ、岡の上のわたしのちつちやい家でお前の世話をしてあげよう、さうすりやお前が人殺しだか、何だかつて聞く人

だつてありやしない。

クリステ　もしわしがペギインと別れたら、どんな事をしてくらすんだ？

後家　お前の出來るやうな好い仕事があるよ――わたしの小屋の中を白く塗る貝殼を拾つたり、小さい鶯鳥小屋を造つたり、わたしが持つてる古い小舟に新しい皮を張つたりするのさ。わたしの家はかけ離れた一軒家でも、絲車のそばでお前は利口なお爺さんたちにも遇へるし、人のゐない時はお前とわたしがないしよ話をしたり、抱き合つたり、面白い思ひが出來る……

聲　（外で、遠くから呼ぶ）クリステイ！　クリステイ・マホン！　クリステイ！

クリステ　ペギインだらうか！

後家　若い娘たちがお前を下の競技に呼び出しに來たんだろ、あの連中に何といつて聞かせたらいいんだい？

クリステ　ペギインを承知させるやうに俺の味方になつておくれ。俺はあの人より外に用はない。（後家立ち上がり窓に行く）あの人を承知させる味方をしてくれたら、お前の死に際に神様が手を伸してお前を極楽の畑の近路から、天のお堂の聖母のお子様の足臺の下まで

導いて下さるやう、神様に祈つて上げる。

後家　うまいお祈りだねえ！

聲　（次第に近くなる）クリステイ！　クリステイ・マホン！

クリステ　（そはそはして）やつて來るよ。後生だから、俺の味方になつて助けると誓つてくれ。

後家　（暫時彼を見てゐて）もしわたしがお前を助けてやつたら、お前がこの家の主人になつた時、わたしが通り度い路を通る權利と、それから仔山羊を一疋と、それからミケル祭の時に肥料を一荷と、きつと吳れる誓ひをするかい？

クリステ　夜のお星様と天地にかけて、誓ふ。

後家　それぢやわたしはお父さんのことは何もいふまい、ペギインが何時までもあの話を知らないやうに。

クリステ　もしおやぢが又歸つて來たら、どうなる？

後家　そしたら、あの人は狂人でお前のお父さんではないといひ切らうぢやないか、今日濱の砂つぱであばれてるのを見たとわたしが證人になつてもいい。

（娘たち駈け入る）

スウサン　下の競技においでよ。來なくつちやいけないつてペギちやんが云つてるわ。

セイラ　飛びつこがもう始まつてよ、下の砂つぱで驢馬の駈けつくらの時にあなたに着せる騎手（のりて）の服を持つて來てよ。

オーナア　おいでよ、ねえ？

クリステ　もしペギインが向うにゐるんなら、俺も行く。

セイラ　あの人は路でショオン・ケオにからかつてゐるのよ。

クリステ　そいぢや俺も行かう。

（駈け出す、娘たち後を追つて出て行く）

後家　これでおしまひにまづい事が來て、子供をなくし亭主を死なせたわたしのやうな後家より外にあの男の味方がなかつたら、とんだおもしろい話だねえ。

（彼女も出て行く）

――幕――

第三幕

舞臺前幕に同じ。同じ日の午後。ジミイ少し醉つた氣味で入り來る。

ジミイ　（呼ぶ）ペギちやん！（奥の室に入る）ペギちやん！（再び室内に戻つて來る）ペギちやん！（フィリイも同樣に醉ひ氣味で入り來る、フィリイに向つて）お前あの娘（こ）を見たか？

フィリイ　いいや知らねえ、おらあショオン・ケオに驢馬の車を持たせておやぢどんの迎へにやつた。（戸棚をあけようとする、鍵がしめてある）なにしろ、お通夜の朝あんな狀態（ざま）になつちまふたあ呆れた男だ。また娘も、鍵をかけてくたあ、ふてえ女だ、あいつあの若い野郎に大騒ぎしてゐやがるで、こちらが渇いて死んだつて、構つてくれやしめえ？

ジミイ　あの女が大騒ぎやるなあ無理もねえ、あいつ、玉ころがしの奴をまる負けにしちまつて、それから宙返りの奴も負かし、棒なげの奴の鼻をぶつくじいて、下でやつてる競技にみんな勝つちやつた。駈けつくらでも、飛びつくらでも、踊りでも、何でもどされだ！よつぽど運の好い奴だよ。

フィリイ　今勝つたつて、又負かされちまはあな。あいつ十言としやべらない内におやちを殺したぼらを始めて、鋤でぶち込んだ話をやりやがる。

ジミイ　人間も自訴ちや絞罪にならないと見える。やつのおやちも今頃は腐つてしまつたらう。

（老マホンゆつくりと窓の外を通る）

フィリイ　もし誰か長い鍬でその畑を掘りつ返してゐたとしたら、その男がやつのおやちの頭の鉢の割れを二つほじくり出したとしたら、新聞や裁判所で何といふだらう？

ジミイ　そりやあな、洪水で死んだむかしの丁抹人だとでもいふだらう。（老マホン入り來り戸口に近く腰掛けて聞いてゐる）お前聞いたことがあるか、ダブリンの市ではコンノオト邊の農家の青い壺みたいに髑髏が並べてあるといふはなしだ。

フィリイ　お前それをほんとだと思ふんか？

ジミイ　（喧嘩腰で）刈入れの後でリバプールの船で歸つて來た若い男がそいつを見たといふぢやないか？　その男がいふにや、ダブリンぢやさういふ物を置いといて、むかし此世界に生きてゐた偉い人たちを陳列にしてゐる。白い髑髏も黒い髑髏も黄ろい髑髏もある、

すつかり齒の揃つた奴もある、又ほんの一本きりつか齒のないやつもあるとよ。

フィリイ　そりや、嘘でもあるめえ、俺が子供の時、家の向うに墓場があつてお前の腕ぐれえ長い大腿骨の男の骸骨があつた。そりや恐しい奴だつた、おらあ天氣の好い日曜日にはよく惡戯にそいつを組み合せて見た、きらきら光つた骨の奴で、世界中何處の市に行つたつてあんなのは見られめえよ。

マホン　（立ち上がつて）見られめえと？　この頭を見ろ、鋤の一打ちで打ち割られた、かういふなあ何時何處へ行つたつて二つたあ見られめえ。

フィリイ　こいつあ大變な！　一體だれがお前を打つたんだ？

マホン　（得意に）おらが生みのせがれがやつただ。ほんたうだと思へるか？

ジミイ　ふうん、人間の心ん中にや不思議なことが隱れてゐると見えるなあ！

フィリイ　（疑はしさうに）そりやどういふあんべえにやられたんだね？

マホン　（室内を歩き廻り）おらあ何百里の長い道中して、小綺麗な寢床に寢せて貰ひ一日に四たびづつ腹一杯食はせて貰つてやつて來た、何一つするぢやねえ、ただ本當の話を聞かせるだけなんだ。（二人の方に少しく攻勢を取つて進む）一杯のませてくんな、さうすりや聞

かせてやる。

（後家クイン入り來り肝をつぶしてマホンの背後に立つ。マホンは左手なるジミイとフィリイに向つて立つてゐる）

ジミイ　あの女に頼むがいい。肩掛の中にかくして持つてるやうだ。

後家　（早足にマホンの側に來る）お前、此處にゐるの？　あんまり遠くへ行かなかつたと見えるね？

マホン　おらあ汽船が通るのを見たけど、のどが渴いて足が痙攣（ひつつ）れて來たからあんな奴はどうでもなれと、斯う思つて、引つ返して來ただ。（彼女の肩掛の下を見る）一杯のましてくんろ、前週の火曜日から歩きづめでへたばりさうだ。

後家　（コップを取りながら、機嫌をとる調子で）そんなら火の側へ腰を掛けて少しお休み。へたばるのも道理さ、歩いたり、喧嘩したり、おてんと樣に照りつけられたり（自分が持つて來た石の瓶から密造酒を與へる）さあお上がり、お前が幸福（しやはせ）で長生きが出來るやうに祝つてあげるわ。

マホン　（飲みたくて溜らなさうにコップを取つて火の側に腰掛る）ありがたう！

後家　（二人の男たちを右手にそつと呼んで）お前さんたち知つてるかい？　あの男は怪我で今日は氣が違つてるんだよ、先刻わたしが會つた時は鑄掛屋にひどい目に會はされたんだとか取り止まらない話をしてゐたのさ。それからクリステの話を聞いて、いきなり自分の頭を割つたのは自分の息子だといひ出したんだよ。ほんとに、氣違ひは怖いね、これから先き誰か殺すだらう、その人が自分に怪我をさせたんだと思つて。

ジミイ　（全く信じ切つて）全く恐しいこつた。俺の知つてた奴が赤い馬に頭を蹴られたつたが、それから長いあひだ、むやみと馬を殺したつけ、しまひにや時計の内部（なかみ）を食つて死んでしまつたが。

フィリイ　（疑はしさうに）あいつはクリステを見たんだらうか？

後家　見やしないよ。（止めるやうな手つきで）あの人の頭ん中へあの子のことを思ひ出させないがいいよ、さもないと、もし人殺しでもあつた時にはお前も呼び出されるよ、（マホンの方を見て）そらつ！　聞いてるわ。待つといで、わたしがごまかしてすつかり落ちつかせるから。（マホンの方に行く）お前、どんな氣持？　もう落ちついたかい？

マホン　（酒の爲に少し感傷的になつて）おらなさけねえこつた、今日の狀態（うさま）たら話にならね

え。やつが生れた時からおらが手鹽にかけてやつて、それが讀本の二冊目も讀めねえ馬鹿と來てゐるで、學校から歸つて來るにも足をびつこひいたり、鑄掛屋の驢馬みてえに打たれてまつ黑くあざを拵へて來ることも度々だつた。自分にいちばん近い肉親のやつが手をあげて自分を殺さうとしたり、一人ぼつちで夜中に苦しみながら死ななけりやならねえたあ、ほんにはあ、情ねえはなしでねえか。

後家　（何といつて返事をしてよいか分らないで）　さうやつて落ついてお前が話してるのを聞くと、先刻見かけた人とおんなじ人だとは思へないやうだわ。

マホン　確かにおんなじ人間さ。おらあ、これ、今年六十のすたりものだ。この年齡まで生きるなあ恐しいこつた、せがれは野良をしやがつて、それを叱つたり、どやしたり、何のかんので、親の身はせいもこんも盡きちまふだ。

フィリイ　（ジミイに）正氣のやうだ。（後家に）きいて見な、その息子といふなあどんな奴だつたか？

後家　（へんな眼つきでマホンに）お前を打つた息子といふのは、年齡は二十一ぐらゐで、駈けつくらだの、飛びつくらだの、何でも勝負の上手な若い衆かい？

マホン　（怒りのたけり聲を出して彼女に向ふ）あいつは馬鹿だつておらあ云つたでねえか、あれもこれから親なしつ子の味を知るだらう、年寄も子供もなぶりものにして、あいつに惡口ついたり、怒鳴つたり、疥癬だらけの野良狗みてえに蹴とばしたりするだらう。

（大なる喝采の聲、やや遠く聞える）

マホン　（兩手を耳に當て）あすこぢや何を怒鳴つてゐやがるんだ？

後家　（微笑をちらつと見せて）あの連中は、若い者を喝采してゐるんだよ、この西の土地のチャンピオンの人氣男を。（再び喝采の聲）

マホン　（窓に行く）あの聲を聞くとおらが胸は裂けさうだ、此一週間このかた、おらが頭の鉢はぴくりぴくり動悸が打つてるだ。駈けつくらをやつてるんか？

ジミイ　（戸口から外を見る）さうだ。今あの男を驢馬にのつけて砂つぱを駈けさせようつてんだ。あの遮眼革した驢馬に乘つてるんが人氣男だ。

マホン　（不思議さうに）あの若いのがか？　もしあの男が馬鹿だと分つたら、おらが迷ひ子のせがれにそつくりだといひ切つてもいいくれえだ。（自分の頭に手をあてて、氣がかりさうに）ちよつくら出かけて駈けつくらを見物して來ようかなあ。

後家　（彼を止めて、鋭く）　およしよ。お前はベルムレットの方へ出掛けるがいいだらう、寐る場處もないやうな斯んな處にぐづぐづしてゐないがいいさ。

フィリイ　（進み出て）　此女のいふことに取り合ひなさんな。そこの腰掛の上にのつかりや、すつかり見えるだろ。あげ潮にならない前にやつちまはうつて、みんなが急いでるんだ、お前が岩路を歩いてあすこへ行く内にはあらかた濟んぢまふだろ。

マホン　（腰掛の上に乘る、後家は彼の側に立つ）　海の端んとこが又すつかり見える。角んとこからみんなが出て來るな。あいつが先きだ。あいつは一體だれだらう？

後家　あの人はね、世界のチヤンピオンさ、けふは何もかもみんなあの人の勝になるんだよ。

フィリイ　（外をのぞいて、競走に熱中する）　まあ見ろ。あの男追つつかれるぞ。

ジミイ　なあに、あれが勝つさ。

フィリイ　ジミイ、見てからいふがいいぞ。いひ切るにやまだ早かろ。

後家　（大聲を出して）　門のところを駈け拔けてるわ。なんてうまい騎りかただらう。

ジミイ　わかいの、しつかりい：

マホン　三番目のを通り越すぞ。

ジミイ　みんなを負かすぞ。

後家　二十人と競走したつて、きつと、みんな負かすよ。

マホン　あの乘つてる驢馬を見な、星でも蹴とばしさうだ。

後家　あら、飛んだ！　（夢中になつてマホンにつかまつて大聲で）　落つこちた！　又乘つた！　そら、みんなを拔いちまふよ！

ジミイ　驢馬を打つてる樣子を見な！

フィリイ　村の娘たちがけしかけてゐる！

ジミイ　これが終ひの一廻りだぞ！　立てた棒も取れちやつたな！

マホン　あの狹いとこを！　水つ溜りへ踏ん込みさうだ！　（大聲で）　うまいぞ！　また通り拔けた！

ジミイ　そら、並んだぞ！

マホン　小僧しつかり！　ああ、勝負がついた、勝つたぞ！

（大なる喝采の聲、此方でも一同聲をあげ合せる）

マホン　（疑ふ樣子）なんだ？　胴上げしてゐる。此方の方へ來るんか。（怒りと驚きの大聲を上げて）クリステイだ。まちげえねえ！　あの唾を吐く樣子も大またに歩く樣子もおらの知つてる通りだ。

（マホン腰掛より飛び下り戸口へ飛んで行く、後家彼をとり押へて引き戻す）

後家　落ちついておいでといつたら。あれはお前の息子ぢやないよ。（ジミイに）この人を止めとくれ、さうでないとお厨、人殺しの尻押しをした廉で一ケ月も牢に入れられて罰金も取られることになるよ。

ジミイ　俺が押へてる。

マホン　（もがきながら）放してくれ、放してくれ、おらあ今日こそあいつの頭に讐打ちをしてやるだ。

後家　（あらつぽく彼をゆす振る）あれはお前の子ぢやないつたら。あれはこの家の娘と婚禮しようつて人なんだよ、此處は政府の鑑札も受けて、立派な商賣のある店で、密造酒だつてあるんだよ。

マホン　（びつくりして）あいつが財産のある一人前の娘と夫婦になるつて！　お前たちは氣違ひか？　おらあ女の氣違ひばかし入れとく病院にでも踏ん込んだんかな？

後家　頭を打たれてお前こそ氣違ひになつてるんさ。あの若い衆はね、この西の方の評判者さ。

マホン　ありやおらがせがれだ。

後家　そら、お前は氣がちがつてる。（外に喝采の聲する）路のまがり角でみんながあの人の萬歳をやつてるのが聞えるかい？　お前の子は馬鹿だつて自分でいつてたぢやないか、生れつきのほんとの馬鹿の萬歳をいふやつがあるものかい？

マホン　（心配な樣子で）あの男がおれのせがれの筈はないな。（再び喝采）おらがせがれの萬歳をいふ奴はねえ筈だ。ああ、おらあ此世界をおつたまげさせるやうな氣違ひになつたと見える！（片手を頭にあてて腰を下す）おらあ何時だつたか、十疋の眞赤な鬼が俺の魂を酒樽につめ込まうとしてゐるのを見たことがある、それから、狸のやうな大い鼠がおらが耳たぼから生き血を吸つてるのを見たことがあつた、だが、今日が日までおらあ一人前の男とあの涎つたらしの阿呆と取つ違えたことはなかつた。もう俺もいよいよ駄目かな。

後家　そりやあたりまへさ、お前の頭の鉢がわれちやつたんだもの。

マホン　ちやあ、俺もあいつも天罰がめぐつて來たんだ、まだ三週間も立つめえ、おらあリメリックの若い女たちんとこで夜から朝まで飲み續けて身體がきかなくなるまで飲んだくれたことはあるが、今日が日までまだおらあ氣が違つたことはねえんだ。（突然後家に聞く）おらが顏つきはへんかな？

後家　ほんとに、變だよ。お前がねぼけたことばかしいふ狂人だつてことは、三つ子にも分かるよ。

マホン　（前よりも元氣よく立ち上がる）そんならおらあ、あすこの共同院にでも行かう、悅んで入れてくれるだろ、おらあ（大なる誇りを以て）これでも、恐しい大變な病人の見本になるだろ、窮屈なチョッキを着せられてわめき散らしたり、七人の醫者がおらのいふことを本に書き付けたりしてよ。お前それがほんとに思へるか？

後家　お前がそんな評判者なら、早く行つた方がいいよ、あの連中がいつか氣違ひを捕へたことがあつたがね、あんまりみんなで打つたので、たうとう其男は飛び出して、あばれてあぶくを吹いて、海に溺れて死んでしまつたよ。

マホン　（哲學的に）まつたく、人間ちうものは、頭が變になるてえと、惡魔になるんだな。

俺を出してくれ、そうつと細路から出て行つて、あの連中に會はねえやうにする。

後家　（出口に案内する）それがいいよ。右の方へおいで、誰にも會はないで濟む。

（マホン走り去る）

フィリイ　（悟つた風に）クインさん、お前何か手品をやつてるね、おらああの男の後を追つかけて行つて、飯を食はして休ましてやらうよ、さうしたら、あいつが氣違ひなのか、お前とおんなじ正氣なのか分かるだろ。

後家　（氣に入らぬ樣子で）あの男の側へ行くんなら、自分の頭の用心をおしよ。前から時時氣が變になつたつて話してゐたぢやないか？

フィリイ　おらあいろいろ彼奴の話を聞いた、日のくれない內に面白い芝居が始まるだらうと思ふ。

（フィリイ出て行く）

ジミイ　へん、フィリイは一人天狗の馬鹿さ。あの氣違ひが頭の鉢をぶち割られて正氣でゐられるわけがねえがな？　おらあ、奴等の後を追つかけてつて、あの氣ちがひがフィリイに向つて來るところを見物しよう。

（ジミイ出て行く、後家は酒を幔幕の後に隠す。家の外、騒がしくなる）

聲々　やあい！　駈けつくらの名人！　飛びつくらの名人！　可愛い若い衆！　はしつこい騎手だ！　そうら、連れてけ！

（クリステ騎手の服装にて入り来る、ペギイン、マイク、セイラその他の娘達も一緒に入り來る）

ペギイン　（群衆に）　さあもう此人をくたびれさせないで歸つておくれ、汗でづぶ濡れになつてるんだよ。ほんとに、行つとくれつたら。そして此人が汗を乾かす間、綱つ引きでもやつてゐておくれ。

群衆　此處に賞品があるよ！　風笛と！　この胡弓はむかし詩人が彈いたものだ！　それから、此平つたい三本刺のあるブラックソオンの杖はダブリンの市から學生たちを叩き出しさうな品だ！

クリステ　（一同より賞品をうけ取る）　みなさん、ありがと。だが、わしが過日あの一と打ちぶち下ろすところを見たつたら、今日の事なんざつまらねえことだといひなさるだろ。村の口上いひ　（外にて鈴を鳴らす）　とうざい、とうざい、今日最終の番組！　下の原で綱つぴきが始まりまあす！　みなさん、お寄り下さあい！　メヨの衆のお手柄をねがひまあす！

ペギイン　さあみんな行つて、此人に汗を拭いたり休ませたりさせておくれ。ほんとに、もう行つとくれ。もう此人はこれつ切り何もしやしないから。

（彼女見物を外に追ひ出す、後家クインも彼等と一緒に出て行く）

人々　（出て行きながら）　さあ、行かう。ひと先づさよならだ！

ペギイン　（自分の肩掛でクリステの顔を拭いてやり、うれしさうに）　ほんとに、お前は好い子だよ、お前これからは大もてだろ、これだけの賞品が取れるんだもの、まつぴるまの暑さで大汗になつてゐる！

クリステ　（嬉しさうに彼女を見る）　もし俺が今欲しいと思つてる一等賞が取れれば、それこそ俺は大得意だ。そりやほかでもねえ、公許が出たら、二週間以内に俺と夫婦になるつていふ約束だ。

ペギイン　（彼から離れて）　あたしにさういふことをいひ出すとはお前も大膽だね、みんながいつてるわ、もう四月か五月も立つてお前のお父さんが腐つてしまふ時分になれば、お前は生れ故郷の何處かの娘のとこへ歸つて行くんだらうつて。

クリステ　（怒つたやうに）お前を離れてか？（彼女につめよせる）俺は決して何處へも行かない。四五ケ月も立つて暖かくなる時分には、お前と俺と夜露に濡れてネフィンあたりを歩いてるだらう、丁度その時分は、草に好い匂ひがして、小つちやいぴかぴかの三日月さんが小山に沈んで行くのが見えるだらう。

ペギイン　（揶揄ふやうに彼を見て）クリステ・マホン、お前それぢやネフィンの山で夜になつたら、密獵人のする戀の眞似でもやるつもり？

クリステ　俺の戀が密獵人の戀だらうが、伯爵さんの戀だらうが、そんなことはどうでもよかろ、俺の兩手がお前を抱いて、お前のつぼめた脣に接吻を押つつける、そしたら、むかしも今も一人ぼつちで金の椅子に寂しく坐つてゐなさる神樣をお氣の毒だと思ふかも知れねえ。

ペギイン　そりやおもしろからうねえ、ほんとに、どんな女がどんなに思つたつて願つたつて、お前のやうな口のうまい話のうまい若い衆に會ふことはむづかしいことだらう。

クリステ　（得意になつて）まあ待つて見な、グードフライデの時分、二人でエリスあたりの路に迷つて、そこいらの井戸から水を飲んで、濡れた脣で強い接吻をやつて見たり、頸

飾りになりさうな草の花の中に、お前の身體を仰向けに寝せて、日なたぼつこしながらでも、俺の話を聞いて見なさい。

ペギイン　（彼の調子に動かされて、低い聲で）そしたら、あたしは美しく見えるかしら？

クリステ　（歡びを以て）もしさういふ時に冠をつけた主教さんたちがお前を見たら、トロイのヘレン姫が金色の肩掛に花束をさして、そとをあつちこつち歩いてるところを、極樂の垣根を押し曲げてのぞき見する豫言者たちの眞似でもするだらう。

ペギイン　（心からの優しみを以て）それでも、クリステ・マホン、あたしに何のいいところがあつて、詩人のやうに話上手な、そして勇ましい心のお前に、あたしを好いつり合ひの相手だと思つてくれるの？

クリステ　（低い聲で）お前一人の心に七つの天の光明がある。これからは、お前は俺のために天使の燈火のやうに、俺がまつくらやみに外に出て、オーエンやカロモアで鮭を突つ刺してゐる時にも、俺を照らしてくれるだらう。

ペギイン　クリステ・マホン、もしあたしがお前のおかみさんになつたら、さういふ晩にはお前と一緒に行くわ、あたしは差配人をごまかすことも上手だし、空の星にをかしなあだ

名をつけることも上手だもの。

クリステ　お前も一緒に行くつて？　雹が降つたり、あけ方の霧に會つたら、お前は死んでしまふだろ。

ペギイン　お前とあたしなら、小さな藪にでもやすやす隱れられるわ。（恐しさの不安を以て）だけど、これはただ話だけかも知れないのね、お前のやうな立派な若い衆にゐて貰ふのには、こんな貧乏くさい藁屋ぢや駄目かも知れないわ。

クリステ　（彼女を片腕に抱く）もし俺がキリスト様の信者でなけりや、お前の家の屋根の一本一本の藁にも、お前の家の入口の徑に敷いてある石つころの一つぶ一つぶにも、おらあ裸の膝をついてお祈りを上げたいくらゐだ。

ペギイン　（大悦びで）もしそれがほんたうなら、あたしは今日から神様にお蠟燭をあげてお前を南の方から此處までよこして下さつた奇蹟のお禮をいはう。婚禮の着物がちやあんと買つてあるから、ちつとも待たずに、お前と夫婦になれるわ。

クリステ　奇蹟だ、それに違ひない。俺は遠いところで長いこと働いてゐて、それから長いこと歩いて來て、その間にも此嬉しい日にだんだん近寄つて來ることも知らずにゐたんだ。

ペギイン　そしてあたしと來たら、女のくせに、お金の樽を十も持つてゐる猶太人とでも結婚しに海を越えて行かうかと思つたことも度々あるのよ、お前のやうな人が、神様の星のやうに、だんだん近寄つて來ることは夢にも知らないでゐたんだわ。

クリステ　さういふ話を女たちが薄のろの野郎に話して聞かせるのをおら長い年月聞いてゐたが、やさしい聲で此俺を悦ばせてくれるのを聞くのは、今日が始めてだ。

ペギイン　クリステ・マホン、あたしの話がそんなに優しく聞えるとは不思議ね、あたしの口わると來たらここいらの國中に怖がられてゐたんだのに。ほんとに、人の心は不思議なものだ。今日の今から、メヨの土地に、あたしたちのやうなしやれた戀中は又とあるまい。

（酔ひどれた唄の聲、外に聞える）お父さんがお通夜から歸つて來たんだ。お父さんが一と眠り寐たら、二人で話して聞かせよう。眠つた後ならおとなしいから。

（二人立ち離れる）

マイケル　（外で唄ふ）

監獄所の番人が

すぐに俺たちをつかまへて、
ケバンの市にもう一度
縄つきにして連れて來た。
（マイケルはショオンに扶けられて入り來る）
ふんじばられた俺たちは
泣く泣く牢で寐てしもた……
（彼はクリステを見つける。近寄つて醉つぱらひらしく握手する、ペギインとショオンは左手に立つて話し合ふ）

マイケル　（クリステに）若いの、まづまづおめでたう。お前が下の砂つ場でどの競技にもみんな勝つたつて話は聞いたよ。お前のやうな立派な元氣な若い衆をケート・カシデのお通夜に連れてかなかつたのは殘念だ。あんなに酒のふんだんにあるお通夜つて又とあるめえよ、なにしろ、午になつて小つぽけな墓に婆さんの骨を埋める段になると、五人の男が、ぢやねえ、六人の男が、墓の石の上に、げろを吐えてぶつ倒れてしまつたんだからなあ。

クリステ　（ペギインの方を見ながら、不安らしく）ほんとかい？

マイケル　ほんとだとも、だがお前もかはいさうなおやぢどんを人にないしよで埋めつちまふたあ、氣が利かねえや。死骸をケリイ馬の臀に載つけて、此西の方へ持つて來りやいいに、むかしのヨセフ様のやうなあんばいしきにさ、さうすりや俺たちが一人前の葬式もしてやれたのに、あんな遠くでくさらしといちや、おやぢどんの後生のためにお通夜の酒を飲んでやる人つ子一人ゐねえぢやねえか？

クリステ　（不愛想に）あんなやつは、ああやつて埋めときや澤山だ。

マイケル　（クリステの背中を叩いて）これさ、お前は不人情な人殺し野郎だなあ？　お前が女房を嗅ぎあてて行つた家のおやぢは災難だなあ。（ショオンを指して）俺の娘の婿に極めたあのはにかみやの眞面目な男を見てくれ、今日二人を夫婦にするちう金びかのお許し狀を貰つて來たんだ。

クリステ　それで今日二人を婚禮させるんか？

マイケル　（威張り返つて）さうよ。俺がどんなに呑んだくれだつて、自分の娘を獨身でお前のやうなふざけものの惡漢と一緒に置いとくと思ふのか？

ペギイン　（ショオンから急ぎ離れて）お許しが來たつて、ほんと？

マイケル　（得意氣に）レイリイ神父様がしちめんどくせえラテン語で讀んで下すつて「まづ間に合つてよかつた。わしは大急ぎで二人をめあはせよう。あの若い男が邪魔に這入つちや大變だから」つていひなすつた。

ペギイン　（猛烈に）間に合はないでおあいにくさま、あたしがこれから夫婦にならうつていふのは、此人だよ、このクリステ・マホンだよ。

マイケル　（恐しさうに、大聲で）お前、この男を俺の息子にする氣か？　おやぢの血で濡れてそれつきり乾からびついた此奴をか？

ペギイン　さうだよ。女の身でションちやんのやうな人と夫婦になるのは情ないぢやないか、まるで柴山子のやうなのろまで、亂暴もしなけりや、ろくなはなしも出來ない者とさ。

マイケル　（ため息をついて椅子に沈み込む）ああお前は罰當りだ、こんなに俺が酒びたりで弱つてるとこへめちやに心配をさせやがる。みんながざまを見ろつて云つたら、おらあ腹を立てて日がな夜どほし胸の中に風を吹つ通して怒鳴つてゐなくちやなるめえ？　ショオンや、何とかおれの加勢をしねえか？　ちつとも燒く氣はねえんか？

ショオン　（ひどく悲觀して）おやぢを殺した男をやくのはおつかねえや。

ペギイン　ほんとに、お前なんぞと夫婦になつちやたまらないわ、母親のない娘にはあぶない事が澤山あるわね。此人が西からだか南からだか此處へやつて來ないうちに、あたしがお前と夫婦になつちまはなかつたのは、なんて仕合せなんだらう。

ショオン　天下の往來からうすぎたない宿なしを拾ひ上げるてえのはお前も變りものさ。

ペギイン　（馬鹿にするやうに）ちやあお前、自分のことを、春のお天氣の好い日曜に女と一緒にぶらつける色男だと思つてるのかい？　お前はつれの女に、百合や薔薇の代りに牛の肝臓（きも）の話でもするだらう？

ショオン　ちやあ、お前は俺がどれほどお前のことを思つてるんか考へてくれねえんか、教會のお許しのことも俺がやらうつていふ澤山の牝犢のことも、金の指環のことも考へてくれねえんか？

ペギイン　キラキインのショオン・ケオさん、お前はあたしには勿體なすぎるわ、お前は何處かへ行つて、ミイスの野原に一杯になるほどの牛を持つてる、埃及のパロのお母さんのダイヤモンドでめちやくちやに飾り立てたやうな、立派な奥さんを探しなさい、ションち

やん、お前にはそれが似合ひだよ。ぢや、さよなら。（クリステの後に引きさがる）

ショオン　聞いてくれねえか、その俺の……

クリステ　（恐しい權幕で）若けいの、出て行きなさい、さうでないとおらあ今日もまた人殺しをやるかも知れねえぞ。

マイケル　（叫びつつ立ち上がる）人殺しだと？　お前氣がふれてるんか？　今夜の御馳走の酒が一杯に並んでる此處で人殺しをやらうつてんか？　喧嘩がしたけりや、海岸へ出て行け、潮があげてくりや、どんな證據だつてみんな洗ひ流しちまふ。

（ショオンをクリステの方に押しやる）

ショオン　（振り放して、マイケルの後に隠れる）マイケル・ジエームス、おらあ此奴と喧嘩はやんねえ。何處から降つて來たか分かんねえやうなこんな野蠻人に手向ふよりは、死ぬまで戀にくすぶりながら獨身でくらす方がましだ。マイケル・ジエームス、お前自分で掛かれよ、でなきや、俺の牝の犢だのスニームの青牛だのをお前が損することになるぜ。

マイケル　俺に喧嘩しろつていふのか？　彼奴はおやぢ殺しをするやうに出來上がつてるんだ（ショオンを押し戻す）馬鹿だな、早くやつつけちまへ。

ショオン　（少し進んで）手で打たうか？

マイケル　お前の西つ側の鋤でやれ。

ショオン　もしこれで打つたら、おらあ絞罪が恐しいや。

クリステ　（鋤を取り上げる）ぢやあ俺がお前を絞罪にしてやる、それとも此處を出て行くか。

（ショオン戸口から逃げる）

クリステ　やい、一昨日來い！　（マイケルの許に行き、なだめる調子で）お前もあんな意氣地なしの惡ものを家へ置いときたかあないだらう。どうか承知して、あの娘が俺と約束するのを祝つてくんな、おらあ好運の星の潮時に乘り合せてゐるんだから、此處の家に置いといて、決して損はないよ。

ペギイン　（マイケルの他の側に立つて）さあ祝つて下さいよ、あたしほんとに此人と夫婦になることを神樣に誓つて、決して心變りしないから。

マイケル　（眞中に突つ立ち雙方につかまりながら）俺が思ふに、人間がらくな死に樣をするのも苦しい死に樣をするのも、そりや神の御心だ、何にしても人間は澤山の子孫を生み殖やし

て此世界が育つやうにしてやるのが神の御心だ。獨身者が他人の家で何か食つて、又ほかの家で一杯飲んで、岩の上で迷ひ子になつた老年の驢馬みてえに、自分の家といふものがなかつたら何の用に立つ？　（クリステにいふ）お前のやうな者を自分の家へひつぱり込んだらいつ何時殺されるかも知れねえといつて、世間のやつらはおつかながるかも知れねえが、おらあアイルランドの男一疋だ、よしんば不時に殺されたつて、彼女がショオン・ケオの種のいちけた餓鬼どもを澤山生み出して俺の寢床の廻りにうようよさしてくれるよりは勇ましい惡たれ小僧をうんと生んでくれた方がいい。（兩人の手をつなぐ）向う見ずは天下の寶だ、おやぢの胴なかまで一打ちでぶち割つた男は十人前の元氣があるわけだ、神様もマリヤ様も聖パトリツク様もお前たちをめぐんで今日から繁昌さして下され！

クリステとペギイン　アーメン！

（家の外に騒動。老マホン駈け込む、凡ての群衆及びクイン後家續いて入る、老マホンはクリステに飛びかかり、彼を打ち倒して、なぐり始める）

ペギイン　（マホンの手を抑へて）お待ち！　ぜんたい、お前は何だい？

マホン　やつのおやぢだ、面目ねえが。

ペギイン　（あとじさりして）死んで生き返つて來たの？

マホン　鋤の一打ちぐれえで此おらが直ぐへたばると思ふか？　（再びクリステを打つ）

ペギイン　（クリステをにらみつけて）お前は嘘をついたんだね、お父さんを打ち割つたなんていつて、どうもしもしないくせに。

クリステ　（マホンの杖を握つて）こりや俺のおやぢぢやない。こりや世間を騒がす亂暴の氣違ひだ。（後家を指して）あの人だつて知つてゐる。

群衆　貴様はペギインを瞞すんだな。クインさんは今日此の男を見たんだ。それを貴様が知つてたんだらう！　うそつきめ！

クリステ　（呆れ返つて）こいつこそ嘘つきだ、頭を打ち割られてぶつ倒れて、死んだと見せかけやがつて。

マホン　おらあ手前が手向ひしたんでおつたまげてぼんやりしてる間に、手前はどんどん山を駈け下りて逃げてつたぢやねえか？

ペギイン　それをあたしたちは御機嫌とつてえらものにしてゐたんだね、こいつはたかがそうつと一ト打ちぶつたぐらゐで冷汗を出して逃げちやつたんだ、さつさと此處を出てお

くれ。

クリステ　（あはれつぽく）お前も今日俺がやつたことを見たぢやないか、此ぢぢいの手から俺を助けてくれ。何もそんなに泡をくつて俺をおつぽり出さずといいぢやないか？

ペギイン　お前の計略にかかつたのがくやしいわ、此三十分ばかし前にあたしの心の心底から思つてゐたのがお前かと思ふとくやしいわ。（マホンに向つて）どうぞ此男を連れてつておくれ、あたしがマンスタアの大嘘つきの馬鹿者に怒りつけてるところを世間に見られるのはいやだから。

マホン　さあ、さつさと罰を受けに、俺と一緒に來るだ。

群衆　（嘲笑する）やあい、人氣男！　メヨの親分になるつもりでゐた若い衆やあい！　をぢさん、いぢめてやんなよ。

クリステ　（おどおど恐怖を以つて立ち上がる）なにしにお前たちは俺を苦しめるんだ、もしあの一と打ちよりほかに、俺がちつとでも誰かに悪いことをしたといふんなら、神様の力の雷に打たれて死んでもいい。

マホン　（聲高く）ほかに悪い事をしねえといふんなら、手前はやくざ野郎だ。此世界中の

罪惡はみんな手前のやうな奴が行るんだ。

クリステ　（兩手を上げて）神様の名にかけて……

マホン　神様を引き合ひに出さずと置け。それとも、神様に賴んで、旱魃だの、熱病だの、喘息だの、コレラだのよこして貰ひたいのか？

クリステ　（クイン後家に）お前が中にはいつてなんとか助けてくれないか？

後家　わたしも隨分骨を折つたんだよ、もうこの先きは御免だよ。

クリステ　（絶望して周圍を見廻す）ぢやあ俺はもう一遍、あの責苦の中へ歸らなけりやならねえんか、それとも、此處を逃げて、八月のごみつぽこりで咽喉の孔に泥の塊を拵へたり、三月の風に吹かれて肋骨の中を笛みたいにヒユウヒユウいはせて、ごろつきになつて國中をうろつくか？

セイラ　ペギちやんに助けてお貰ひよ。ああいふ人はちよいちよい氣が變るから。

クリステ　おら、いやだ。女の美しいのもくるしみの種だ、キイルの草つ原を南に向いて行つたら、夜中のお月様だつてあんな娘の顏が見たかろ、俺はあの人の前に這ひずり出てあのまぶしい額でおれの心を燒けこがしたくはない。

ペギイン　（泣き出したいのを堪へて、マホンに向つて手強くいふ）此處から連れ出しとくれ、それでなけりや、あたしは若い人たちに頼んでひどい目に會はさせるから。

マホン　（杖を振りながら、クリステに）なぐられるところをみんなに見られたくなきや、さあ出て來う。

ペギイン　（泣きわらひしながら）さうだよ、今にお仕置の見せものになるんだ、英雄に見せかけた大嘘つき、憎まれ者。

クリステ　（マホンに向つて鋭く）放さねえか！

群衆　さうださうだ。クリステしつかり、あの二人が打ち合ひをおつ始めたら、誰もよつつけないだらう。

マホン　（クリステに扼み掛つて）來いといつたら。

クリステ　（前よりも威嚇的に）放せといつてるんだ。

マホン　手前の足がびっこになつて、手前の背中が紫斑になつてから、放してやる。

群衆　雙方とも、しつかりやれ。おらあ爺さんの味方だ。それ、人氣者しつかり。

クリステ　（低い熱烈な調子で）騒ぐな止めてくれ、お前たちや、さつき俺を嘘一つのおかげで英雄にしてくれたが、今度は又、世間の馬鹿づらと一緒になるよりや、孤獨でさびしく暮す方がまあだ増しだと敎へてくれた、

（マホン、彼の方に進まうとする）

クリステ　（殆ど叫ぶが如く）離れてゐねえか……そばへ來ると、雲の上の守護本尊樣たちが目をぱちくりさせるやうな打ち方をみんなに見せてやるぞ。

（クリステ不意にすばやき動作を以て轉回して鋤を取り上げる）

群衆　（面白半分恐ろし半分で）氣が觸れたぞ！　みんな用心しろ！　阿呆のそばへ行くな！

クリステ　俺あ阿呆でも、都會の詩人の髪の毛をおつ立てさせるやうなうまい言を今日きかした覺えがある。俺はお前たちの駈けつくらにも飛びつくらにも勝つたぢやないか、それから……

マホン　無駄口をきかずと、一緒に來う。

クリステ　行くには行くが、お前をぶつ倒してからよ。

（クリステ鋤を持てマホンに飛びかかり、戸口から追ひ出す、群衆及びクイン後家續いて外に出る。家の外は大騒ぎ、次いでをめきの聲、暫時死の如き沈默。クリステ入り來る、なかば失神

の態で火の側に行く）

後家　（大急ぎで入り來り、彼の側に行く）みんながお前に向つて來るよ。早くお逃げ、でないと、きつと絞め殺されるよ。

クリステ　これからペギインは先刻と同じやうに俺をほめてくれるだらうと思つてる。

後家　（じれつたさうに）裏口からお出よ。わたしはお前に首しめ臺の上で息を引き取らせたくないと思ふから。

クリスア　（怒つて）いやだ、俺ら。ペギインと別れちや一生いきてゐたつて面白かあない。

後家　おいでといつたら、今だつて、昨夜とおんなじ身の上ぢやないか。今度は二度も人殺しをしたつて娘たちに聞かせて歩けばいいだらう。

クリステ　おら、ペギインと離れない。

後家　（じれつたさうに）ピンガム町からミイスの原まで、どんな村にだつてあんな娘はゐるよ。さあおいで、もつとずつと好い戀人を毎月わたしが見つけて上げる。

クリステ　ほしいのはペギインばかしだ、お前がどんな選り抜きの女を大勢連れて來て、その女たちを肌衣一枚で、此處から東の國まで立ち並ばせたところで、おれにや用はねえ。

セイラ　（自分のペテコートを一つ引きはづしながら駈け入る）みんなが此人を絞らうとしてるよ。（自分のペテコートと肩掛を後家に差出す）これを着せて、東の方へ逃がしてやつとくれ。

後家　いま、氣が狂つてるのよ。でも、二人で着せてやつて、わたしが渡し船に乘つけてアキイル行の船まで送らう。

クリステ　（力なく抵抗しつつ）よしてくれ、これ、俺は今日の好運を考へてるところだ、きつとあの女は女房になつてくれる、そして俺はたうとう英雄だといふ證據を見せたんだ。

（二人はクリステにペテコートを結びつけようとする）

後家　此人の左の手をおつかまへ、二人でひつぱつて行かう。おいでつたら。

クリステ　（不意に立ち上がる）あの女から俺を離さうてえんか？　二人が夫婦になるのをお前たちはやくんだな？　さつさと歸つてくれ。

（彼は腰かけを振り上げて兩人を嚇す）

後家　（立ち去らうとして）この人は牢屋に入れるより氣違ひ病院に入れるがいいんだよ。わたしたちは裏口から行つてお醫者を呼んで來て、それでもつて助けてやらう。

（後家はセイラを連れて向うの戸口から出て行く。男たちは表の戸口に群れて立つ、クリステ再び火の側に腰かける）

マイケル　（恐しさうに囁く）爺さんはほんとに殺されたんか？

フィリイ　最後の息を引き取るとこをおらあ聞いたんだ。

（一同クリステをのぞき見する）

マイケル　（縄を持って）あの様子を見な。絞刑吏のやるやうな輪をむすんどいて彼奴がうつかりしてゐる内に、頭の上からおつぱめるがいい。

フィリイ　ショオンや、お前やつてくれ。この中ぢやお前が一番酔つてゐないから。

ショオン　おいらが側へ行くんか？　あいつは俺を一番憎がつてるぢやねえか？　ペギイン、お前やつてくれ。

ペギイン　それぢや、おいで。

（他の連中と一緒に進む、一同してクリステの頭から二重に絡んだ縄をかぶせる）

クリステ　どうしたんだ？

ショオン　（一同クリステの両腕に固く縄を締めつけると、一人で得意げに）巡査んとこへ行くだ、今度はお前が往生するだ。

クリステ　俺がか？

マイケル　もし俺たちがお前を見のがしてやつたら、神様が俺たちに法律の罰をあてなさるかも知れねえ、だからお前もすなほに行つてくれ、絞め首はやさしい手つ取り早い死にかただ。

クリステ　おらあ動かない。（ペギインに）今度はみんなの見てる前でやつつけたんだ、お前、あれを何と思ふ？

ペギイン　あたしはかう思ふ、知らない人の法螺を聞いてれば感心するけど、背戸で喧嘩したり鋤で打つたりするのを見ては、こけ嚇かしのうそつ話と實地の悪い事とは大變違つてることが分かつたよ。（男たちに）此處から連れ出しとくれ、さもないとあたしたち大勢が此奴のした事で調べられるだらう。

クリステ　（恐怖を帶びた聲で）お前が俺を追ひ出すのか、指の先きに角の生えたやうな絞罪役に、おそろしい縄のわなを俺の耳根つこへ引つ絡めさせるために？

男たち　（縄を引く）さあ、來ねえか？

（クリステ、床の上に引き倒される）

クリステ　（テイブルの脚に自分の足をからんで）ペギイン、繩を切つてくれ。おらあお前たちん許から出て行つて、今日からは、キイルの狂人どもみたいに、岩にこびりついた濕糞だの青い草だの食つてくらさう。

ペギイン　そしてお前のやうな生意氣な嘘つきのかはりに、あたしたちが絞罪になるのかい？（男たちに）連れてつとくれ、此處に置かずと。

ショオン　首に一つ卷きつけて、うんとしめろ。

フィリイ　お前自分で卷きつけろよ。どうもしやしねえ、食ひつかれねえやうに離れて掛りや大丈夫だ。

ショオン　おつかねえなあ。（ペギインに）燃えてる泥炭を持つて來て奴の足をやいてやんな。

ペギイン　（ふいごで火をおこす）さあ、出ておいで。それでないと、向う脛を燒くよ。

クリステ　俺を責めようと思つて火をおこしてるんか。（クリステの聲高くなり強くなる）お前たちはさういふ奴等か？　ちやあ、みんな用心しろ、どうせ絞罪になるなら、道づれがほしいから、死ぬ前にお前たちの血を流してやる。

ショオン　（ちぢみ上がつて）フィリイ、しつかり持つててくんな、ほんとに、氣をつけてくんな。きつと彼奴はこの俺に復讐をしようてんだ。

クリステ　（殆ど愉快さうに）もし俺が手前たちを捕まへたら、晩方には手前たちは地獄の鳥をおどかす案山子のやうにぶらさがつてるだらう。へん、手前たちは俺のおやぢの幽靈と一緒に、地獄の境のリムボーでも通つて威勢よく乘り込むがいい。

ショオン　（ペギインに）早くしねえか？　ああ、おつかねえ奴だ。レイリイ神父様が酒を飲むなあ罪だといひなさるが、眞理だなあ、お前たちは今みんな震へてがたついてゐるぢやねえか？

クリステ　もし手前たちの中の誰かの首をねぢ切つてやれたら、おらあ男らしく裁判所へ出てびくびくものの陪審官達の前で、立派に宣告を受けてやるがなあ。俺が繩にぶらさがつて死んだら、メヨの土地で口上言ひがふれて歩き、絹や繻子の着物を着た奥さんたちがレイスのハンケチで涙を拭いて、俺の恐しい死樣を詩や小唄に作つてくれるだらう。

（クリステ床の上を跪き廻つてショオンの足を咬む）

ショオン　（叫ぶ）足を咬まれたあ。狂犬みてえな奴だから、おらあ死んじまふだろ。

クリステ　（自分のやつた事に滿足して）きつと死ぬぞ、そしたら二三週間もたつて俺が行く時、地獄の國旗を振つて迎へに出て來い、惡魔だつてケリイにもメヨにもおやぢを殺した奴をさう澤山は知るめえから。

（老マホン後の方から四ッん這ひになり入り來て、樣子を見てゐる、一同氣がつかない）

男たち　（ペギインに）火を持つて來てくれ、よう。

ペギイン　（進んで來る）さあ、觀念おし。（彼の足を燒く）

クリステ　（蹴たり叫んだりする）ああ、助けてくれえ！

（クリステ蹴つた爲にテイブルから離れる、一同彼を戸口にひきずり行く）

ジミイ　（老マホンをみつけて）みんな見ろ、なんだか這入つて來たぞ？

（一同クリステを放して左手に逃げる）

クリステ　（膝で立つてマホンと顏を見合せる）三遍殺されにやつて來たんか、それとも何か用があるか？

マホン　やつらは何だつてお前を縛つた？

クリステ　俺がお前を殺したんで絞罪にするつて巡査んとこへ連れてくとこだ。

マイケル　（あやまるやうな調子で）あぶねえ法律で馬鹿を見ねえやうに各自の家を守るのが神樣の御心だ、わしが店をつぶされたり絞罪になつたりしたら、娘はどうなるだらう？

マホン　（クリステの繩を解きながら、にがり切つて）お前が娘の背なかに袋をしよはせて、死ぬまで貝を拾はせたところで、こつちや構はねえ。だが、おらと伜とは俺たちの勝手にする、これからはあ、メヨの土地の惡黨や馬鹿者の話をふれ廻つて、面白い目をするぞ。（繩をとかれたクリステに）さあ來う。

クリステ　お前と行くんか？　ちやあ、强い大將が野蠻人の奴隷をつれてくやうに、出かけよう。さあ來う、今日から俺はお前に俺のオートミイルを煮させたり、俺の馬鈴薯を洗はせたりさせてやる、これからはどんな喧嘩も俺の勝ちだ。（マホンを押し出して）出かけろと、いつてるに。

マホン　俺にいつてるんか？

クリステ　ぐづぐづいふな。さあ出るんだ。

マホン　（出ようとして振り返つて肩越しにクリステをみる）すてきだなあ！（にやにや笑つて）

おらあ又氣が觸れた。（出て行く）

クリステ　おらあ此處のみんなに千萬遍も禮をいふ。おかげで俺も一人前の野郎になれた、今日から審判の日の朝まで、おらあ一生面白をかしくくらすんだ。（出て行く）

マイケル　やれ、ありがてえ、これでおちついて酒が飲める。ペギイン、ビールの口をあけねえか？

ショオン　（ペギインの側に寄る）やつぱりこれでレイリイ神父様が二人を夫婦にして下さるたあ、奇蹟のやうだな、これで、彼奴の食ひついたひでえ傷が癒つてくれりや、ほかになんにも案じることはねえ。

ペギイン　（平手でショオンの耳を打つ）あつちへ行つとくれ。（肩掛を頭からかぶつて狂氣の如く歎く）ああ、どうしよう、ほんとにあの人を逃がしちやつた。この西の土地いちばんの人氣男を逃がしちやつた。

――幕――

悲しみのデヤドラ（三幕）

人

ラバルカム　デヤドラの乳母
老女　ラバルカムの婢
オーエン　コノールの近侍、間者
コノール　アルスタアの大王
フアガス　コノールの友人
デヤドラ
ニイシヤ　デヤドラの愛人
エンリイ　ニイシヤの弟
アルダン　ニイシヤの弟
二人の兵士

第一幕、フアド山に於けるラバルカムの家。第二幕、蘇格蘭(アルバン)の地、初冬の朝はやく、デヤドラとニイシヤの天幕のそと。第三幕、イメン城下の天幕。

第一幕

フアド山のラバルカムの家。左手に奥の部屋に行く戸あり、右手に戸外に出る戸口あり。後方に窓あり、壁掛を縫箔しかけた枠がある。後方壁際に大きな戸棚と重さうな樫の櫃がある。室内は片づいて清らかであるが、何の裝飾もない。五十ぐらゐの婦人ラバルカム、壁掛の枠で仕事してゐる。老女一人左から登場。

老女　まだお歸りになりませんか、もう夜になりますに？

ラバルカム　まだお歸りなさらない……（心配を隠して）雲が西からも南からも出て來て暗く見える、まだいつもの時刻より遲くはないのに。

老女　いいえ、遲うございます、それに、人の噂では、ウスナのお家のニイシヤ様と弟様がたがこの二三日向うの山で兎狩をしておいでなさいますさうで、滿月の夜からの事ださうでございます。

ラバルカム　（前より心配さうに）神々様がその人達の眼に彼女をお見せなさらなければいいが――（どうもならないやうに溜息する）もし又その人たちが彼女を見たとしても、わたしの願ひでその人たちを連れて來たのでもなければ、わたしの願ひで追ひ拂ふことも出來ない。

老女　もしそれがあなたのお願ひでないのなれば、彼女に氣をつけてお上げなさるがようございます、もう大人になりかけておいでなさいます、やがては女王にもおなりなさる方でございますもの。

ラバルカム　あのやうな氣儘な人を誰に抑へられよう、前々から末の案じられる豫言がなかつたとしても、老年の王様が彼女をお迎へなさつたら、心配事の出來るのはお前にも分ることだらう、彼女は自分の美しいことよりほかに何も知らずに、山を歩いておいでなさる。

老女　ほんにわたくしたち誰にもどうにもなりませぬ……コノール様ほどの方を夫になされて彼女はお悦びなさつてもよい筈でございませう？　まだ王様もさほどのお年でもありません、何しにまた王様はこんな寂しい處に彼女を置いて訪ねておいでなさるのでございませう、そして此わたくしに煮やきのお世話をおさせになつても、彼女には何のお好みも

ありはしません。（外を見る）

ラバルカム　谷の方からお歸りか？

老女　見えません、いえ、お待ちなさいまし――男の人が二人フアーズの中から出て來ます――（大聲に）王様とそれにフアガス様です。デヤドラ様がお留守では王様は今日はお氣むづかしうございませう。

ラバルカム　（忙しく室内を片付ける）もう近くにおいでなさつたかい？

老女　川を渡つておいでなさいます、そしてデヤドラ様も木の枝をお荷物にして山の際からお見えになります。わたくしが駈けて行つて皆様のお眼にとまらない内にお身なりを直して上げませうか？

ラバルカム　いいえ、およしなさい。お前が王様に見られたら大事だ。もし朝日と彼女との中間に鷹が飛んでゐたら、王様はその鷹さへも妬ましくお思ひなさるだらう（外を見る）爐の側に行つて何も知らん顔して働いてゐるがいい。

老女　（腰掛けて食器を磨き始める）今夜は面倒なことがありさうだ、「王様のあのお歩きなさりやうも、お手をお振りなさる様子も、何かお怒りなすつていらつしやるらしい。」

ラバルカム　（何事もすつかりあきあきしたやうに）もしや、王様が彼女にお怒りなすつて、萬事がすぐとおしまひになつてしまつたら結構な事だらうに、わたしはあのお二人の中にはさまれて弱り切つてしまふ。（縫箔臺に戻る）それ、もう入口までおいでなすつた。

（コノールとフアガス登場）

コノールとフアガス　神々のめぐみあれ。

ラバルカム　（立上がり禮する）どうぞ神々様がお護りなさいますやうに、そしてどんな惡いことも永久にお身に近寄りませんやうに。

コノール　（見廻す）デヤドラは何處にゐる？

ラバルカム　（努力して平氣らしく口をきかうとする）フアドの山にお出かけになりました。何時も何時も花や胡桃を採りにお歩きになつていらつしやいます、時々は枯枝なんぞさへ拾つていらつしやいます。しかし新しい元氣を拾つておいでになるうちは、私は何も申さないがよいと存じます、何事もお氣まかせにして。

（フアガスは老女と談話する）

コノール　（氣むづかしく）雷がなりさうな夕方は外歩きする時でない。

ラバルカム　（少し不安らしく）彼女はどんな横道も徑も御存じでいらつしやいます、そして稻妻も彼女のうつくしさを選り拔いて焰を墜としはいたしますまい。

フアガス　（氣がるく）これの言ふのはほんたうだ、あなたはまづ腰かけて落ちついておいでなさるがいい。（外套の中から袋を出して）私が持つて來たものを數へて見て、奥の櫃にしまひませう。

（フアガス老女と二人で奥の部屋に行く）

コノール　（腰かけてあたりを廻す）デヤドラにと言つてわしが贈つた敷物や窓掛や銀の鍋なぞは何處にある？

ラバルカム　敷物や窓掛はこの櫃にございます。ねんぢゆう泥や草だらけの足で出入りするから、汚すといけないとおつしやつておいでになりました、十一月祭の夜から降りつづけでございますので。銀の鍋や金の盃は向うの箱にしまつてございます。

コノール　みんな持出して、今日から使ふがよい。

ラバルカム　さういたしませう。

コノール　（立上がり枠側に行く）これは彼女のか？

ラバルカム　（その話をするのを悦んで）さうでございます。彼女ほど器用な方はないとみんなが言うてをります、いろいろな形をお縫ひ出しになつて、紅に紫をお交ぜになりましたり、それを絲や金でへりどつたりなさいます。

コノール　（少し不安さうに）この前わしが此處に來た時から今日までのあひだ彼女は忙しい賢い生活をしてゐたかな？　イメンでくらすやうになる時の支度はしてゐるか？

ラバルカム　（そつけなく）それはあなたにも私にも嬉しいおたづねではございません。（思ひ切つて言ひ出す）ほんとの事を申し上げれば、彼女は、御自分がまだたつた二十ばかりで、えらい王樣と結婚なされますのには、すこし物が分り過ぎておいでになりました。王樣、わるくお取りなさいますな、今晩彼女にお會ひになりましても、あまり好いこともおありなさいますまい、いくらわたくしがお話し申しましても、この二た月三月だんだんに氣儘になつておいでなさいました。

コノール　（より悪い狀態でないのに安心して、しかし強くいふ）彼女の將來にふさはしいやうに、もつとお前が教へてくれないのはひどいな？

ラバルカム　わたくしは四十年からあなたにお仕へ申してをります、そのわたくしが今晩

あなたに申上げることは、彼女の相談相手にはたくさんの小鳥がをりますもの、そして日向ぼつこにいらつしやる川べりの澤水がございますもの、どうしてこの老女にお構ひなさいませう。さういふ時に、あの眞白い皮膚と、赤い脣と、青い水と、身邊の羊齒とを御覽なさいましたら、どんなにあなたが御執心なさつても、あなたなんぞのためにお生れなさつた方ではないと、お氣づきなさるかも知れません。

コノール　彼女が誰のために生れ出たのでもわしは構はぬ、誓つて、彼女はわしの伴侶にする。

（王はデヤドラの仕事箱を調べる）

ラバルカム　（再び前のやうな憂鬱に沈む）あなたのやうな分別ざかりの方が小さい子供を愛するやうな愛と、大人の婦人を愛するやうな愛とを、ああいふお氣立の彼女にお與へになるのを見ますと、わたくしは彼女がこの世に災禍を持つてお生れ出になつたといふ豫言が本當になりさうに思はれて、恐しうございます。コノール、大王ともいはれるあなたが彼女の針をおいぢりになつたり絲の數をお數へになつたりしていらつしやるのを見ますと情なうございます。

コノール　（立上がる）あんまり無遠慮のことを言はないものだ、としよりのくせに。（室を横切つて行き又戻る）惡い豫言があつたといふことを彼女は知つてゐるのか？

ラバルカム　（以前の調子に戻つて）時々そんなことをお話したこともございます、しかしそれはまるで生れて七十日も立つたほどの、山を駈け歩いてゐる仔羊に話してきかせるやうなもので……死ぬことや悲しいことの懼れぐらゐでああいふ方をおとなしくするものではございません。

コノール　（外を見る）今歸つて來たやうだ。奥へ行ってフアガスと話をしてゐてくれ、わしはすこし彼女と話をするから。

ラバルカム　（左手に行きながら）もしわたくしの申上げた事が御機嫌にさはりましても、どうぞ彼女には何もお小言をおつしやらないやうに。

コノール　（かたくるしく）わしに何もいふことはない。彼女が元氣で氣輕でゐるのをわしは悅んでゐる。

ラバルカム　（彼の調子が氣に觸つて）悅んでおいでですか？　（鼻で笑つて皮肉に）わたくし風情のものは眞實のことをいひ、かしこい方たちは何時でも嘘をおつしやるとい

ふのは、不思議なことでございますね。

（彼女左手の部屋に入る。コノール暫時鏡の前に立つて姿をなほし、それから少し左の方に行つて待つ。デヤドラ、粗服をまとひ、小さい袋と樹枝を束ねたのを持つて入り來る。コノールを見てほんの瞬間おどろいた樣子、それから彼に一禮して平氣な樣子で爐の方に行く）

コノール　デヤドラ、しばらくだつたねえ。わしはあなたに指環と寶石をイメン・マカから持つて來た。

デヤドラ　ありがたう。

コノール　山から何を持つて來たの？

デヤドラ　（すつかり落ちつき拂つて）胡桃をひと袋と、あしたの朝の焚木を拾つて來ました。

コノール　（苛だたしさを押へ切れないで）あなたはアルスタアの女王になる行儀作法をそんなところで拾つてゐるのか？

デヤドラ　（彼の調子に少し反抗の氣味で）わたくしは、女王になりたくはありません。

コノール　（殆ど冷笑するやうに）あなたはそんな茶色や灰色の着物を着て、鷲鳥の世話をしたり、牛を小舍に追ひ込んだりしてゐたいのだらう――里うまれの卑しい女たちと同じやうに。

デヤドラ　（ひどくぶつかる調子で）そんな事をしたいとは思ひません。（縫箔臺に行き、仕事を始める）わたくしのやうに生れついた娘なら、自分の風采に相應した相手を欲しいと思ふのがあたり前でせう……鴉の羽のやうな黑い髪の男で、雪のやうな皮膚で、雪の上に血をこぼしたやうな赤い脣の男を。

コノール　（自分の失錯に氣づいて、暫時してから機嫌をとる調子で彼女の仕事を見る）あなたが何を望むにしても、それはそれ、布の上に繪を縫ひ出したり色を配合せたりするあなたの手際にはどんな女王だつてかなふまい。（臺に顏を寄せて熟視する）これは何の圖かな？

デヤドラ　（はつきりと）三人の青年が、茂つた山峽で狩をしてゐるところです。

コノール　（まるで賴むやうな調子で）あなたがイメンの森蔭で銀の鎖のついた犬を連れて狩をするのももう近い內のことだ、わしはあなたのために白い獵犬を育てさせてゐる。灰色の馬も、みんなアルスタアとブリテンとゴオルの土地で生れた一ばん良いのを選んで置いた。

デヤドラ　（前の通り知らん顏をして）人の噂で聞きましたが、アルスタアとブリテンとゴ

オルの土地で、ニイシャとその弟たちほどの獵人はないさうですね。

コノール　（ひどく眞面目に）あなたがニイシャとその弟たちの話をしたり、姿を縫箔したりするのは不思議ではないか、あの人たちとあなたの身の上に就いての豫言があることはあなたも知つてゐる筈だのに？　しかしあなたは何も知らないのだ、そんな事をわしが氣にするのは間違つてゐる、それよりもこれからはあなたの知らないことをわしが補つて行くのがほんたうだ。

デヤドラ　あなたはいろいろな事を知つていらつしやるのでせうね？

コノール　わしのやうなものはあまりいろいろな事を知りすぎてゐて、重荷にも恐れにもなる。それだからわしはあなたのやうな年の若い氣輕な人を選んだのだ……あなたは一年ぢゆうどの日もどの日も樂しく愉快でない日はないだらう？

デヤドラ　さうばかりでもありますまい。ここにだつてほかの世界と同じやうな寂しい日もいやな夜もあります。

コノール　わしに樂しいよい日がすくないと同じやうに、あなたには悲しい日がすくないだが。

デヤドラ　よい子が王様よりも樂しくくらしてをりますと、あの老女が申してゐますのに、あなたは何しに始終ここにいらつしやるのでせう？

コノール　わしの身に一年増しに老年が來て、イメンの城門に枯葉が毎年散るのを見ては、どうして樂しくしてゐられよう？しかしこの頃になつて、イメンの岡に灌木の若芽がもえ、櫟の枝に鴉が二羽づつとまつてゐるのを見ると、デヤドラが大人になつてわしの伴侶にも友達にもなつてくれる日が一年だけ近くなつたと、さう思つて、わしは悅んでゐる。

デヤドラ　（聞えないくらゐの聲で）わたくしはイメンに行つてあなたの伴侶にはなりませんの。

コノール　（彼女の言葉に構はずに）イメンに行けば、あなたは威張つて幸福にくらすことが出來る、そしてどんな若い男たちがすぐれた獵人であらうとも、わしのやうなものと一緒になるのがあなたの身にはいちばん適はしいことだといふことが分るだらう。わしとあなたに入用なのは安全な立派な住居だ、もう二日か三日してイメンに行けば、さういふ住居にはいられる。

デヤドラ　（吃驚して）もう二日で！

コノール　部屋の用意もさせてある、もうすぐあなたは彼處に行つて私の女王になりアイルランドの五つの國の女王になるのだ。

デヤドラ　（おびえたやうに立上がつて歎願する）わたくしはここにゐた方がようございます……どうぞここに殘して置いて下さい、わたくしはここの山路にもほそ路にも里の人たちにもよくなじんでゐます……わたくしは屹度かういふ生活をするやうに生れついてゐるのでせう。

コノール　あなたはイメンに行つてわしと一緒になれば、もつと幸福にもつと高い生活が出來る。わしはあなたの友人となり、豫言されてゐる大へんな不幸や災難からあなたを守つて上げる。

デヤドラ　山のがけ路で氣樂に遊んでゐるのがわたくしの望みですもの、わたくしはイメンに行つてあなたの女王とはなりますまい。

コノール　わしは早くあなたを連れて行きたい。あなたがわしのとこに來て、廣い寂しい廊を歩くのを見る日が早く來るやうに、わしは待ちどほしくてたまらない。わしは萬事大丈夫に支度してある、それでも出來るだけのことをしても、まだわしの心の奥に懼れがある、最後になつて大きな不幸が來てあなたを失ふのではないかといふ懼れが。デヤドラ、それだからわしは願つてゐる、どうか早く來てくれるやうに。あなたは、誰に向つても僞りを言はぬ丈夫の言葉を信じてくれ、わしの心が亂れ騷いでいふ言葉を信じてくれ。

デヤドラ　わたくしには行かれません。

コノール　（勝ち誇つた調子になる）あなたを連れて行くのがわしの望なのだ。わしは男だ、もう長いあひだアルスタアの王位の上であなたを待つてゐた。あなたはこんな處にゐて何時までも子供でゐるより、わしの伴侶となつてエマアルやメエヴのやうになる氣はないか？

デヤドラ　あなたはわたくしを御存じないのです、コノール、わたくしと一緒におなりになつてあなたは幸福ではないでせう……もう長いあひだわたくしは自分の身のまはりに月日がひどく早く過ぎ去るのを見てゐました。もうあんまり長いあひだ自分の氣儘に暮らす癖がつきました、そして、やつぱりわたくしはいつもさういふ風に暮らして行くのでせう。

コノール　（無頓着に）フアガスにわしと一緒に出かけるやうに言つてくれ。今夜はあなたがフアドの山でくらす最後の夜だ。

デヤドラ　（すつかり歎願の調子になる）どうぞもう少しのあひだ此處において下さいません

か。ああいふいろいろな不幸が豫言されてゐますのに、そんなに急いでわたくしを連れておいでになるのは無理ではありませんか？　たつた一年、ここに置いて下さい、わたくしはそんなにたいした事を願つてはゐません。

コノール　たいした事ではあるまいか、もう長い月日のあひだ、わしはイメンであなたの聲を待ちわびてゐる、そしてあなたはここで寂しく内氣になつて行く。わしはもう成熟した男だ、そしてこんなにも戀してゐる、デヤドラ、これでも、わしはアルスタアの王だ。（立上がる）フアガスを呼ばう、そして明日はイメンで用意が出來てるやうにさせとかう。

（左手の戸の方に行く）

デヤドラ　（王に縋る）フアガスを呼ばないで、コノール……一年だけわたくしを靜かにさせて置くと約束して下さい……たつた一年だけわたくしはお願ひします。

コノール　あなたは來年になればまた一年と賴むだらう、そして又そのあとの幾年かも。（呼ぶ）フアガス！　フアガス！（デヤドラに）年のわかい娘たちは何時でもぐづぐづしてゐる、情人が口を切らなければ。（呼ぶ）フアガス！

（フアガス、ラバルカムと老女を從へて入り來る、それと同時にデヤドラはコノールから急いで

離れる）

コノール　（フアガスに）暴風が來さうだから、夜の更けないうちに我家に歸つた方がよさうだ。

フアガス　（機嫌よく）デヤドラ、御機嫌よう。（コノールに）もう可成おそくなりました、そして雨といつしよに河水も增して來ます、山路や河石の上で足を滑らせながら歩くのは大王の仕事でもありますまい。

（コノールに手傳つて外套を着せる）

コーノル　（心を決してしまつた事を悅びながら――ラバルカムに）お前の規則をやり續けるのも、もう數日だけのことだ、お前もイメンに連れて行く、デヤドラとお前と。

ラバルカム　（柔順に）あなたの御規則はいつだつて破りはいたしません。

コノール　それでは、左樣なら。

（フアガスを連れて出て行く。老女戸を閉す）

ラバルカム　（顏を隱してゐるデヤドラを見ながら）きつと、あなたはかういふ事をなさるだらうと私が云ひましたらう？　あなたは御自分よりも少し分別のある者のいふことをお用ひ

なさらないで、御婚禮を自分で早くなすつたやうなものです。

デヤドラ　（驚ぐ心で）わたしがしたのではない。ラバルカム、わたしをここから連れ出して山の中に隠してくれまいか？

ラバルカム　半日も立たないうちに見つけ出されてしまひます、そしてあなたが何とおつしやつても、やつぱり王妃にされておしまひになります、それで私や私の身内のものは亡ぼされてしまひませう。

デヤドラ　（身に迫つて來た現實に脅されて）コノールに敵對することの出來る者はないのだらうか？

ラバルカム　コンノートのメーヴ女王とあのいちまきだけでせう。

デヤドラ　フアガスはコノールには敵はないだらうか？

ラバルカム　それは、氣が立つたら、敵におなりなさるかも知れません。

デヤドラ　（不意に興奮して、聲を低くして）ニイシヤとあの弟たちはどうだらう？

ラバルカム　（苛立しく）ニイシヤや御兄弟たちの事はお考へになりますな……何と言つても最後にはコノールに敵することの出來る者はありません、こんなお話をしてゐるのも馬

鹿げたことです、もしコノールに敵するものがあれば、その人は自分の手で短かい生命と悲しみを求めるやうなものでせう。

（ラバルカム向うへ行きかける、デヤドラ興奮し切つて固くなつて立上がり、窓に行き、外を見る）

デヤドラ　ラバルカム、河の踏石は水で隠れはしないだらうか？　山ではひどい夜ではないだらうか？

ラバルカム　（不思議さうにデヤドラを見る）それは、踏石はもう水に浸されてゐます、そして、この何年にもないひどい暴風の夜になるだらうと思はれます。

デヤドラ　（急に櫃を押しあけて布地や帷幄を引出して）これを窓へかけたりテイブルの下に敷いたりして、それから内にある銀の鍋だの金の杯だの葡萄酒の罎だのを出しておくれ。

ラバルカム　あなた、どうなさいました？

デヤドラ　（一枚の着物を取り上げて）ラバルカム、早く支度しておくれ、わたしたちは今夜を無駄に使つてはならない、早く飾りつけておくれ、わたしは向うの部屋に行つてイメンからよこされた立派な着物や寶石を身につけて見よう。

ラバルカム　今ごろそんなものをおめしになるのですか、雨のしめりで夜は眞暗で濕つぽうございますのに！　お氣がどうかなさいましたか！

デヤドラ　（興奮し切つて衣類をかかへて）わたしはダンデルガンのエマアルのやうに、コンノオトのメーヴのやうに身を飾つて見よう。もしコノールがわたしを女王にするといふのなら、わたしは、人の君主である女王になつて、自分の心の儘にして海から海の端までも攪き騷がしてもよい筈だ……敷物や窓掛をかざりつけて今夜わたしが眺めることが出來るやうにしておくれ。コンノオトの仔山羊の皮や西の國の山羊の皮をひろげておくれ。わたしは子供でも玩弄物でもない。わたしはいちばん立派な着物を着よう。クーフリンが馬を軛につけてゆくやうに、コナアル・キルネーが楯を腕にかけるやうに、イメンには連れてゆかれない積りだ、けふから私はアイルランドの男たちを野原に風が吹くやうに動かして見せる。

（デヤドラ向うの部屋に行く。ラバルカムと老女と互に顏を見合せてゐる、やがて老女は向うに行き戸の隙間からデヤドラをのぞき見る、それから靜かに戸を閉める）

老女　（恐れたやうに囁く）今まで召していらしつた古い衣服をお脱ぎになつて裸でいらつしやいます、お髪を光澤のいい編みになすつて。お氣がどうかなさいましたらうか、それとも、メーヴのやうな女王におなりになるのでせうか？

ラバルカム　（心配さうに掛布をかけながら）お氣がどうかなさるどころではない、わたしの方が氣が違ひさうだ、しかし、デヤドラだつてほかの女と同じやうに勝手なことをなすつてもよい筈だね、たとへ、全世界を滅してしまひなさらうと。

老女　（ラバルカムに手傳つて）早くなさいまし、こちらにおいでになる前に……私どもが彼女にこんなに追ひ廻されようとは思ひもしませんでした、今晩までもあの通りお靜かでいらしつたものを。王様はデヤドラ様にお勝ちになれませうか？　もう私が王様ならば、てんで彼女のやうなお人と夫婦にならうとは思ひません。

ラバルカム　それを窓にかけておくれ。きつとお氣に入るだらう。まづ、何がどうあらうと、デヤドラのやうな方がしまひまでお勝ちなさるわけさ。

老女　（窓のところで）空はまつ黑な山のやうに暗い、そして何年にもこの世に覺えないほどな大雨が降つてゐる、どうぞ王様が御無事なやうに。今夜、王様はお氣の毒な、お城にお歸りなされて、あの性質で、もう二三日うちには彼女の御身をお抱きなさるお積りでお

いでになるのだらう。

ラバルカム　王様がお歎きになつたり病氣におなりなさるぐらゐでは濟むまいとわたしは思ふよ、このはなしが終局になるまでには。

（右の方の戸をひどく叩く音）

ラバルカム　（びつくりして）どなたでございます？

ニイシヤ　（戸の外で）ニイシヤと、弟たちだ。

ラバルカム　私たちは頼りない女たちでございます。この暗い晩に、何の御用でございますか？

ニイシヤ　わたしどもは森の中で一人の少女に出會つたが、もし山に水が增して河水が路まで出るやうなことがあつたら、この家に宿を借りろと敎へてくれた。

（老女恐怖のために兩手を組合せる）

ラバルカム　（ひどく驚いて）おはいりなすつてはいけません……ここではどなたにもお宿は出來ません、そして若い娘なぞは此處には居りません。

ニイシヤ　ひどい暴風に雨宿りをさせて下さい、ただ雨宿りを。雲が薄くなつたら私たちはぢき出かけるから。

ラバルカム　東の方に小舍がございます、そこまでいらしつて下さい、ここにはお入れ申せません。

ニイシヤ　（ひどく戸を叩く）戸をあけてくれ、あけなければ、無理に開けてはいる。（戸が震へる）

老女　（臆病らしく囁く）入れておやりなさいまし。そして今晩はデヤドラ樣をお部屋に隱し申しませう。

エンリイとアルダン　（外で）あけろ！　あけろ！

ラバルカム　（老女に）お部屋にいつて彼女をおとめ申してゐておくれ。

老女　わたくしにはデヤドラ樣をお止め申すことは出來ません。彼女にはわたくしはまるで力がございません。あなたが御自分でおいでなさいまし、戸は私が開けませう。

ラバルカム　わたしは此處にゐてあの人たちを追ひ出さなければならない。（髮の毛と上着で顏を隱して）あちらに行つて彼女の番をしておくれ。

老女　神々樣お助け下さいまし。

（老女、奥の部屋にかけ込む）

幾人かの聲　あけろ！

ラバルカム　（戸を開ける）そんならおはいりなさい、どうならうと御勝手に。

（ニイシヤとエンリイ及びアルダン入り來る、驚いて見廻す）

ニイシヤ　ここは富貴の人の家と見える、牧者の家ではない。

ラバルカム　（顔を半分被ふた儘で腰かける）牧者の家ではありません、なりたけ早くお出かけになるがようございます。

ニイシヤ　（衣服から雨の雫を振りおとしながら、快活に）こんな暗い夜にしやはせと高貴な人の家らしい落ちつき場を見つけ出したのに、すぐ出て行くのか！　アルスタアのどこぞの金持が此處に來てここら近所の森で獵をするのだらう！　一杯飲んでもよいだらうか？

（罐を取り上げる）これは何人の酒か教へておくれ、その人の健康を祝して飲まう。

ラバルカム　あなたの御存じになるやうな人ではありません。

ニイシヤ　それでは君の健康と長い生命を祈らう。

（三人のために酒を注ぐ、三人で飲む）

ラバルカム　（ひどく不機嫌に）無理にはいつておいでなすつて、ひとりで勝手にお客になつて、訊いては悪いことまで訊いて……もしあなたが自分の遊び場所の靜かな住居があつて優しい奥様と二人でゐられたとして、若い男たちが近所にうろつき廻つて噂を聞きに來ましたら、どうお思ひなさる？　わたしが小むすめの時分には、アルスタアの男たちはもつと行儀作法も知つてゐました、みんなあなた方三人ぐらゐの年頃で、いたづら盛りの若さの人でしたが。ニイシヤは酔つぱらひで泥棒で、エンリイは他人の德利の口をお拔きなさると、タラの土地で人が話しましたら、よいお話でせう。

ニイシヤ　（極めて機嫌よく、彼女の側に腰かけて）あなたの年になればもう分る筈だが、コノールのやうな王でさへも、自分の腕環に唾をしたい夜もあるだらうし、立派な女王たちでも夕方の月に舌を出すこともあるだらう。我々は今晩まづそんな氣分なのだ、そしてただ酒ばかしが欲しいのではない。我々にこの家に宿を借りろと教へてくれたあの若い娘はどこにゐる？

ラバルカム　それを私にお訊きになるのですか？　……私どもは眞面目な人間で、あなたが若い娘の後を追つかけなさるお手傳ひはしません、その上着に下げていらつしやる金の

環飾を下すつたところで。

ニイシヤ　（飾を彼女に與へる）どこにゐる？

ラバルカム　（ニイシヤの肩に手をかけて、親密らしく囁く）もう一遍山の方へお戻りなすつて二つ目の岡のところでお曲りなさいまし、みんなで岡が三つ並んでゐます。そこから岩の上を行く細道があります、そこをいらつしやると、あちこちで犬のほえるのが聞えます、その犬の聲をあてにしていらつしやれば欅の樹の蔭の小舍に行きつきなさるでせう。そこに若いお轉婆の娘があります、あなた方がごらんになつたのはそれだらうと思ひます。

ニイシヤ　（愉快さうに）ちや、その娘と、あなたとに、一杯獻じる！

アルダン　あの娘のやうに若いこともあつたあなたの年齢を祝つて一杯頂かう！

エンリイ　（驚いた囁き聲で）ニイシヤ！

（ニイシヤ見上げる、エンリイ手招きする。ニイシヤそつちへ行く、エンリイ自分の手に持つてゐる金の杯にある何かを見せる）

ニイシヤ　（驚いて見る）これは王のものだ……ふちに王の記號がある。コノールが此家に泊りに來られるのか？

ラバルカム　（極めて迷惑さうに突つ立つて）コノールの物だと誰がいふのです？　あなた方のやうな若い氣樂坊たちが――（力を入れて横柄に口をきく）どういふ積りでこちらへうろついて來て、つまらない娘一人のために、世間に面倒を持ち込まうとなさる？　なんでイメンからこんな處まで迷ひ兒になつておいでなすつた？（ひどく苦い調子で）それとも、わかい男はありつたけの馬鹿な眞似をしても、とがめる者はないと思つておいでなさるのですか？

ニイシヤ　（眞面目になつて）雨は小止みになつたか？

アルダン　雲が切れかけてゐます……谷の峽にオリヨンが見えます。

ニイシヤ　（まだ機嫌よく）戸をあけてくれ、わたしどもはその欅の木と岩との中間の小さい小舍まで行つて見よう。門をはづして戸を開けてくれ。

（デヤドラ女王らしい衣服をまとひ非常に美しくなつて左手より入る。暫時立つてゐる、表の戸が開けられると同時に靜かに呼ぶ）

デヤドラ　ニイシヤ！　ニイシヤ！　私を捨てていらつしやいますな。私が「悲しみの女」デヤドラです。

ニイシヤ　（驚きに突き刺されたやうに）あなたですか？　雲雀に天を恨ませるやうな美しい聲をしてうたひながら森の中を歩いてゐたのは？

デヤドラ　あなたが口をおききなすつたのは、たしかに私でした。（ラバルカムと老女に）この二人の若殿がたエンリイとアルダンをわたしたちがいつも食事する小舍にお連れ申して、ありたけの御馳走をして上げておくれ。私はニイシヤお一人にお話したい事がたくさんあるから。

ラバルカム　（デヤドラの調子に威壓されて）さういたしませう、そして皆様のおゆるしを願ひます。私は皆様をおだまし申しました。

デヤドラ　（エンリイとアルダンに）わたくしどもの小舍にすこしの間お休みを願つてもお氣持惡くなさいますな。コノール王の料理人の料理したお夜食を上がつて、そのあひだラバルカムがメーヴやネサやロオのお話をお聞かせ申しませう。

エンリイ　ラバルカムに賴んであなた御自身の話をきかせて貰ひませう、そして、それがあなたに御都合よろしければ、私どもは滿足です。

（一同デヤドラとニイシヤを殘して行く）

デヤドラ　（中央の高い椅子に腰かけて）この腰掛におかけなさいまし。（腰掛を指す）低い腰掛ですけれど、コノールも今夜イメンの城の王座に坐るよりはこの腰掛に坐りたく思つてゐるでせう。

ニイシヤ　（腰掛ける）あなたはコノールがアルスタアの人たちの眼から隱してゐたフェリムの娘御なのですか？

デヤドラ　デヤドラがウスナの子たちの亡びる原因となり、そして自分一人の小さい墓に埋められて、後の世までも話の種に傳へられるといふ豫言は、世間の人が知つてをりませうか？

ニイシヤ　デヤドラといふ優れた才と類ない美を持つた少女のことを世間ではずゐぶん長く噂してゐました、知つてゐる人もたくさんありませう、そのあなたがもう女王となる年頃となつた今、あなたの前に坐つてゐる今夜の私の幸福は國王たちも羨ましく思ふことでせう。

デヤドラ　ニイシヤ、私はめつたに人を呼びかけることはありません。滿月の夜私が森にゐますと、唄の聲が聞えました。私は裾をかかげて徑を駈け上がり岩の端まで出て見まし

た、さうするとあなたが下をお通りになりました、深紅の外套をお召しになつて、唄をうたつてお通りなさいました、御兄弟たちの中でも優れて、アイルランドの花といはれていらつしやるあなたを私はその時始めて見ました。

ニイシヤ　それであなたは此ゆふ方私どもをお呼びかけになつたのですか？

デヤドラ　（低い聲で）その時から、ニイシヤ、私は仔羊を奪られた牝羊のやうな氣持になりました、そしてそれからは星に新しい金色を見、月に新しい顏が見えました、そして切りなしにイメンのことが恐しく思はれて來ました。

ニイシヤ　（心づいて少し身を退ける）　しかしこんな處にひとりでいらつしやるのは寂しいことでせう、高貴の人たちの相手となるやうに生れついたあなたが。

デヤドラ　（優しい聲で）今夜私はこの世界中でいちばんよい相手を見つけました。

ニイシヤ　（まだ少し固くるしく）　よい相手を得たのは私です、あなたがイメンで女王となれば、あなたは至尊の身となるのですから。

デヤドラ　私はイメンに行つて女王にはなりません。

ニイシヤ　コノールは必らずあなたを女王にすると誓ひました。

デヤドラ　さういふ事があればこそ、私が、悲しみの女、デヤドラと呼ばれてゐるのかも知れません……ニイシヤ、あなたと私とならば樂しい世が送れませうのに……たとへ、ほんの短かい間でも最もよいもの最も充ち足りたものを味はふのは樂しいことでせうのに。

ニイシヤ　（弱々しく）勇ましくあるのも勝ち誇るのも、ただほんの僅かの間でせう。

デヤドラ　ニイシヤ、あの大勢の家來と金と銀の寶に取り卷かれて、自分の城の中で老い込んでゆくコノールの手に私をまかせて行つておしまひなさらないで下さい。（もつと早い調子で）私はイメンに閉ぢ込められてしまはうとは思ひません、ニイシヤ、その辯償には、私たちは默つて直きに死ぬだけのこと。（彼女立上がつてニイシヤから離れて行く）私は長いあひだひとりで森にゐましたから、死ぬことを恐しいとは思ひません、「太陽が綾みのために蒼くさびしく薄れてゆくほどの嬉しさ」が伴ふに眞赤な色で空にのぼり、月が妬みのために蒼くさびしく薄れてゆくほどの嬉しさが伴ふ死ならば。（彼女再び近よつてニイシヤの肩に手をかける）ニイシヤ、私たちの禍害が豫言されてあつたにしましても、それはたいした事でもありますまい、凡ての人に老年は來ます、そして最後には死が。

ニイシヤ　しかし、血や傷ついた體や墓のけがれの中にあなたを導くのがこの私であると

思ふと情ない……デヤドラ、待つ方がよくはありませんか、私は毎日、日のくれ方に山かげの道であなたに會ひに來ませう。

デヤドラ　（失望したやうに）コノールの使がもう來ます。

ニイシヤ　使が？

デヤドラ　明日の朝かそれとも明後日の朝、きつと來ませう。

ニイシヤ　それなら二人で逃げませう。あなたのやうな人をコノールにやつてしまふ私ではありません、たとへ一週間と立たない内に、「墓が私の住家として掘られようとも」（外を見る）デヤドラ、星が出てゐます、すぐに私といらつしやい、これからは幾夜も幾夜も星が私たちの灯となつてくれるでせう、私たちがアルバンに渡つても、海の中の小さい島々を旅する時も。私たちの歡びほどの歡びはむかしの世からいつの世にもないでせう、いつの夜もいつの明方も、陽がたかくなる時まで、私たちの歡びの限りを味つて。

デヤドラ　それでも、やつぱり私は長く住み慣れてゐた此處を離れるのが恐しい。遠くに離れて、あの小さい山を考へたり、春になつて入口の柱の側の林檎が芽を吹く時分を考へたりしてゐたら、寂しくはないでせうか？　（今までの經過を考へて、多少弱氣になる）幸福なわかいあなたを亡ぼすことが私にどんなに恐しく思はれませう？

ニイシヤ　今夜の事があつてから、あなたをコノールと一緒にイメンに住はせて、私が生きて行けるものと思ひますか？　あなたの脣を眼前に見た私が、野兎の後を追ひかけて行けるものと思ひますか？

（二人互に相抱く、その時ラバルカム入り來る）

ラバルカム　デヤドラ、氣がちがひましたか？　あなたは今夜すべてを滅ぼすお覺悟ですか？

デヤドラ　（きつぱりと）コノールが私をイメンに呼ばうと今夜きめたのだもの。（ニイシヤに）エンリイとアルダンを呼んでこの家から私を連れ出して下さい、私はこれからは野兎の歩く足音をきいても恐しくてたまりますまい。（ニイシヤ出て行く）

デヤドラ　（ラバルカムに縋りつく）ラバルカム、わたしが出て行くのをどうぞ怒らないで下さい。お前はほんたうに私によくしてくれて、この山の中の家で、私は自由に氣樂に育つて來ました、お前がデヤドラを育てたことを嬉しいと思ふ日も來るでせう。

ラバルカム　（感動して）私はあなたの側から遠く離れてゐて嬉しいと思ふことはありますまい

まい。あなたのしようとなさることは無理な事です、しかし、それは誰の手にもどうすることが出來ませう？「春が來れば鳥は侶を求め、木の葉が散れば牝羊は配を探します、月日のめぐる中で若い娘も戀人がなければなりますまい。」

デヤドラ　明朝お前はイメンに行きますか？

ラバルカム　私は止めにいたします。それよりか、南の方のブランドンにまゐりませう。そして時々はあなたのお顏を見に、誰にも眞似られないあなたの樣子を見に、海を渡つて往つたり來たりしませう。

（ニイシヤがエンリイとアルダン及び老女を連れて歸つて來る）

デヤドラ　（ニイシヤの手を取る）私の二人のおとうと、私はニイシヤと一緒にアルバンや北の國へ行つて豫言されてある不幸を待つて見ようと思ひます。あなた方はイメンにいらしつてコノールに傳言して下さいますか？

エンリイ　私たちはあなたのお供しませう。

アルダン　デヤドラ、私たちはあなたの僕となり、あなたの獵人ともなりませう。

デヤドラ　あなた方御兄弟は、お一人だけではなく、お三人とも同じやうにお強くそして

御親切です。ラバルカム、わたしたちを夫婦にしてくれませんか？　お前は式も文句も知つてゐませう？

ラバルカム　私には、とても、そんな事は出來ません。あなたのお求めになる災禍の中まで私がお手傳ひをしたくはありません。

ニイシヤ　エンリイに賴みませう……この人は學者たちと一緒にゐてその道も知つてゐますから。

エンリイ　（二人の手をつなぐ）日と月と全地にかけて、私はデヤドラをニイシヤに配せる。

（エンリイ一歩退いて兩手をあげる）空氣もあなた方を祝するやうに、水も風も、海も、日と月のすべての時もあなた方を祝するやうに。

――幕――

第二幕

アルバンの地。冬の始めの朝早く。デヤドラとニイシヤの天幕のそとの森。ラバルカム外套に身を包んで登場。

ラバルカム　（呼ぶ）デヤドラ……デヤドラ……

デヤドラ　（天幕から出て來る）よく來てくれました、ラバルカム、……アルスタアから誰の船が來たの？「わたしは樹の上を越して橈の動くのを見て」、きつとお前が來てくれるのだらうと思つてゐました。

ラバルカム　私は夜明け前の大雨の中をまゐりました。

デヤドラ　そして、今來るのは、だれ？

ラバルカム　（悲しさうに）お驚きになりますな、そして惡くおとりなさいますな。フアガスがニイシヤと御兄弟たちをイメンにお連れかへりなさる爲に王樣から平和の使命（おこないて）を持つておいでになりました。（腰かける）

デヤドラ　（氣輕く）ニイシヤや弟たちはこの土地が氣に入つてゐるから、どうしたつて、アルスタアのコノールのところに歸りはしまい？

ラバルカム　あのお人たちは、死がたつて招くところなら、何處へでもおいでになりませう。（なほ更感動して）王樣があなたを欲しくおぼしめしてニイシヤを殺さうとなさるのではないかと私は心配してゐます、さうすれば、それはウスナの家の亡びることになります。こんな事を心配するのは馬鹿げたことかも知れませんが、あなたのお身を大事に思ふ者は切りなしに心配しずにはゐられません。

デヤドラ　（少し不安らしく）イメンはわたしの爲にもニイシヤの爲にも安全な地ではない。そして、ラバルカム、あの人たちがわたしたちを捨てて置いてくれないのはあんまりではないか、わたしたちは森のなかでこんなに靜かにくらしてゐるのに。

ラバルカム　（力を入れて）それはあんまりですとも、しかし、私の申すことをお聞き下さい、ニイシヤに誓言をおさせなさいまし、「地にかけて、地の上の太陽にかけて、月の四つの方角にかけて」――何でもかでも、コノールがアイルランドの王位においでの內は、イメンには歸らぬといふ誓言を……さうすれば、きつとあなたはお助かりになります。

デヤドラ　（少しの希望もなく）　人の身に起つて來る事を止めるのに誓言が何の足しにならう。ラベルカム、むかしの人たちが豫言したコノールとニイシヤの物語を變へるのに、私のする事が何の力があらう？

ラベルカム　（貴めるやうに）　王樣と强い貴族たちがあなたの運の暗い前途を案じてをられたのにも拘らず、あなたが美しい衣服を召してニイシヤを連れてお逃げになつたあの夜、あなたのなさつた事に何の力もなかつたとお思ひになりますか？　あの夜、あなたは不幸と悲しみを引き起すずゐぶんな事をなさいました、そして今わたくしがニイシヤを救ふ途をお敎へしてゐれば、あなたは私の手助けに棒切か藥くづを動かすほどの事もなさらぬ。

デヤドラ　（すこし諦りを以て）　ラベルカム、わたしに向つて惡口は言はないで下さい、たとへお前がニイシヤを助けようとどんなに心配してくれるにしろ。

ラベルカム　（怒りを我慢し切れず）　ニイシヤをですか？　なんの、わたくしが、たとへ鴉が日の出頃あの方の喉骨を突いてゐようと、構ひますものか？　ただあなたが寒い床におめざめなすつて、戀しい人が傍においでなされぬ時のあなたのお力おとしとお歎きを思へばこそ、わたくしは今こんなに心配もしてゐます。（氣あらく立上がる）　しかし、男はニイシ

ヤばかしではありませんでした、あの方の災難をどんなにあなたが苦勞なさるかと思ひましたのは、わたくしも大きな馬鹿でした。

デヤドラ　（鋭く）　止めておくれ、そんな話は馬鹿者のする話だ、ニイシヤの身に不幸があつたら、私がひとり殘つて生きてはゐないといふことをお前も知つてゐるでせう。（がつかりして）　もう七年のあひだ私は今日の來るのを恐れてゐた、晴れた夜、仔牛が草の上に長い影を落として林の中へ歩いて行くのを見てゐる時でも、（感激を以て）　日あたりに横になつてエンリイとアルダンが輕い足音で歩きながら、デヤドラのやうな氣樂な寐坊な女王が又とあらうかと話し合つてるのを聞いた時でも。

ラベルカム　（すつかりなだめられて）　それでもあなたは、ニイシヤのおのぞみなら、悅んでお出かけなさるお積りですか？

デヤドラ　ラベルカム、わたしは行くのも止まるのも、どつちにしても恐しい。私たちのやうな幸福な身の上の者にでも、ここは寂しいところだよ、わたしは毎日毎日、今日もきのふのやうに幸福だらうかと訊いて見る、そして又明日は去年の明日と同じやうに幸福だらうかと考へて見る、そして何時も私は考へてゐる、干からびた老年になつて、私たち

の歡びが永久に過ぎ去つてしまふ日まで生きてゐることが、やり甲斐のある遊戯かどうかと。

ラバルカム　そんな事を心配なさるのなら、おきかせしますが、年をとるのは決して悪いことではありません、若い娘や詩人たちは老年の姿をさんざんにいひますけれど。（激しい情を以つて）年をとるのは悪くはありません、ただ年をとつてから振り返つて見て、けふ私が見るやうに自分の愛する若い人が痴かしい事のために心を痛めてゐるのを見る時だけがつらいのです。（デヤドラの側に行き）わたくしの申す通りにニイシヤをおとめなさいまし、そして、もし今日わたくしがあなたのやうな赤い脣と白い腕を持つてどこかの氣輕な王様とさびしい路を歩き廻ることが出來たらそれは嬉しいことでせうけれど、それよりかもあなたが、老女の分別を持つて身のまはりに小さいお孫さんたちがふざけ廻るのを嬉しいとお思ひなさる日がきつと來ませう。

デヤドラ　もう今日からは、屹度、若い女のよろこびも老女のよろこびも私が持つことは出來まい、しかし、話をしてゐても何にもならない、ニイシヤが岸にゐて、フアガスも一緒においでではないか？

ラバルカム　（失望して）わたくしの御忠告も間に合ひませんでしたか、フアガスならばお月さまさへ說きおとして空の新しい道を行くやうになさるでせう。（責めるやうに）たうとうあなたはあの方をお止めにならないのですね、あなたは、小さい時から、あなたの聲に一生の生命をかけてゐる者どもに、悲しみと苦勞の種でした。（悲しみに堪へず外套を身に引き廻して）私が泣くのを悪くお思ひなさらないで下さい、私は普通の女たちとは違つてゐます、そこらに澤山の裸の死骸がころがつてゐても、驚くやうな女ではありませんが、あなたの幸福の御樣子を見て、その幸福の終りがもう來かかつてゐると思ふと、死にたいやうです。

（オーエン、すこしやつれた姿で、急ぎ登場、デヤドラに禮する）

オーエン　（ラバルカムに）フアガスの從者たちがあなたを呼んでゐます、道であなたの姿が見えたので、フアガスとニイシヤがあちらで相談してをられるところへあなたに來て欲しいといふことです。

ラバルカム　（オーエンを嫌ひらしい顏で）あなたは、けさのやうな朝會ふのにはえんぎの悪い人だ。しかし、あなたがもし間諜にしたところで、私は行つて、自分のいふだけの事を言

つて來ませう。（去る）

オーエン　（デヤドラに）たうとうあなたお一人のところでお目にかかれます。私は三週間も沼の冷氣の中で癘や喘息になりかけて待つてゐました、やつとのことで今ニイシヤはフアガスにつかまつてゐるところです。

デヤドラ　フアガスが見えたさうで。あなたはどういふ用事でアルスタアから來ました？

オーエン　（何か探してゐたが、パンの塊を見つけ出して、腰掛けてひもじさうに食ひ始める、大きいナイフで切りながら）滿月が、私の頭を狂はしたやうです、頭がどうもしてない男が幾度か波を越えてよその馬鹿者の妻の後を追ひかけていく氣づかひはありません。

デヤドラ　（何か他に考へ事をして）　あなたがイメンを出てからずゐぶん長い月日が經つたのでせう、イメンでは女王たちに物をいふには禮儀があつたやうです。

オーエン　ほんたうに、長い月日がたちます。もう三週間も、私は沼のへりの大きい蛙の側で行儀も作法も何も忘れかけてゐました。三週間は長い月日です、しかしあなたは七年間もニイシヤと兄弟たちとで遊んでいらしつた。

デヤドラ　（自分の着物と寶石とを直しながら）あなたの三週間は長かつたかも知れませんがニインヤやわたしのためには七年は短かい月日でした。

オーエン　（嘲けるやうに）それが短かい月日にもせよ、あなたのやうな人もほかにはない。タラに女王があつて、毎朝そとに出ては途に行き逢ふ男の眼に戀の炎の燃え立つのを見たといふ話を御存じですか？　私にかくさずに言つて下さい（彼女の方に身を屈め寄せる）あなたはこの長い月日のあひだ、いつの明方にもあなたの側に同じ人がいびきをかいて寢てゐるのを見て、滿足してゐましたか？

デヤドラ　（極く靜かに）「七年のあひだ、「どの日の朝も同じ太陽が樹の枝を照らすのを見てわたしが滿足してゐなかつたでせうか？」同じものをただ僅かの間だけしか持つことが出來ないといふことは賢い人たちの悲しみです」。（見下げたやうに）しかしこの世界もばかばかしい處かも知れません、その中の人間が馬鹿でおしやべりの時には。

オーエン　（鋭く）そんなら、行つて、あなたの御勝手にお選びなさい、ここに止まつてニイシヤと老い朽ちてしまふか、イメンのコノールの許に行くか。コノールは肥つた體の、皺だらけの、馬鹿ものです、あの輝いてゐる王冠の下の目が下がつてゐます。ニイシヤは氣が抜けて疲れてゐます。しかし、デヤドラ、人の行く路はいくつもあります「私はあな

たの優しい目や聲に觸れないで生きてゐるよりは、沼の水たまりの中で震へてゐる方が增しです。野良犬の鼻のあたまにさへ接吻してやりたくなるほど寂しくてゐるのはみぢめなことです。

デヤドラ　イメンであなたのやうな人のお友達になる女の人はないのですか？

オーエン　デヤドラ、あなたのやうな人はほかにはありません。今日あなたはフアガスとお歸りになるのですか？

デヤドラ　私はニイシヤのゆくところに行きます。

「オーエン」（腹立たしさうに）ニイシヤ、何でもかでもニイシヤ、ですか？　それでは、私が言つておきます、いまにニイシヤの優しい二つの眼がとげとげしい光を浮べてあなたの顏を見る日が來ませう、嘘だとお思ひになりますか、むかし私の父は戀に夢中になつて、ラバルカムに接吻してゐたのでした、そして二人の頭の上では小鳥がチイチイ鳴いてゐました、今あの人の樣子といつたら、山の中の死人にたかつてゐる鴉でも追ひ拂ひさうです。（彼の聲の中に威嚴を含ませる悲哀の調子で）デヤドラ、女王でも年をとります、白い長い腕もしなびて、背中の屈まる日も來ませう。女王の鼻が下へ向いて頤の方に屈きさうになるまで年をとるのはみぢめなものです。

デヤドラ　（外を見て、すこし不安に）ニイシヤとフアガスが向うの路を來ます。

オーエン　では私は行きませう、もし私が七年もあなたと一緒にゐたら、私は空氣の中の蚊にでも塵にでも嫉妬を感じるでせう。（外套に身を包む、何か警戒するやうな聲で）デヤドラあなたに謎をきかせませう、なぜ私の父はコノールのやうに老人でもなく醜くもないのでせう？　あなたに答へが出來ますか？……それはニイシヤが私の父を殺してしまつたからです。（妙な表情を見せる）「夜」あなたが目がさめてニイシヤのいびきの聲をきく時や、また私がアルバンやアルスタアで變つた事をやつてる噂をお聞きなさる晩にでも、私の言つたことを考へて下さい。

（オーエン退場、すぐにニイシヤとフアガスと向う側から登場）

ニイシヤ　（氣輕に）フアガスがコノールから平和の使者に來て下すつた。

デヤドラ　（フアガスに挨拶する）よく來て下さいました。フアガス、すこしお休み下さい、岩の路を上がつていらしつたら、暖くて咽が渴きましたらう？

フアガス　このアルバンのお住居は暖かさうなところですね、しかし誰だつてあなたとニ

イシヤをイメンに迎へるためなら、もつと高い岩の路ものぼつて來るでせう。

デヤドラ　（すばやく）もうお返事いたしましたか？　行くと申しましたか？

フアガス　（優しく）まだ返事は聞きません、しかし私が青年の時分にはアイルランドにほんの二三週間でもゐる爲には一生を捨ててもいいと思つてゐました。そして今でも老人たちがいちばんの悲しみは、もう自分たちがアイルランドの上の青い空を見るのも僅かの間だ、鳥が澤の上で鳴く寂しい朝を見るのも僅かの間だと思ふことでせう。今日すぐにお出かけなさい、ゲールの人々がいつも心の平和を得てゐられるのはアイルランドのほかにはありません。

ニイシヤ　（無ざうさに）さうですとも。しかしコノールがイメン・マカにゐるあひだは私たちはここにゐた方がいいでせう。

フアガス　（卷物を與へる）これはあなたの保證で、コノールの判があります。（デヤドラに）コノールに對しては私があなたの證人になります。あなた方も何時までも若くてはゐられますまい、もうあなた方が將來のための支度をする時になつたのでせう、アイルランドの海のそばに住みよい城塞を造つて王侯たちの妻からあなた方の子供を得る日が來るでせう。

老年になつて、青春が過ぎ去つてしまふまでさすらひの旅をつづけるのは樂しいことではありません、今日お出かけなさい、あなたの片足をアイルランドの土にのせて、わたしはほんたうに、アイルランドにゐる、といふことが出來るのは、あなた方にも大きい歡びにちがひありません。

デヤドラ　コノールがイメンに王であるあひだはアイルランドに行つても嬉しいことはありますまい。

フアガス　（少しじれ氣味で）コナアル・キルネイやミイスの王たちの印を疑ふのですか？（上着から卷物を取り出してニイシヤに與へる。そして前の言葉よりは親切な調子で）森の中に寂しく暮してゐるあなたが物怯ぢするのは當り前のことです、しかし臆病な婦人が（すこし彼女にからかふ調子で）ウスナの子たちが王侯の生活をしようとする邪魔をするのは情ないことです。デヤドラ、將來のことを考へて御覽なさい、あなたはニイシヤがイメンの或る王の側で尊い白髮の宰相として立つのを見たいとは思ひませんか？　あなたほどの女王が、王の子たちと日向でふざけて時を過すよりほかに、何の望も持たずにゐるのは悲しい事ではありますまいか？

デヤドラ　（少し誇りかに顔を背ける）私はニイシヤの選みにまかせます。（フアガスの方に向き直って）しかし、フアガス、私は、あなたがこの事にお構ひなさらなければよいのにと、あなたのお年のために思ひます、ひよつとしたら、ニイシヤと弟たちを不信の手で掘られた墓に導いたのはあなた御自身だと、死に際までお悔みなさるやうになるかも知れません。

（天幕の中に入つてしまふ）

フアガス　女王ともあるものがそれほどに寂しくそれほどに臆病なのを見るのはつらい。

（デヤドラに聞えないと確かめるまで後を見てゐる）私の言ふことを聞いて下さい。あなたは自分の同輩であり友達である男女の中に戻つて行くのがほんたうです、あなたがあきあきする日が來て、あなたの眼の中に苛立たしい光を見せてデヤドラを悲しませるよりは……もうずゐぶん長い年月を此處で過したから、あなたには私の言葉の意味が分るでせう。

（デヤドラ角の杯に酒を入れて天幕の外に出る、そしてニイシヤの言葉の始めのところを聞いて石のやうな驚きを以て立止まる）

ニイシヤ　（深く考へながら）嘘はいひますまい。この頃ときどき私は釣糸を垂れて鮭を釣つてゐる時、また兎のかけ歩くのを見てゐる時、もしデヤドラの聲にきき倦きる日が來て、私が倦きて來たのを彼女が見つけるやうになつたらばと、そんな不安が心に起つて來ました。

フアガス　（同情深く、同時に勝ち誇つたやうに）それはニイシヤ、私にも分る……そしてあなたに斷言してもいい、デヤドラは屹度あなたの不安を見つけたに違ひない、そしてこれからはこの森の中でも彼女は落ちついてはゐられないでせう。

ニイシヤ　（自信を以て）まだ見つけはしません……デヤドラは年をとつたり倦きたりすることを考へたことはないのです、彼女が人と變つて不思議なところがあるのもそのためです、疫病のはやる市にでも勇氣と笑聲を持たせようといふ彼女の元氣もそのためです。

（デヤドラ酒の杯を落して今まで立つてゐたところにうづくまる）

フアガス　その元氣もなくなることがあるでせう、しかし私どもは言葉から言葉に飛んで、あまり深入りして心配するにも及びません、あなたは今日イメンに行きますか？

ニイシヤ　私はやめます。私は年をとつて倦き倦きして、デヤドラを愛する歡びが衰へてゆく夢を見始めましたが、私のその夢はただの夢です。マサインの谷間の一夜に比べては、コノールの判もあなたのいろいろなイメンの話もミイスの馬鹿者たちの事もつまらないこ

とです。私たちの生命と時が盡きるまで、私たちは此處に落ちついてゐませう。どうかこの言葉をあなたの船でイメンのコノールのところまで持つて歸つて下さい。

フアガス　（卷物を取り上げて）それでは、ほんたうに、歸らないのですか？

ニイシヤ　歸りません……ほんたうを言へば、私は怖れてゐました、「冬も夏も、秋も春も、日の暮れぎはにどこの藪にも鳥が騒いでゐる時でも、怖れてゐたのです、しかし、あなたとのこの談話で私は心がせいせいしました、「私たちはやつぱり若い木々の上の木の葉のやうに幸福だと氣がつきました」そして何時までも、いつでも、幸福でせう、「鷹のやうに年とつても、鮭のやうに年とつても、ブリテンの鴉のやうに年とつても。」

フアガス　（怒つて）弟さんたちは何處にゐます？　あの人たちにも私の使の言葉はきかせなければならない。

ニイシヤ　向うの方で流れの瀨でも追つかけて歩いてゐるでせう。

フアガス　（にがい氣持で）あなたたちは普通の獵人なのだと思つても、たいして間違つてはゐなかつた。

（フアガス去る、ニイシヤ天幕の方へ行きかけてデヤドラが外套で顔の方まで隱してしやがんでゐるのを見つける。デヤドラ出て來る）

ニイシヤ　あなたは私がフアガスにいつてる言葉を聞きましたか？　（彼女答へないでゐる。間。ニイシヤ彼女を抱く）もう心配はおよしなさい、私たちは今夜グレン・ダ・ルウに行つて夕潮に鮭が走るのを見ようではありませんか。（舞臺を横切つて行き腰かける）

「デヤドラ」（極く低い聲で）今度の潮時が來たら、私たちはまた旅に出かけてゐるでせう、潮ばかりではなく、私たちの血も流れるかも知れません。（彼女振り向いてニイシヤに縋る）朝も夕方も何時まで續きませう、冬も夏もちき過ぎてしまひます、ニイシヤ、あなたと私の樂しみもどうして永久に續きませう？

ニイシヤ　私たちは年をとるまで樂しみの限りをつくしてゐませう、フアガスがどんなに勇ましい仕事の話をしてくれても、私たちをイメンに連れてゆくことは出來ないではありませんか？

デヤドラ　あなたは勇ましい仕事をしに行くのではなくて、間ぢかく迫つた危難に向いて行くのです、「はなやかな明るいあなたの一生のとじめに行くのでせう、そして私が、デヤドラが、あなたを止めることが出來ないとは情ないことではありませんか？」

ニイシヤ　私は、アルバンに永住すると言つたのです。

「デヤドラ」　人間が永住すべき地はありません……もう長いこと私たちは、岡を昇つたり降りたりして、互の脣を合せたり、互の腕にやすみながら、草の上の六月の香氣の中に目がさめて、高い枝の中にゐる鳥の聲をきいたりしてゐました……もう長いことでした、でも、もうたしかに、その時が最後になりました。

ニイシヤ　あなたは私たちにイメンに行けと言ふのですか、誰に聞かれても、私たちの行く理由も分らずに、「鵜が北から飛んで來るやうに、わかい鳥が暗い海に飛び出すやうに、私たちも旅に行かなければならないのですか？」

デヤドラ　最後が來たといふのは、何時だつて立派な理由ではないでせうか。そして、ニイシヤ、「太陽が空に低く、月が暗い空を占めてゐる冬の時節に出かけることを、私はうれしいと思ひます、はつきりと立つてゐる樹々のうしろには陽の光が見えて、茨の實が眞赤な塀のやうに見えるところで、あなたも私もこの最後の日の宿に樂しく暮らしませう。」

ニイシヤ　もしこの土地での私たちの生活が終つたといふのなら、エンリイとアルダンを連れずに東の國の森へ行きませう、二人の戀人がただ戀だけを味はうとするのには、他の

人々から離れてゐるのがほんたうです。

「デヤドラ」　（心弱く）ニイシヤ、この世界の端まで行つても、どこにも安全な場所はありません……靜かな森の中にも、紅葉の上や枯葉の上に土を投げ出して私たちの墓が掘られるのを、私は見たのです。

ニイシヤ　「（まだ前よりも熱心に）デヤドラ、ここから逃げませう、さうすれば私たちは安全な場所も最後の墓も考へずに、どこかの小さな隅におちついてゐられます、「晝間と、ながい夜とのあひだも。」

「デヤドラ」　（はつきりと眞面目に）今、私たちは晝間と永久の眠の夜との中間にゐるのです、私たちは間ぢかい死の方に進んだ方がよくはないでせうか、首をうなだれ足をひきずりながら生きて、樂しい優しい愛に淵萎の來る日を見るよりは？

ニイシヤ　（心の亂れに聲も碎けて）「もし死が近く來たのなら、この世とその上に照る星と、そのなかの火焔であり輝く冠であるあなたまでも失はなければならない私の悲しみはどんなでせう？　安全な森の中に逃げませう。」

デヤドラ　（徐かに首を振る）「戀を枯らす道の數は、「十一月祭の夜の星の數のやうに、たく

さんあります、しかし、ただほんの少しの間でも生命をとり止める道は、生命と共に戀を取り止める道は、ありません……たいていの人たちが眠つてしまふ後までも目をさましてゐる時の過ぎてゆくのを見てゐる戀ほど寂しいものはありません……ですから、私たちはイメンに出かけませう、砂の上に潮が向つて來たらば。

ニイシヤ　（あきらめて）おそらく、あなたの言ふことは間違つてゐないのでせう。激しく愛した人たちが老いこんで眠むたさうになつたのを見るのは悲しいことでせうから。

デヤドラ　（前より優しい熱心さを以て）私たちは七年のあひだ荒いことも言はず倦きることも知らず、たのしい美しい七年でした、あのやうな日を七日だけ下さいと神様に願つても、もう一度下さることはむづかしいでせう。ですから私たちはイメンに行きませう、あすこには永久の休息があるかも知れません、それとも又、騷々しい多人數のなかで、物忘れすることが出來るかも知れません。

ニイシヤ　（こく靜かに）では、行きませう、二つない戀を護つて、その戀のおとろへるのを見るよりは。（二人しばらくのあひだ縋つてゐる、ニイシヤ顏を上げる）　フアガスとラバルカムと二人の弟たちが來ます。

（デヤドラ天幕に入る、ニイシヤ首をたれて腰かけてゐる、オーエン後からそつと駈けて來て、ニイシヤの後に來て腕を押へる。ニイシヤ振り放して劍を拔く）

オーエン　（嘲けるやうに大聲で笑ひながら空手を見せる）　ああニイシヤ、あなたは殺されないでしやはせだつた、驚いたでせうよ！　私は彼處でフアガスを見てゐました――心配なさるな――私はあの人ががつかりして一人で歸つて行くのを見ようと思つて岡を下りて來たところです。

（フアガス及び他の人たち登場。「女王の通夜にでも列席した人たちのやうに」一同がしをれてゐる）

ニイシヤ　（劍を納める）　フアガスが來た。（フアガスの側に行く）　私たちは潮合が變つたら出かけませう、デヤドラも私も。

一同　出かける！

エンリイ　あなたとデヤドラの生命もおしまひになさるのですか？　彼女は寂しいところでみんなの氣を引立たせてくれましたが。

「アルダン」　七年のあひだ私とエンリイはあなたとデヤドラのために僕ともなり妻もなく暮

しました。どういふ譯であなたはコノールのところへデヤドラを連れて行かうとなさるのです？

ニイシヤ　私はデヤドラに選ばせて、その望どほりにするだけのことだ。

フアガス　あなた方が選んだ途はアイルランドの五つの國の果までも賢い人たちが聞いて悅ぶでせう。

オーエン　賢い人たちが、ですか？　コノールのところへ歸ることが？　私はこの人たちを止めたいけれど、ニイシヤはむかし私の父のわきばらに劍を突つ通した、さういふ關係があつて見れば、私の言葉は信じられないだらう。コノールの許へ歸る！　私はいろいろな計畫や術策を聞かせたい、間諜はその仕事のために澤山の報酬を貰つてゐる。（金のはいつてゐ袋を投げ出し）フアガス、あなたも報酬を貰ひましたか？

（フアガスの上に金貨をふりかける）

フアガス　氣が違つたのだ……捕へて下さい。

オーエン　（一同の中を駈け廻る）つかまるものか。あなた方みんなでイメンに行くがいい、私の方が先きに行く……死人！　死人！　デヤドラの美しさの爲に死ぬ人たち！　私はあなたたちより先きに墓に行つてゐる！

（短劍を手にして駈け出す。一同あとを追ふ、ラバルカム一人殘つて向うを見ながら、兩手を組合せる。デヤドラ黑つぽい外套を着て出て來る）

デヤドラ　どうしたの？

ラバルカム　オーエンが氣が違つて、今あすこの石の角で咽を突いたところです。どうもけふ、あの人の眼つきに惡いしらせが見えました。あの人は、言はせたら、いろいろな事を知つてゐましたらうに。

（ニイシヤ急いで戻つて來る、一同後から來る）

エンリイ　（興奮して戻つて來る）あの男はコノールの計略を知つてゐたのです。イメンに行くのは止めませう、コノールはデヤドラを愛してあなたを憎んでゐるかも知れません。

フアガス　ばからしい狂人のことを氣にかけるのですか？

エンリイ　「賢い人よりも狂人の方が分別があることが屢々です。私たちはコノールの言葉に從ふのは止めます。」

ニイシヤ　私とデヤドラはもう決心した、私たちはフアガスと一緒に行く。

アルダン　私たちは止めます。岸にあるあなたの船を燒いてしまひませう。

フアガス　私の子供たちと私の手で、船は守る。

「エンリイ」　ウスナの家の角笛を吹けば、私たちの味方が助けに來てくれます。

ニイシヤ　來るのは、私の味方だ。

エンリイ　あなたの味方はあなたの兩手をしばるかも知れません、あなたが正氣でないのなら。

（デヤドラいそぎ足に進み出てエンリイとニイシヤの中間に立つ）

デヤドラ　（低い聲で）七年のあひだウスナの子たちは爭つたことはありませんでした。

エンリイ　私たちはあなたをイメンにはやりません。

アルダン　コノールが私たちの仲を亂したのです。

エンリイ　（デヤドラに）ニイシヤが行くのをとめて下さい。もしコノールにあなたを奪られたら、私たちはどうして生きてゐられませう？

デヤドラ　誰の力でもあなた方から私を奪ることは出來ません。フアガスと一緒に行かうと私が決心したのです。エンリイ、七年のあひだ私はこのアルバンであなたの女王でゐましたけれど、あなたは私と喧嘩しようとなさるのですか？

エンリイ　（急におとなしくなる）ニイシヤがあなたを連れてゆくのは間違つてゐます。

アルダン　なぜあなたはお出かけになるのです？

「デヤドラ」　（二人に向つて、他の一同にも聞かせるやうに）それが私の望ですから……ニイシヤが年とつた女を側に置いてアルバンで老人になつて、あれが若い時に大へんに美しかつたデヤドラとニイシヤだと、わかい娘たちに指さしさせたくないからかも知れません。それとも、むかし私たちの先祖がアイルランドの王の時代を思ひ切りよく滅したやうに、私たちのいさましい華やかな日をきつぱりとおしまひにさせたいのかも知れません。それとも、むかし私がかけ歩いて流れを飛びわたつたあのフアドの山をもう一度歩いて見たい爲かも知れません。（ラバルカムに）ラバルカム、私はあの丘の上の小舍のうしろの、私たちの小さい林檎の樹をどんなに見たいでせう。それとも、フアガス、アイルランドから離れてゐるのは寂しいことだと、私がおぼえた爲かも知れません。

エンリイ　（頁けて）私たちのアルバンに暮らした七年を考へたらば、どこにゐても私たちは寂しいでせう。

デヤドラ　（ニイシヤに）ここにゐたら、私たちは、いまに屹度さびしくなりませう……フアガスと岸の方へいらつしやい。フアガスはお客様だのに、そして平和のお使に來て下さつたのに、ろくな歡迎もしませんでした。

フアガス　私どもはあなたの船の支度をしませう、王の船にふさはしいやうな支度をしませう。（ニイシヤとフアガス行く）

デヤドラ　エンリイも、アルダンも、槍を持つて、私より先きに行つて下さい、そして僕たちに、入口に置いてある私の外套を持つて來るやうにおつしやつて下さい。

エンリイ　（從ふ）今日まで樂しく持ち運んだあなたの物を、けふは悲しい心で運びませう、私たちはひもじく、寒い氣持がします。

（彼等そこにある物を片づけて退場する）

デヤドラ　（ラバルカムに）ラバルカム、お前も行つて下さい、お前は老人だから。私はすぐあとから行きます。

ラバルカム　ほんたうに、わたくしは老人です、そしてわたくしが生命をかけてゐた希望もめちやめちやに碎かれてしまひました。

（ラバルカム、デヤドラの方を感歎されるやうに見て、退場）

「デヤドラ」（手を組合せて）キユアンの森、キユアンの森、ひがしの方の愛する國！　七年のあひだ、私たちはただ歡びに滿ちて生きてゐた、けふ私たちは西に行く、ひよつとしたら、死に會ふために行くのかも知れない、そして、死ぬ人が女王であらうと、死ぬのは情ないつまらないことだ。（ゆつくりと行く）

――幕――

第三幕

イメン城下の天幕。粗末な敷皮や臥掛。兩側と後方とに入口あり、後方の戸口は閉めてある。老女、食物と果實を持つて入り來り卓に並べる。右よりコノール入り來る。

コノール　（鋭い調子で）まだ誰も何とも言つて來ないか？

老女　まだ誰もまゐりません。

コノール　（老女が働いてゐるのを暫時見てゐる、やがて後方の戸が確かに閉されてゐるのを見てから言ふ）それでは、イメンに歸れ、ここにゐても用はないから。（左方に物音きこえる）誰だ、そこにゐるのは？

老女　（左方に行く）ラバルカムが戻つてまゐりました。あの方は、よくもまあ世界中を往つたり來たりすることでございます。たしかに皆さまのお迎へに行つたことと思つてをりましたが、一人で歸つてまゐりました、わたくしの大事なデヤドラ様は一緒にはいらつしやいません。

コノール　お前はおれたちに構はず歸れ。

老女　（歎願するやうに）もしかねてのお話どほり、今夜デヤドラ様がおいでになりますのなら、わたくしはどうかお目に懸りたいと思ひますが。

コノール　（苛だたしく）いづれ、ぢきに會へる。おれはラバルカムに用があるのだ、お前は、いひつけられた通り、歸れ。

（老女が右から出て行かせる、左手よりラバルカム入り來る）

ラバルカム　（疑はしさうに見廻す）こんなひどいところにおいでになりましたか、そしてニイシヤと御兄弟たちと、デヤドラをお入れするにはあんまりひどい處ではございませんか。私たちはみんな遠みちを歩きましたので、すつかり疲れ切つてをりますのに。

コノール　お前はあの連中と始めからずうつと一緒に旅をして來たのか？

ラバルカム　御一緒にまゐりました、わたくしはもう、婚禮に行くためだか、葬式に行く爲だか、それとも兩方いつしよなのかも知れませんが、あんな長い旅をする身の上ではないのでございます。（疲れ切つたやうに腰かける）コノール、なさけないことにあなたも私も

もう老人でございます。あなたは、この寒い夜、おからだに障るのもお構ひなさらず、こんな處にまごついていらつしやるお身の上ではないのでございます。

コノール　わしは、フアガスが北の方で止められてしまつたかどうか聞きたいと思つて、待つてゐたのだ。

ラバルカム　（前よりも鋭い調子で）ほんとに、あちらに止められておしまひになりました、そして、屹度これはあなたが今夜イメンとアイルランドと東の方の國々にまで騒動を引き起させるお積りなのだらうと私は考へつきました。（コノールの側に行く）何にしても、お城にお歸りなさるがようございます、デヤドラは長い旅の汗とほこりでお召も皺だらけにだらしなくなつた儘であなたにお會ひになるのはおいやでございませうから。（嘲るやうに笑ふ）ああお氣の毒なコノール、うつくしさも森のなかでは直ぐになくなつてしまひます、今夜あなたがデヤドラを御覽になつたらば、どんなにお驚きなさりませう。

コノール　（激しく）デヤドラがやつれてゐようと蒼ざめてゐようと構はぬ、子供の時から育てあげたのはわしではないか。わしならば、いつ、何處でだつて、彼女に會つてもよい權利がある。

ラバルカム　「權利がおありになりますか？　盲人も見る權利があり、跛も踊る權利があり、啞もうたふ權利があるのでございませう？　あなたもそれと同じやうに彼女の口もとに元氣をお見つけなさる權利がおありになるのでございませう。」（おだてるやうに）ほんとに、お城におかへりなさいまし、そして今夜だけは彼女をあのままにして置いてお上げなさいまし。

「コノール」（急に腹立たしく）おれは歸らぬ、おれがあの城の中に相手もなくたつた一人で西に向き東に向き寐てゐたのも久しいものだ、おれはミイスの野の泥棒よりももつと物欲しくしてゐたのだ……お前は俺が年をとつて賢いと思つてゐるのか、お前に敎へてやる、老年になれば死ぬといふことを賢い人は知つてゐる、だから、自分の血を賭けても奪らうと思つたものを自分の手から逃がしてしまふやうな手ぬかりはしない。

ラバルカム　（うなづきながら）あなたが年をとつて賢いお方なら、私だつてさうでございます、コノール、あなたが彼女を手にお入れなさるためには人間も神々も滅し盡しておしまひなさるほどな御決心でも、とてもとてもあなたのお手には入りますまい。コノール、王のお手でも得がたいものがございます、もし今夜あなたが無理なことをなさいますなら、

明日の日が來ます前に、あなたのお手に入るものはただ大勢の人たちの死とあなた御自身のなさけない泣顔とばかしでございませう。

コノール　お前はあんまり餘計なことを言ふ。（右手に行く）オーエンは何處にゐる？　來る道でお前はどこでも彼に逢はなかつたか？

ラバルカム　逢ひました。あの人はニイシヤにつきまとつてゐました、今ごろは大かたあの人の體のなかに蛆がつきまとつてをりませう。

コノール　（よろこんで）ニイシヤが殺してしまつたか？

ラバルカム　いいえ、殺しはなさいません。オーエンはデヤドラのために氣が變になつて自分で死んでしまつたのでございます。馬鹿者も王様も學者もデヤドラのやうな人の爲にはみんな同じやうなものでございます、オーエンは、今晩あなたがイメンでおやりになる勝負の中の始めての死骸になるのを、偉らがつて死んだのでございませう。

コノール　お前こそその始めての死骸になればいいに。しかし、ほかの使たちも歸つて來るだらう、ウスナの家を憎んでゐた家の子たちが。

ラバルカム　（がつかりして退く）それでは、神々様のおなさけを祈るよりほかはございません！

（武器を持つた人たち入り來る）

コノール　（兵士たちに）エンリイとアルダンはニイシヤの側から離したか？

兵士たち　離しましてございます。デヤドラ様のお家を準備する爲に、あの人たちの手を借りたいと申したのでございます。

コノール　ニイシヤとデヤドラも來るのか？

兵士　ニイシヤ様はもう來られませう、そして一緒にお連れなされた御婦人は、月の昇る時のやうな、日の入る時のやうな、美しいお方でございます。

コノール　（ラバルカムに向つて）彼女がやつれて醜くなつたと言つたお前の話は嘘なのだ。

兵士　まだ申上げる事がございます。（ラバルカムを指して）この人は、王様がニイシヤ様を此處にお連れになるといふ事を聞きますが早く、フアガス様を北から呼びよせる爲に、馬丁を使にやりましてございます。

コノール　お前はさういふ目的があつて細工をやつてゐたのだな。しかしお前の仕事の結果はニイシヤの死が早くなるといふことだけだ。（兵士に）行つて、わしの勇士たちを呼

んで來い、それからこの女をイメンに連れてゆけ。

ラバルカム　私は此處において下さいまし。もし自分の出來るだけのことを致して、それでも惡い事がまゐりますのなら、私がここにゐてデヤドラのお世話をして上げるのがほんたうでございませう。

コノール　（はげしく）この女をイメンに連れて行けと言つてるのだ。この女はもう今までにあまり細工をやり過ぎてゐる。（兵士彼女の側に行く）

ラバルカム　私にお觸りなさるな。（外套を身に引廻して、王の腕を押へる）私は好い加減なことを申上げてファガスがあの方たちの側においでなさるまであなたのお手をお止め申さうと思つてゐました、さうして私はあなた御自身と、ニイシヤと、イメンの城までも救ふつもりで居りました、しかしもう今となつては、私はあなたの城の中に行つて（手眞似を以て）言つてやりませう「ここいらには茨が繁つて、そつちの方には薊や酸模も生えるだらう」と。そしてあなたが頸を長くして女の中の女王のあの方の接吻を受ける積りでいらしつたあなたのお居間にはいつて行つて、言つてやります、「いまに此處いらを鹿がさまよつたり山羊が横になつて體を掻いたりするだらう、北から强い風が吹いて來たら、羊が目を覺まして咳をしてゐるかも知れない」と、さう言つてやります。（身をふり放す。王は兵士に目くばせする）私は行きますとも。「私が大勢の人と坐つて、火焰のぱちぱちする音や柱の燒け落ちる音をききながら、イメンの城の最後の大きな火の手を眺めるのも、もう間もないことでせう。」（行く）

コノール　（外を見ながら）樹のなかに人が二人見える、ニイシヤとデヤドラだらう。（兵士たちに）今夜は此處に泊るのだとあの人たちに言つてくれ。

（コノール右手より出て行く。左手よりニイシヤとデヤドラひどく疲れ切つて入り來る）

ニイシヤ　（兵士たちに）私とデヤドラのために王が用意された宿舍はここか？

一人の兵士　レッド・ブランチの家は空氣を入れ換へたり掃除をいたしたりしてをりますので、直きにあちらにお移りになれませうが、まづそれまで此處で御辛抱下さいまし、此テイブルの上に果實も飲料もございます、それでは御機嫌よう。（右手より出て行く）

ニイシヤ　（見廻す）不思議な宿舍に入れてくれる、私たちはコノールの友人として歸つて來たのに。

デヤドラ　コノールはきつと立派な部屋を支度して窓掛の塵を掃つたりして迎へてくれる

のでせう。仰山な儀式で迎へてくれてもよい筈です、あなたはあの人の妹の子ですもの。

ニイシヤ　儀式も立派な部屋も窓掛もいらない、「風にうごく羊齒の中や冷たい小川の側に住みなれて來た私たち」です……

デヤドラ　（部屋の中を歩き廻る）私たちはイメンで自分の分相應の事を望むだけです、（掛布を眺めて）そして私たちの爲にどんなよい支度をしてくれてゐるか知りませんが、ずゐぶんひどい處へ入れてくれたものです、擦り切れた敷物や蟲のついた毛皮ばかしの。

ニイシヤ　（少し苛立たしく）私たちがイメンに歸つて來たこの始めての夜に、毛皮や蟲のことで心配するにもあたりますまい。

デヤドラ　（快活に）「私が始終そんな事で心配してゐるのをあなたは悅んで下さる筈です、この七年のあひだあなたの天幕を蜜蜂の巣や紅雀の巣のやうに小綺麗にしておいたのはこの私でした、もしコノールがイメンに私のやうな妃を持つてゐたら、こんなぼろを擴げて私たちを迎へはしないでせう。（窓掛を引くと、窓掛開かれる）地に新しい土が見えて、穴が掘つてあります……ニイシヤ、あれは墓です、ひろい深い墓です。」

ニイシヤ　（其傍に進みより窓掛を片よせると墓穴が見える）あれがイメンの私たちの家になるのでせう……コノールは、上手に、あれを岡の端に掘つて、倒れた木で隱す積りらしい、たぶんフアガスの歸つて來る前に私たちを殺して葬つてしまひたいのでせう。

デヤドラ　どこかへ私を連れて逃げて下さい……私を岩の中にでも隱して下さい、「もうすぐ夜になります。」

ニイシヤ　（身を固くして）私は、弟たちを捨てて行くことは出來ません。

デヤドラ　私たち二人だけをコノールは憎んでゐるのです。私たちが一緒にすみ馴れた處へ逃げませう、……「高い羊齒の茂みに隱れて寐てゐる」のは樂しいことではありませんか。

（ニイシヤを左方に引いて行く）樹の中で變な話聲が聞えます。

ニイシヤ　コノールの外國の勇士たちでせう。ここへ來る途中あの人たちの通るのを見ましたから。

デヤドラ　（右の方にニイシヤを連れて行く）こつちの方へいらつしやい。ニイシヤ、聞いていらつしやい！

ニイシヤ　まだ澤山ゐる……私たちは圍まれてしまつた、そしてエンリイとアルダンは近くにゐず、今まで大勢の敵にも勝つた私たち三人が一緒に死ぬことが出來ないとは情ない。

デヤドラ　（がつかりくづをれて）そしてあなたと私と、ここに、掘られた墓の側にゐるのは情ない、しかし、この世に生きてゐて私たちのやうな幸福を持つたものはなかつたのです。アルバンで過した月日はほんたうに早く過ぎてしまひましたけれど。

ニイシヤ　「あの月日はもう永久に過ぎてしまつたと思へば悲しい。しかし、總てが早く過ぎ去つてしまふことはいい事かも知れません、私が墓にはいつてしまつたら、ぢきにあなたは泣き疲れる日が來ませう、その日はあなたに平和を持つて來てくれるでせう。」

デヤドラ　あなたの言ふことが當るか當らないか知りたくても、その時分にはもう私はこの世にはゐますまい。

ニイシヤ　今夜コノールが殺すのは私たち三人です、二月か三月も經てば、コノールはあなたの機嫌を取りにやつて來るでせう。

デヤドラ　私はその時ここにはゐませんでせう。

ニイシヤ　（いこぢになつて）あなたはコノールを寄せつけないがよいかも知れません、そして時が經つたら、「どこかドネガルの西の方にでも落ちつき場を探して行つて、そこで、夜が來れば寂しく寐て、朝が來れば寂しく目をさますやうになるのでせう。」

デヤドラ　死ぬよりももつと辛いそんなことを、あなたの口でおつしやるな。

ニイシヤ　（少しやけ氣味で）「まだ一言いひませう。もしその西の方の國で、ある時が來て、雲雀が雲の端で冠毛を振り、郭公が騒ぐ時、もしあなたの心にかなふ人があつたらば、その時になつて、あなたが永久に私のために悲しんでくれることを、私が望んでゐるとは思つて下さるな。」

デヤドラ　（振り向いてニイシヤを見る）ニイシヤ、もし、死ぬのが、私であつたら、あなたは私のゐない後をほかの女で充たす積りですか？

ニイシヤ　（ひどく沈んだ調子で）「私には何も分らない」ただこの世を離れることは堪へがたく苦しいことです、そしてあなたをひとりで寂しく殘してこの地上で悲しませて置くことは、それよりももつと悲しい堪へがたいことです。」

デヤドラ　ニイシヤ、あなたが死ねば、その時に私も死にます、あなたが生きてゐても死んでしまつても、イメンで一緒にゐられると思はなければ、私はアルバンを出ては來なかつたでせう……それでも、今夜あなたは常と違つて遠々しい物の言ひやうをなさいます。

ニイシヤ　「掘りたての新しい墓ぐらゐ愛する二人の友の間を隔てるものはないでせう。」

「デヤドラ」　さうかも知れません、しかしその墓が埋められる時こそ私たち二人は永久に一つになりませう、私たち二人の愛人は今までの長いあひだ倦きることも知らず、年とることも知らず、心の悲しみも知らずにゐました。

コノール　（右より入る）ニイシヤ、よく歸つて來た。

ニイシヤ　（立上がる）コノール、ようこそ。私はお目にかかつて嬉しい。

コノール　（何氣ない體で）こんな部屋でも怒らないで下さい、別の部屋を用意させてゐるから。

ニイシヤ　（我慢し切れずに）あなたの用意させた部屋は知つてゐます。何のためにあなたが御自分の判をフアガスに持たしてアルバンまでよこして、中途で又フアガスを留めて置いたかも分つてゐます。さて何の御用でここにいらしつた？

コノール　デヤドラの顏を見たいと思つて來た。

ニイシヤ　たくさん御覽なさるがいい、あなたは智慧者だ、上手にアルバンから誘ひ出しておいでなすつた。さあ御覽なさるがいい、「あなたが見てしまつたら、たとひあなたが王であらうと、私の十本の指で斑の鷲鳥の頸のやうなあなたの頸を絞めてしまはう。」

デヤドラ　（二人の中に入る）ニイシヤ、默つてゐて下さい！　コノールは和睦してくれるかも知れない、……コノール、ニイシヤのいふことを氣にかけて下さいますな、怒る原因があるのですから。

コノール　怒つてもわしは構はぬ、一聲よべば、樹の蔭から勇士たちが來てくれる……しかし、デヤドラ、あなたは私に何といふつもりだ？

デヤドラ　「私が思つてゐますことは、あの墓の側では私たちは三人の寂しい人間です、そして新しい墓の側では、誰にしろ、女の脣を考へるひまもなく、憎んでゐる男のことを想ふひまもありますまい。あなたのお墓がイメンに出來るのももう長い將來ではありますまい、あなたがそのお墓に心やすくおはいりなさりたければ、どうぞエンリイとアルダンを此處に呼んで、私たちみんな一緒に夕飯を食べさせて下さいまし、そしてあの墓を埋めさして下さい、今日からあなたはイメンに新しい四人の友の出來たことを嬉しくお思ひなさるでせう。」

コノール　（暫時彼女を見詰めてゐる）デヤドラ、あなたの優しい言葉を今はじめてわしは聞いた。あなたのやうな人は、何氣なしにする事も人の心を和らげ、言葉に優しみを添へる

のがほんたうだ。アルスタアからあなたを盗んで行つたニイシヤを責めるのは無理だと、今わしは悟つた。

デヤドラ　（ニイシヤに）　ニイシヤ、やさしい返事をなさい、今夜私たちは友人になりませう。

ニイシヤ　（氣むづかしく）私は友人らしくするよりほかに、どうしようもない、何でも、あなたの氣にむく通りに返事しませう。

デヤドラ　（ニイシヤの手を取る）そんなら、あなたは、フアドの山で私を育ててくれたコノールをあなたの友、あなたの王と言つて下さい。

（コノール、ニイシヤの手を握らうとする時、後方に人の叫び聲がする）

コノール　あの騒ぎは何か？

エンリイ　（後方にて）ニイシヤ……ニイシヤ……來てくれ、私たちは騙されて、殺されるのだ。

ニイシヤ　あれは、エンリイが戰ひながら呼んでる聲だ。

コノール　わしは今夜もう少しで心を折るところだつた、しかし、今はもう死が我々の中

にある。（出て行く）

デヤドラ　（ニイシヤに縋る）戰ひなんぞありはしません……ニイシヤ、私を捨てて行つて下さるな。

ニイシヤ　弟たちのところへ行つてやらなければ。

デヤドラ　（歎願するやうに）ニイシヤ、私を捨てていらつしやるな。あの墓の後のくらがりに隱れませう。もし戰ひがあつたとしても、エンリイやアルダンが戰つてゐるのなら、外國の勇士たちが負されるばかりでせう。（叫び聲きこえる）

ニイシヤ　（あらあらしく）アルダンが呼んでる聲がきこえる。弟たちを助けにゆく邪魔をなさるな。

デヤドラ　ニイシヤ、私を捨てて行かないで下さい。私をたつた一人で弱り切つた儘で捨てて行かないで下さい。

ニイシヤ　私は弟たちを見捨ててはおかれない、王に反抗したのは私なのだから。

デヤドラ　私はあなたと一緒に行きませう。

ニイシヤ　あなたには行かれない。私が戰ひに行くのを止めないで下さい。

（ニイシヤ殆ど荒々しく彼女を突きのける）

デヤドラ　（隔心を以て）弟さんたちのところへいらつしやい。七年のあひだあなたは私に優しくして下さいましたが、死の荒々しさが私たちの中に來たのです。

ニイシヤ　（驚いてデヤドラを見る）あなたは、あなたの口から出る荒い言葉を私の耳にきかせた儘で、私を死なせようとなさるのか？

デヤドラ　私たちは夢を見てゐました、今夜私たちははつきりと目がさめました。ニイシヤ、ほんの少しですが、私たちは長く生き過ぎたやうです、「墓場のへりを踏みながら、墓の中の安さを得ることが出來なかつたら、かなしいことです。」

エンリイ　（後方にて）ニイシヤ、ニイシヤ、私たちは不意に襲はれて、やられてしまつた！

デヤドラ　あの人たちが呼んでるところに行つておやりなさい。（暫時冷やかにニイシヤを見る）話をしたりぐづぐづしてゐるのを恥とは思ひませんか、エンリイとアルダンが森の中で殘酷な死に様をしかけてゐるのに？

ニイシヤ　（狂はしく）弟たちは殘酷な死に方をしはしません、あすこにゐるのは男たちばかりだから。殘酷なのは、戀をした女たちばかりです。もし今日から後私が生きてゐたら

ば、恐らく私は自分の出會ふ女たちに、西に行く女にも東に行く女にも、呪ひをかけるでせう、「彼等に美しさを與へた太陽を呪ひ、彼等の上着を赤く染めた茜草をも呪ふかも知れない。」

デヤドラ　（にがにがしく）ニイシヤが死んだ夜、人わらひな死に様をしたと、見てゐて言ひ傳へる人がないのは嬉しいことです。

ニイシヤ　生きてゐていひ傳へる人は多くはゐないでせう、今夜あなたの眼に現はれた嘲笑はイメンの地の面を墓穴だらけにしてしまふでせう。（出て行く）

コノール　（外で）あれがニイシヤだ、打て！　（騷動、デヤドラはニイシヤの上着の上にうづくまる。コノール急ぎ足で入り來る）みんな死んでしまつた——あなたを盗んだあの三人とも死んでしまつた、今からあなたはわしの女王だ。

（男たちのかなしみの聲後方にきこえる）

デヤドラ　（茫然として、物怯ちした調子で）私は女王にはなりません。

コノール　すこしのあひだ悲しむのもよい、しかしその内ぢきにあなたは王でありながら年老いて寂しい男を憐むやうになるだらう……わしを恐れなさるな、アルバンであなたの

友達だつたあの三人をあなたがあはれに思つてゐるのを、わしは惡くは思はない。

デヤドラ　ほんたうに、私はあはれに思つてゐます……ニイシヤの事を考へて、あんまりあはれに思ふと、私は王の胸に自分の齒を立てたいとさへ思ふくらゐです。

コノール　情が殘酷なものだとはわしも知つてゐる、わし自身に對するあはれみがニイシヤを殺したのだ。

デヤドラ　（前よりも亂暴に）私の無情な言葉がニイシヤに此世で又とない悲しい死を與へたのでした。（なげきの聲をあげる）しかし、もう永久に、頸の上にも頰の上にもニイシヤの脣をうけられないデヤドラを誰があはれんでくれませう？「掬の樹が銀にも銅色にも見えて秦皮が金色にかがやく森の夕方、もうニイシヤに逢ふことの出來ないデヤドラを、誰があはれんでくれませう？」

コノール　（途方にくれたやうに）私があなたをあはれみ一生懸命にあなたの世話をしよう、いろいろ苦勞をしたあげくに考へて見れば、いつその事わしが墓の中にゐて、デヤドラがわしのために泣いてくれて、そしてニイシヤがわしの代りに年とつて寂しい身の上であつてくれたら、どんなにかよい事だらうと思ふ。（かなしみの聲きこえる）

デヤドラ　（悲しみに狂ほしく）寂しいのは私です、デヤドラです、私は年をとるまで生きてはゐますまい。

コノール「あなたは何時までも寂しがつてはゐないだらう、わしは七年のあひだ考へてゐた、けふはアルバンの森にゐるデヤドラの爲には美しい日和だと、又、こんな夜デヤドラはどんな風にして寐てゐるだらう、雨に濡れた木の葉や枯枝が北風に吹きとばされるこんな夜は？　と、わしは考へてゐた。わしが一生の生命を賭けて思つてゐたことを破壞してくれるな、悲しみの爲にあなたの身を破つてくれるな、歡びも悲しみも東風に吹きあほられる火焰のやうにちきに燃え盡きてしまふものだ」

デヤドラ　（彼の方に向いて）私とニイシヤがフアドの山を出て北のアルバンに向けて船出した時のあなたのかなしみは、そんなに早く終りましたか？

コノール　いつになつても終ることのない一つの悲しみがある——それは老年になつて寂しいことだ。（限りない歎願の心をこめる）しかし、あなたと私とイメンにゐてはあまり靜かにはしてゐられまい、夜になれば昔ばなしをする老人もあり、琴をひく者もあつて。デヤドラ、わしはわしども二人のための部屋を造らせた、壁には赤くひかる金と、天井は銅を

飾りにして。あなたの爲にイメンに造られたやうな家を持つてゐる女王はひがしにもあるまいと思ふ。

兵士　（駈け入る）イメンが燒けてをります。フアガスが歸つて來て、そこらぢゆうに火をかけました。王樣、早くお歸り下さいまし、さもなければ御國はほろぼされてしまひます。

コノール　（怒つて再び王の威嚴を回復する）ウスナの子たちはもう葬られたか？

兵士　墓には入れましたが、まだ土をかけてはございません。

コノール　わしに見せてくれ。テントをあけろ！（兵士テントの後方を開けて墓を見せる）わしの勇士たちは何處にをる？

兵士　イメンにまゐりました。

コノール　（デヤドラに）ここであなたの身に害を加へるものは一人もゐない。わしが來るまでここにゐて下さい。

（兵士を連れて出て行く。デヤドラ暫時あたりを見廻して、やがて靜かに立つて行き墓をのぞき込む。そこにうづくまり前後に身をゆすりながら、靜かになげく。はじめは言葉が聞きとれないが次第にはつきりして來る）

デヤドラ　「あなた方三人にはもう老年も死も近づかないでせう——丘の上の灯が消えて星ばかりが私たちの友であつた時わたしの伴侶であつた三人の人たち。私はどんなに悲しんでもどうすることも出來ない悲しい今夜から想ひを返して、掬の樹が蔭を造つてよく乾いた腰掛石のあるところに、あなた方の上着と杖とで私のために小さいテントを造つて下すつたあの時分のことを考へませう。しかしけふからは、私の指が私のためにテントを造るのでせう、私の指で髪をひろげて、雨のなかにその髪を編んで。」

（ラバルカムと老女つれ立つて右よりそうつと入る）

デヤドラ　「（二人に氣づかず）デヤドラは暗いところにうづくまつてゐませう、ニイシヤと一緒に若くてゐたデヤドラは、イメンの墓にかなしみを埋めたデヤドラは……」

老女　あんなに樂しさうにお氣輕だつたデヤドラ樣が、あのやうにお弱りなされたのでせうか？

ラバルカム　さうだよ、皆さまのお墓の上で泣いていらつしやる。（デヤドラの傍にゆく）

デヤドラ　「今日から後はこの墓石の上になげいてゐるのが私のつとめでせう、戀のために泣いてゐる私は、海のそばの小さい港の上に輝いてゐる星に似てゐるかも知れない。」

ラバルカム　（進み出る）デヤドラお起ちなさい、誰も氣づかないうちにこの場を逃げて、あなたを守つてくれる味方とかくれ家を探しませう。

デヤドラ　ニイシヤを離れて私はどこへ行かれよう？

ラバルカム　（一生懸命になだめる）さういふ氣持でいらつしやるのならば、私と一緒においでなさいまし、あなたの爲に日の暖かな土地を見つけて上げませう、みんながあなたのことを悲しみの女王と呼んであなたは評判の方になりませう、そして夏が來れば、寐たり起きたりして、夢を見るのを樂しみになさるやうにおなりなさるでせう。

デヤドラ　「ニイシヤの聲は夏になると嗜々してゐた、ニイシヤの聲は笛の音よりも優しかつた。それでも、今日からはその聲もきこえない。」

ラバルカム　（老女に）ちつとも私たちのことをお氣づきなさらないやうだ。正氣をつけてあげるにはだいぶ骨が折れるだらう。

老女　もし私どもがこの儘でお置き申せば、王樣がいらしつてお氣づけなさるでせう、王樣は、屹度、戰でお氣が立つていらつしやいませう、フアガス樣なんぞとても手向ひがお出來になる筈はございませんから。

ラバルカム　（手を出してデヤドラに觸る）あなたはまだ先きの長いおからだです、そのこれからの長い一生をあなたの憎む人の側でおくらしなさるか、それとも西の方なり南の方にお逃げになつて、氣樂なひとり身におなりなさるか、今お極めなさるがようございます。

デヤドラ　私はエンリイやアルダンにおくれて生きて行かうとは思はない。ニイシヤにおくれてこの世で長く生きてゐようとは思はない。

老女　（興奮して）ラバルカム御覽なさいまし！　レッド・ブランチの方から出て來る灯が見えます。もう直きに、王樣とお供の人たちが松火の灯を持つて、デヤドラ樣の三人のおつれの上に照らしながら、御婚禮のお迎へに見えますでせう。

デヤドラ　（はつとして）私の三人の友人の上に土くれをかけて上げよう。ニイシヤをエンリイやアルダンと一緒に、土で隱しませう、イメンの誇りであつた此三人を。（土を投げ入れる）ニイシヤは三人の中の花、大勢の花の中の花だつた。ニイシヤ、あなたは綺麗な死に樣をしました、私はあなたの枕もとから離れはしません、「いつでも眞暗な夜、鵠や千鳥の中にひそんであなたと私はないしよ話をしてゐました。ニイシヤ、私はあなたの枕元を離れはしません、いく晩もいく晩も、あなたと私とは、ルウの谷にくつきりと立つてる樹の

中の星を眺め、山の端に足やすみしてるやうな月を見たこともありましたものを。

老女　王様がほんたうに、いらつしやいます。上衣の上に松火の光の照りかへすのが見えます。

ラバルカム　（熱心に）デヤドラお起ちなさい。そしてフアガスのところにいらつしやい、それとも、永久に、王様の奴隷におなりなさるか。

デヤドラ　（強く）私はニイシヤの側を離れまい、ニイシヤは全世界をひからびた寂しいものにして行つた。私はもう何處へも行くまい、「天は光もなく、天の下の地には一つの花もない、そして天も地も、ニイシヤはもう永久にゐなくなつたと、」私に言つてきかせてゐる。

コノール　（後方にて）デヤドラはどこにゐる。すこし後の方に退いてゐてくれ。（コノール入り來ると同時にラバルカム及び老女は左方、陰の方に行く。コノール興奮していふ）わしはイメン・マカを焦げた柱や火の燃える臭ひの中に見捨てて來た、代々の王冠の庫も燒けくづの山として見捨てて來た、さあ、あなたも、ニイシヤを見捨ててくれ。

デヤドラ　（周圍のことに前よりは氣がついて來て）王冠もイメン・マカもなんでせう？　それに光輝を與へた根元は此處にあります、その人が小石の上に寐てゐるところに、今夜は私も眠りませう。

コノール　ニイシヤの話はもう止めてくれ、イメンが燒け落ちてしまつたから、私はあなたをダンデルガンの城に連れて行かうと思つてゐる。

（コノール、デヤドラの方に近づく）

デヤドラ　（彼を抑へる調子で）ニイシヤから少し離れていらしつて下さい、ニイシヤは今から永久に若くつてゐるのです。三つの白い體から少し離れていらしつて下さい、私は「土」と枯草の山の下に葬つてやりませう——その山の下に、時が來れば私自身の席もこしらへます。」

コノール　（荒々しく）立つて、わしと出かけなさい、ここにゐれば、あなたは自分の悲しみで氣が狂つてしまふ。

デヤドラ　あなたこそ狂氣じみた事をなさつたのです、あなたの兵士や會議の席へお歸りになつて下さい、そこでは、あなたのお名は偉いお名でせう、ここでは、あなたはただの老人で馬鹿者です。

コノール　わしが馬鹿であるにしろ、わしはまだ少しの分別を持つてゐる、悲しみと大勢の人の死とで償ひ得た大切の物を捨てるほどの馬鹿はしない積りだ。（彼女の方に進み寄る）

デヤドラ　あなたの手で私にお觸りなさるな。

コノール　わしの手があなたに觸らずとも、ほかの手もある。わしの兵士たちは樹のしげみに待たせてある。

デヤドラ　誰が墓と戰ふことが出來ませう、やみの夜にまだ土もかかつてゐない墓と？

ラバルカム　（熱心に）森の中に足音がします。フアガスと部下の人達の聲が聞えます。

コノール　（激しく）フアガスもわしを支へることは出來まい。戰ひに負けた老人であるにしろ、わしはフアガスより強い。

フアガス　（デヤドラの側に來る、墓を越して向うに赤い火の光が見える）私はイメンを亡ぼして來た、これからは私があなたを保護します、知らないとはいひながら、ニイシヤを墓に連れて來たのはこの私であつたのです。

コノール　あなたにはデヤドラを護ることは出來まい、いま、私の全軍が集つて來る。さあ、デヤドラ、起ちなさい、あなたはたしかに私のものだ。

フアガス　（二人の間に來る）あなた方二人のなかに私がゐる。

コノール　（狂暴に）わしがニイシヤと兄弟たちを殺した上に、誰かれと遠慮すると思ふのか？　フアガス、あなたがわしの邪魔をするのか？　七年のあひだ、わしがイメンで死ぬほどに一人でもだえてゐたのを、あなたは見てゐた筈ではないか？

フアガス　ぬす人に對して、友を賣つた人に對して、私はどこまでも戰ふ覺悟です。

デヤドラ　（立ち上つてイメンの火の光を見る）私が悲しみに破れてゐる時に、馬鹿者らしい口論をなさるのなら、もうちつと離れてゐて下さい。（彼女向きなほる）まつくらな闇の中にイメンの火が眞すぐに燃え上がつてゐるのが見える、私ひとりの爲に、女王や軍隊や赤い黃金があつた古蹟のさびしい壁のくづれに鼬鼠や野猫が啼いて遊び廻るやうになるのだらう、滅びた都と氣の狂つた王と永久に若くてゐる女の物語が語り傳へられることであらう。（見廻す）樹々は葉もなく裸で、月が輝いてゐる。ちひさい月、アルバンのちひさい月、今夜お前はさびしいだらう、あすの夜も、そのまたつぎの幾夜も幾夜も、お前はさびしいだらう、お前がリイの谷の向うの森をあるく時、たのしく一つに眠つてゐた戀人のデヤドラとニイシヤをどの樹の蔭にもお前は探すことだらう。

フアガス　（コノールの右に行き囁く）離れておいでなさい、さもなければあなたは氣の狂つた女王を閉ぢこめることになるでせう。

コノール　氣が狂つたのはわしだ、イメンは燒けおちて、デヤドラは氣が狂つて、わしの心は方角も分らぬ。

デヤドラ　（高い靜かな調子で）私は悲しみを破れた泥靴のやうに捨てた、私の過ぎて來た一生はすぐれた人たちに羨まれるやうな一生だつた。私は卑しい家に生れて來てイメンの廣間に坐つてゐる王たちの心を苦しませたのではなかつた。賢いコノールと類ひない勇士のニイシヤに選ばれたのはつまらない事ではない。白髮にもならず、齒もぬけずに終るのはつまらない事ではない。（勝ち誇つたやうに）清らかな森の中で私たちは充ち足りた世を送つて來た、そして墓にはいれば私たちはほんたうに安全だ……

コノール　自殺しはしまいか？

デヤドラ　（ニイシヤの短劍を見せる）ニイシヤの若さを永久に閉ぢこめた牢獄の戸をあける小さい鍵を私は持つてゐる。コノール、どいて下さい、あなたの上の王である、いと高き王は私たち二人のあひだにお手をお置きなさいました。（墓の方へ半分ばかり向く）私の爲に悲しみが豫言されてはゐましたが、私の得たものは、いつも歡びでした、それでも、ニイシヤ、私があなたと一緒になりに行くところは冷たいところです。私の頸のまはりにいつでも溫かつたあなたの腕も今夜は冷たいでせう……あなたの耳に私の言葉が聞えないのに口をきくのはかなしいことです、そしてコノール、今夜あなたがイメンでなさつた事は悲しいことでした、しかし、それは生命とこの世のあるかぎり、歡喜でもあり勝利でもあるでせう。

（デヤドラ短劍を胸に突き刺して墓に落ち入る。コノールとフアガス前に出る。赤い火の影が消えて舞臺暗くなる）

フアガス　四つの白い屍體が一つに倒れてゐる、アイルランドの四つの清い光は消えた。（自分の劍を墓に投げ入れる）あなた方を救ふことの出來なかつた私の劍を捨てよう——私がいつもいちばん愛してゐた四人の友だち。イメンの焰は消えた。デヤドラは死んでも、ここに悲しみの聲を立てる人がゐない。これがデヤドラとウスナの子たちの定められた運命であらう、コノール、これで我々の戰ひも終つた。（フアガス出て行く）

ラバルカム　コノール、私の小さい小舍でおやすみなさいまし、ひどい夜露が下りてをり

ます。

コノール　（ひどく年をとつた人の聲で）わしを連れて行つてくれ。わしはもう自分の行く途も分らぬ。

老女　こちらでございます。（王と老女出て行く）

ラバルカム　（墓の側で）デヤドラは死んだ、ニイシヤも死んだ、もし樫の木や星が悲しみのために死ぬことが出來るものなら、今夜、イメンの空は暗く、地は一本の樹もない寂しい地であらうものを。

――幕――

「鑛掛屋の結婚」中にたびたび ditch といふ字がある。シヨイスに —Ditch. In Ireland a ditch is a raised fence or earthen wa'l or mound, and a dyke is a deep cutting commonly filled with water. In England both words mean exact'y the re erse.……とある。それで私は「土手」と譯しておいた。しかしサエアスタアにある The bank made of the earth that is excavated といふのが本當の意味のやうに思はれる。土手のための土手ではなく、溝を掘つた爲に出來た土手なのであらうと思はれる。on the ditch の時には土手の方で、in the ditch はそのへばか、つまり、溝の方であらうけれど、私はそれを土手下とも又ある時は土手の際とも譯した。あるひは意じが出てゐないかも知れない。

ほかの戲曲中にもたびたび二の ditch が出てゐる。

「聖者の泉」に乞食のマアチンとメリイが路傍で鼠の皮をむくところがある。愛蘭のそうした農民のあひだには、燈火のために鼠の皮をはいで、その心に二三分しの皮をつけて投し置き、それに脂をぬりつけて

燈心代用に燈燭の代りとするといふことが、シヨイスの愛蘭風俗史に出てゐる。

The Playboy of the Western World を「西の人氣男」と譯したことは、自分でも大きに不滿に思ふところである。どうかもう少し本當にちかい言葉をと思つて私は今も探してゐる。

ペトリック・ピアスの The Keening Woman といふ短篇に playboy といふ字を使つてゐるのを見出したことがある。參のために引いておく。……You'd know him easy. He's the playboy of the people. A yonng, active lad, and he well set-u . He has a white head on him, like is on yourself, and grey eyes……

それからケイリキム・ボイルの戲曲 The Eloquent Dempsy 第一幕に……*1st Voice.* Eloquent Dempsy for ever! *2nd Voice.* He sent the chief Secretary off about his business. *1st Voice.* He sells the best whisky at the lowest prices. *2nd Voice.* And backs up the teetotallers for sake of custom. *3rd Voice* (*female*) Ah, the playboy! (*Cheers off*) とある。

以上の例から見ると、大抵の中の hero といふやうな意味に見てもよいかと思ふ。その hero といふ字も俠人とか英雄とか譯すべきものでなく、だてものとか人望のある人とかいふべき hero であらうと思はれる。それから one who is full of the play-spirit といふやうな「いたづらもの」「戲謔者」といふ意味も

あるかと思はれる。しかし私の力では、とても諸先輩の教へられるいろいろ複雑な意味をひとまとめに表現すべき日本の言葉を見出すことは出來ないことである、そしてその日本語を私の譯文の中に書き入れて無雜な日本文にすることもむづかしいことである。

獨逸譯には Held といふ字が使つてあるさうである。それは、かなり正しい譯に違ひない。しかし、譯者が求めてゐるものは、hero あるひは Held を何と日本語に譯すべきかではなくて、シングが用ゐた *playboy* といふ字の譯である。私は同好の皆さんの教へをまつて正しい譯を求める積りでゐる。

「西の人氣男」中に bona fide といふ字がある。愛蘭では、日曜日にはある一定の時間のほかは酒類の販賣を禁じてあり、ただ bona fide 旅行者に對してだけ、何時いづれの店でも販賣することを許されてゐる。この bona fide 旅行者とは當日三哩以上を歩行して來たものをいふので、日曜日には bona fide 旅行者になるために、わざわざ三哩以上を歩いて、よその村の酒屋まで行つて酒をのむ者が多いといふことである。(二〇〇頁、二三八頁)

「……北光が北の方や霧のうすいところに動いたりする……watching the light passing the north or the patches of fog ……本田先生が私の原稿をよんで下さつた時これは極光であらうと云はれたので、さう譯しておいたが、愛蘭のその邊で極光が見えるかどうかといふことが多少不安に思はれた。その後はからずもエドワード・マアチンの戯曲メーヴ(Maeve)に See, the northern lights are passing before the dawn! ……といふ科白を見出した。Maeve は愛蘭西部クレーヤの山中の城を舞臺にしてゐる、シングの Playboy の舞臺は同じく西部メヨの田舍になつてゐる。メヨはクレーヤより北方に位してゐるのである、私は自分の舊譯「いたづらもの」の亂暴な譯を訂正することが出來たことを非常にうれしく思つてゐる。(二二五頁)

「北の海岸で貴婦人の鼻にかみついたつていふ男が見たくつて……」原文では……to set your eyes on the man bit the yellow lady's nostril on the northern shore ……である。

この yellow lady といふ言葉について、黄ろい髪の女であらうとも云はれるし、やきもちやきの女の意味だらうとも云はれるし、皆さんのお考へはまちまちである。又ゲエリック辭書を見ると buidhé—yellow, sunny; is used in a depreciating sense of a person と書いてあるので、あるひは卑しむ形容詞かとも考へて見たが、作者がわざわざゲエリック語を英語に譯して用ゐたらうとは信じられないことであるから、私はだいぶ迷つてゐた。しかるに先だつて本田さんが新しい意見をきかして下さつた、それは、愛蘭古代の高貴の婦人たちはおもに黄ろい服を着たといふことを讀んだから、yellow lady は身分ある婦人の意味ではなからうかといふことであつた。私は、貴婦人と譯しておいて、さらに研究して見るつもりでゐる。

「何時だつたか他が煙管で三吸ひ吸はしてやつた……」when I gave him three pulls from my pipe……とある。来友人の意見では、pipe は酒樽である、pull は drink であつて、ここでは前から酒の話が續いてゐるから、煙管ではなく樽であらうといふことであつた。いろいろ考へて見たが my pipe といふ my があるので私には樽と譯す氣になれないで、やつぱり前どほり煙管としておいた。(二五三頁)

「悲しみのデヤドラ」——Deirdre of The Sorrows はシングが病中からかけて未完成のまま殘した作である。西海岸の僻地発きから彼がグレゴリイ夫人に書き送つた手紙を訳へ。

January 3. 1907. I have done a great deal to Deirdre since I saw you, chiefly in the way of strengthening motives and recasting the general scenario; but there is still a good deal to be done with the dialogue and some scenes in the first act must be rewritten to make them fit in with the new parts I have added. I only work a little every day, and I suffer more than I like with indigestion and general uneasiness inside..... The doctors are vague and don't say much that is definite.....

その後彼はあまり長くは生きてゐず、一九〇九年の三月二十四日ダブリンの病院で死んだ。

その後グレゴリー夫人等が力をあはせて彼のいつたやうにしてやつたのである。We have done our best for Synge's work since we lost him, as we did while he was with us here..... グレゴリー夫人はその日記に書いてゐる。

デヤドラ——Déirdre は "Dare-dra" と讀むので、alarm の意味であるとイエイツは言ふ。

ラヤヌカム——Lavarcam は古くからは Leborcham である。

コヘール——Conchubor は Conochar とも Concober とも Conor とも書かれてゐる、英は「ヒ」とらへた英語ちかにコヘールと讀んでおく。イエイツの家圖文學史の註を訳へ。

Conor—In Irish, Concober or Conchubhair, a name of which the English have made Conor, almost in accordance with the pronounciation. .....This name is written Concobar in the ancient texts, and Conchúbhair in the modern language, pronounced Cun-hoo-ar or Cun-hoor, whence the Anglicised form Conor.....(以下略す)

ニイシャ——Naisi—Naoise (Neesha)と書かれてゐる。愛蘭風によめばニイシャといふべきであらうが、たびたびシングの原文をよみ返して見ると、どうも英語よみにナイシイあるひはネイシイと讀んだ方が作の音調を亂さないやうに感じる。よむ人たちの隨意によまれる方がいいと思ふ。

イメン・マカ——Emain-Macha　あるひはヱミン・マカと讀むべきものか、私には分らない。

ヱイドにはヱマニヤ(Emania)としてある。アルスタアの首都としてキンベイ王の建つるところ、大王コノール及びレッド・ブランチ勇士等の城趾、紀元三三一年に亡さる、とある。

ジョイスによれば、Eamhuin—Emania——アルマの西一哩半ぐらゐの地、むかしエイ・ルウ王の女、金髪のマカが父王の死後敵をほろぼして父の友人キンベイ王と結婚し、アルスタアの女王となつた時、戰勝の記念として建てたアルスタアの都、六百年の後、紀元三三〇年ころ亡された、現今のネヴン・フォートの古跡がさうである、と書いてある。左に原文を引いておく。

……Three Kings, Aedh-ruadh(Ayr.o), Dihorba, and Ciombaeth(Kimbay), agreed to reign each for seven years in alternate succession, and they each enjoyed the sovereignty for three periods, or twenty-one years, when Aedh-ruadh died. His daughter, the celebrated Macha of the golden hair, asserted her right to reign when her father's turn came, and being opposed by Dihorba and his sons, she defeated them in several battles, in one of which Dihorba was killed, and she then assumed the sovereignty.

She afterwards married the surviving monarch Kimbay, and took the five sons of Dihorba prisoners. The Ultonians proposed that they should be put to death: —"Not so" said she, "because it would be the defilement of the righteousness of a sovereign in me; but they shall be condemned to slavery, and shall raise a rath around me, and it shall be the chief city of Ulster for ever."……And she marked for them the dun with her brooch of gold from her neck, so that the palace was called Eomuin or Eamhuin, from *eo*, a brooch, and *muin* the neck.

The proper Irish form is Eamhuin, which is pronounced Aven, Emania being merely a latinised form.

ゲンヂリイ夫人の Gods and Fighting Men 中には Emhain は Avvin とある。けつきよく私ども日本人は何と讀んでもよいのであらうと思ふ、Aven はヱヴヱンで Avvin はヱミンでよいかと思ふが、シングの作中のは Emhain でなく、Emain である、それ故私はイヱーツの The Wanderings of Oisin の詩中の ……The floor of Emen's hosting hall…… とある英語の讀方にして、この譯にはイメンとしておきたいと思ふ、それが日本語にはいちばんよく落ちつくやうに思ふから。

六篇の戯曲中、固有名詞の分らないのはみんな辭手によみ流してある、それからマイケル・ヴアン (Mi

chael Byrne)と敎へられてゐるのでも、自分の勝手にマイケル・ビルンと讀んでゐる、その例がほかにも澤山ある、Nora をある時はノラとよみ、ある時はノーラとも讀んでゐる、不統一の感じはするが、譯したその時その時の氣分のままにしておいた。

Playboy の譯は全部本田增次郎先生に御覽を願つたものである。ちやうど私がこの戲曲集の譯にかかつてゐる時、帝大で市河三喜先生がシング戲曲の講義をしてをられたので、直接にまた間接に、たくさんのお敎へをいただくことが出來た。

譯　者

大正十二年七月廿二日印刷
大正十二年七月廿八日發行
（定價貳圓）

◀シングル戯曲全集▶

譯者　松村みね子
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込　八〇〇〇　六番　七番　八番　九番
振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　電話小石川五九二番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

終